

# 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics  
Kokugakuin University

第7号



平成 26 年 (2014) 9 月発行

國學院大學研究開発推進機構  
日本文化研究所年報

第7号

目次

---

【プロジェクト活動紹介】

- 「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」 井上 順孝…… 1  
「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」  
遠藤 潤…… 6

【2013年度のトピック】

- 公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」 …… 9  
国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」 …… 10  
2013年度のCERCの活動について …… 12  
公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」 …… 14  
出張報告 研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開  
による鹿児島調査（2013年3月） …… 17  
出張報告「ハーバード大学ライシャワー日本研究所設立40年記念会議」 井上 順孝…… 19  
日仏会館討論会「宗教・ライシテ・道徳」 井上 順孝…… 20  
出張報告「国際比較神話学会」 平藤喜久子…… 21  
出張報告「ボーダリング・ザ・ボーダレス：東アジアにおける  
近代仏教の諸相」 星野 靖二…… 23  
出張報告「世紀転換期の米国における日本宗教の提示についての  
研究」鹿児島・京都調査 星野 靖二…… 25

【研究論文】

- 宗教文化教育の教材としての映画 井上 順孝…… 26  
資料紹介 河合博之駐ポーランド特命全権公使の改宗と客死  
（1933年）—『無原罪の聖母の騎士』誌より— 加藤 久子…… 58  
講演録 イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる  
—教育の現場を事例に— ジュリア・イブグレイヴ著／間永次郎訳…… 67

【スタッフ紹介】 …… 78

【出版物紹介】 …… 87

【テレビ放映・番組紹介】 …… 88

カバー写真：朝熊岳金剛證寺（三重県）。神宮の鬼門を守るとされる。

撮影：ノルマン・ヘイヴンズ



## 「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

### 1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」は、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(2007～2009年度)、「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」(2010～2012年)の両プロジェクトを継承し、2013～2015年度の三年計画で始められたものである。以下では、本プロジェクトの初年度となった2013年度の成果を紹介した後、2014年度の計画について概要を記したい。

本プロジェクトには、これまでのプロジェクトと共通して大きく二つの柱がある。一つは、2009年から運用が開始された「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>) について、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと連携しながらその円滑な運営を図り、使いやすさやシステム面の改善を進めることである。もう一つは、プロジェクト独自の調査・研究を進め、それに基づく資料・データの収集や分析をした上で、それらをデジタル・コンテンツとして研究・教育に資するように公開していくことである。

さらに本プロジェクトでは、これまでに整備・展開がなされてきたコンテンツの蓄積を、宗教文化に関わる教育活動を充実させるために活用・還元していくという側面を特に重視している。

この点については、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究 (B)「宗教文化教育の教

材に関する総合研究」(2011～2014年度)、ならびに「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク、本研究所内に設置)との緊密な連携を取りながら進めていくものである。

2013年度の本プロジェクトメンバーは以下の通りであった。

責任者 井上順孝  
分担者

専任教員：平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高、鈴木聡子

兼任教員：ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、斉藤こずゑ

客員研究員：市川収、カール・フレーレ

PD 研究員：李和珍、加藤久子

研究補助員：天田顕徳

客員教授：ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘

共同研究員：ヤニス・ガイタニディス、キロス・イグナシオ、市田雅崇、今井信治、小堀馨子、野口生也、村上晶、山梨有希子

### 2. 2013年度の成果

#### (1)「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

2009年より運用されているデジタル・ミュージアムについては、すでに基本部分が確立されているが、さらなる改善、とくに利用者の使いやすさの向上という観点からの改

善を図るとともに、コンテンツの充実に力を注いだ。

機構内他機関の担当者、システム担当者、ソフト提供会社の担当者、機構事務課・広報課等とともに、「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」会議を定期的に行き、課題の共有と改善案の検討を継続的に行った。

2013年度には特に、データベース数の増加（現在25件を公開）に対応して、デジタル・ミュージアムのトップページの改善を進めた。

また、教材開発の推進の観点からは、スマートフォンアプリを活用したコンテンツ公開・発信が複数試みられた。すなわち、様々な地図を表示するアプリ「ロケスマ」（デジタルアドバンテージ社）上で、デジタル・ミュージアム内の「神道・神社史料データベース（現代）」に基づく「全国神社マップ」が公開されるなどした。全国神社マップは現在約1,500社が対象となっており、今後逐次増やしていく予定である。

いくつかのデータベースについては、機構内他機関の担当者からの要請を受けて、入力・公開や改善作業の支援を行った。

全体的には、「教育への展開」を掲げたプロジェクトの初年度として、アクセスのしやすさ・授業等での利用のしやすさを基本方針として確認し、これを具体的に実現することに努めた。

## (2) プロジェクト独自の調査・研究等

### ◇日本宗教学会第72回学術大会公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」の共催

2013年9月6日には、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」が開催された（※本号トピック「公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」」を参照）。主催は日本宗教学会で、日本文化

研究所が共催した。講演会は9月6～8日に本学で行われた日本宗教学会第72回学術大会に合わせて企画されたものだが、同時に日本文化研究所が毎年行っている国際フォーラムに相当する国際会議としてこの講演会をあてた。

同講演会では、14時40分～17時40分の3時間にわたり、3名の講演があった。講演者とタイトルは以下の通りである。

- ・Michael Witzel氏（ハーバード大学教授）  
“Out of Africa: Tracing Early Mythologies by a New Approach, Historical Comparative Mythology”
- ・長谷川真理子氏（総合研究大学院大学教授）  
「進化生物学から見た宗教的観念の心的基盤」
- ・芦名定道氏（京都大学教授）  
「現代の思想状況における宗教研究の課題—キリスト教研究の視点から—」

司会：井上順孝（國學院大學）

二百数十名の来場者があり、これからの宗教研究における多分野・多領域にわたるネットワーク構築の重要性が示された内容となった。

講演会の内容を編集したものが、精神文化映像社の厚意により10月30日にスカイパーフェクトTVの216チャンネル（精神文化の時間）で1時間番組として放映された。また、同講演会の内容をもとに、描き下ろしの部分を加えた書籍が、井上順孝編『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点—』（平凡社）として2014年8月に刊行された。

### ◇国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」の開催

2014年2月13日には、國學院大學学術メディアセンター5階会議室06において、本研究所の主催、科学研究費補助金基盤研究



(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」の共催によって、国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」が開催された（※本号トピック「国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」」を参照）。

同フォーラムは、13時から17時30分の間、4名の発題とコメント、討議が行われた。発題者と発表のタイトル、コメンテーター、司会は以下の通りである。

・[基調講演] ジュリア・イブグレイブ (Senior Research Fellow, Warwick Religions and Education Research Unit, Centre for Education Studies, University of Warwick, England)

・アンキタ・ジャイン (東京大学大学院)

「発題：インド宗教をめぐる」

・野田ドリット

「発題：ユダヤ教をめぐる」

・クレイシ・ハールーン (ジャパン・イスラミック・トラスト)

「発題：イスラームをめぐる」

・コメンテーター：小田淑子 (関西大学)

・司会：井上順孝 (國學院大學)

宗教文化を教育・学習する際の注意点などについて、活発な質疑応答が交わされた。

#### ◇ EOS の拡充

2013年度には、英文のオンライン神道事典 Encyclopedia of Shinto (EOS) の充実・改善作業が継続して進められた。

アップロード済みの本文内容をチェックし、統一性・整合性を確保する作業については、年度を通じて継続的に実施された。

付録としての年表については、簡易版の作成が行われ、ベータ版がアップロードされている。全訳にあたる詳細版についても、校閲作業が進められた。

EOS 本文の一部の韓国語への翻訳も予定

通り進行した。「第四部 神社」はアップロードされ、「第八部 流派・教団と人物」(計180頁程度)は翻訳が完了し、校閲作業を行い、アップロードの準備が整えられた。

#### ◇ 双方向論文翻訳

本プロジェクトでは、神道・日本文化に関する優れた研究を国際的に発信するため、また海外の研究を日本に紹介するために、日本語から外国語、外国語から日本語への「双方向論文翻訳」を行って、ウェブで公開する事業を進めてきている。

2013年度には、次の3論文を選定して翻訳を行った。日本語から英語へのものが1点、英語から日本語へのものが2点である。

日本語から英語へ翻訳された論文

・井上寛司「中世神社史研究の課題—“顕密体制論”の批判的継承・発展のために—」(英訳 Unresolved Issues in the Study of Medieval Shrine History: for a critical inheritance and further development of the “*kenmitsu taisei theory*” 翻訳者：SWANSON, Eric)

英語から日本語へ翻訳された論文

・NAKAI, Kate W., “Coming to Terms with “Reverence at Shrines”: The 1932 Sophia University–Yasukuni Shrine Incident” (邦訳：「神社参拝」と向き合う—1932年上智大学靖国神社事件—」 翻訳者：冨澤宣太郎)

・McGuire, Mark P. “What's at Stake in Designating Japan's Sacred Mountains as unesco World Heritage Sites?: Shugendo Practices in the Kii Peninsula” (邦訳：日本における霊山のユネスコ世界遺産化に関わる問題—紀伊半島における修験道の実践—」 翻訳者：黒田純一郎)

#### ◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

これまで本研究所で収集してきた教派神道（神理教・神道修成派など）ならびに神道系新宗教関係の文書資料については、デジタル化作業を進めてきた。2013年度には、神道系新宗教関係のものを中心にデジタル化作業と公開用メタデータの整備作業が進められた。神理教関係のデータの公開を継続していくにあたり、神理教大教庁（北九州市小倉南区）に赴き、巫部祐彦管長との打ち合わせを行い、今後の方針について了承を得た。

#### ◇現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築ならびに公開

宗教文化推進センター事業、ならびに前述の科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」と連携する形で、宗教文化の教育と学習に資するための現代宗教に関する資料・データの収集とデータベースの構築が進められた。

具体的には、すでに公開されている「博物館と宗教文化」「宗教文化を学ぶための基本書案内」「世界遺産と宗教文化」データベースの充実化の作業が集中的に行われた。また、「宗教文化に関する基本用語クイズ」（三択形式）も300題あまり作成され、公開された（いずれも宗教文化教育推進センターのサイト（<http://www.cerc.jp/>）を参照）。また、「博物館と宗教文化」「世界遺産と宗教文化」については、前述の地図アプリ「ロケスマ」上でも公開が開始された。

#### ◇科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」との連携

本プロジェクト責任者の井上順孝を研究代表者とする本科研費研究には、本プロジェクトメンバーの黒崎浩行、平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高が連携研究者となって研究を進めている。また、本学神道文化学部の西岡和

彦、加瀬直弥も連携研究者となっており、教員間でのネットワーク形成を図っている。

2013年度には、同科研ならびに「宗教と社会」学会の「宗教文化の授業研究会」プロジェクトと連携して、2014年1月19日に霊友会（東京都港区）の見学研究会が実施された。詳細については、下記の同科研サイトを参照（<http://www2.kokugakuin.ac.jp/erc/index.html>）。

### 3. 2014年度の研究計画など

#### ◇「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

デジタル・ミュージアムの運営については、ワーキンググループ会議におけるメンバー間の情報共有・意見交換をより密に行い、システムと使いやすさの改善・整備を図っていく。

特に2014年度は、國學院大學博物館が中心となり平成26年度文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」に申請した「東京・渋谷から日本文化を発信するミュージアム連携事業」が採択され、現在各種の事業進められている。連携事業で収集された資料の公開、事業成果の公開などは、本デジタル・ミュージアムの作業とも大きく関わるので、連携を強化しながら事業を進めていく。日本文化研究所は宗教文化教育の推進という観点から若手育成や公益財団法人・東洋文庫との連携による研究などを推進に力を注ぐ。

また、本デジタル・ミュージアムのコンテンツが広く利用されるためには、本学・本機構、ならびにデジタル・ミュージアムの入口となる英語版サイトの改善・再構築が急務となっている。その検討・構築作業も集中的に中心となって行っていく。



#### ◇EOSのチェックと改善

EOS本文の改善作業は、ネイティブチェックを中心に継続していく。

年表の英訳が終了したので、これをPDFとしてアップロードする。また簡易版については、さらに使いやすさを改善していく。

韓国語訳「第八部 流派・教団と人物」のアップロードを行い、表示のチェックを進める。

EOSはもとの『神道事典』の本文、資料篇のほとんどが英訳され、公開されることになるので、広く国内外で利用してもらうため、内外の研究者・研究機関への広報活動を積極的に行っていく計画である。

#### ◇双方向論文翻訳

神道・日本文化に関する論文の双方向翻訳については、2014年度も4本程度の論文の翻訳を予定している。

また、利用しやすさ、ならびに各ファイル情報管理の改善を進める。

#### ◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

デジタル・ミュージアム内の「教派神道関連資料データベース」において、神理教・神道修成派・神道系新宗教関係資料のコンテンツの充実化に取り組む。

#### ◇教育への活用の重視

継続して宗教文化教育推進センターと連携して、教材作成を進める。具体的には宗教文化士試験の過去の試験問題について解説を付していく。また、2014年11月16日に第7回が実施予定の宗教文化士認定試験（第6回は6月29日に実施済み）事業などに、本プロジェクトも協力していく。

科研費研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」は最終年度を迎えるので、その総括の事業に本プロジェクトも関わっていく。

#### ◇国際研究フォーラムの開催

2014年度は、9月27日に國學院大學渋谷キャンパス学術メディアセンター1階常磐松ホールにて、国際研究フォーラム「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジ」が計画され、実施された（※内容の報告は2015年度に刊行される『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第8号に掲載の予定）。

## 『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする 国学の『古事記』解釈の研究』

プロジェクト責任者 遠藤 潤

本研究事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、「神道・国学研究部門」の研究事業として、平成26年度単年度の期間で行われるものである。

同部門では、平成25年度まで3か年にわたって『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』研究事業を実施し、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまに行われている国学研究の連携のための組織づくりを進めてきた。今回、平成26年度に実施する研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究』は、この活動の展開として計画されたものであり、同時に全学的な取り組みである『古事記』研究の一環として行われるものである。まず、後者について説明したい。

### 21世紀研究教育計画委員会研究事業『『古事記』の学際的・国際的研究』

本学では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきた。『古事記』については、伝統的には国学の総合性のもと、河野省三、折口信夫、武田祐吉など文学や神道学をはじめとしてさまざまな分野からの研究がなされてきた。しかしながら、近年人文学の専門分化に伴って『古事記』研究も精緻化が進む一方で、分野を越えた研究の全体像はやや見えにくくなっているといえる。

そのような状況のもと、國學院では文部科

学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」および文部科学省選定オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」において、國學院における古典研究の今日的な評価と再検討を進めてきた。

平成24年11月、國學院大學は「21世紀研究教育計画（第三次）」を発表したが、そのうち研究基盤整備に関する計画では「日本文化の国際的理解に向けた研究（国際日本学）の推進」が提起された。これにもとづき平成25年10月より21世紀研究教育計画委員会の定める研究事業として『『古事記』の学際的・国際的研究』（研究代表者 武田秀章・谷口雅博）が開始された。

この研究事業では、『古事記』を焦点とし、これまで國學院で展開してきた『古事記』など古典についての研究成果をふまえて、今日の研究状況に即した多方面からの研究を行う。展望としては、10年単位で構想される研究事業ではあるが、今回はその始動にあたる1年半の事業を計画する。この事業は、I『古事記』の本文校訂・訓読・現代語訳とII『古事記』解釈史・研究史の研究からなる。

Iについては、國學院の『古事記』・『日本書紀』研究の蓄積を基礎として、今日の諸研究を本文に即した解釈の視点から再検討しつつ、それらをふまえた新しい解釈と現代語訳を提示する。

IIについては、国学史、歴史学、民俗学、神話学、考古学の人文諸学の観点から『古事



記』の現代的理解についての検討を進める。國學院の歴史学ではすでにCOEにおいて〈東アジアのなかの古代日本〉という視点にもとづく研究が遂行されたが、ここでもこれに立脚しつつ『古事記』と古代日本社会の関係について考察する。また、文学・民俗学においても東アジアとの比較という視点を重視し、さらに、海外における『古事記』研究の歴史と現状を調査するとともに、海外の神話・説話との比較検討を行い、その基底にある文化の共通性と異質性を把握し、このことによって世界の中の『古事記』の位置や価値を考える。前近代において、『古事記』の研究・解釈を主として進めてきたのはいうまでもなく国学者たちであるが、国学による『古事記』解釈史については研究開発推進機構日本文化研究所「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」を進めるとともに、関係の研究者がこれと連携・協働する。具体的には、解釈史に関して時代別に区分した、(1) 近世前・中期（寛永版本～賀茂真淵）、(2) 近世後期（本居宣長～幕末期）、(3) 近代、またこれらとは別に、検討すべき分野として、(4) 神話学・民俗学・人類学、(5) 戦後歴史学における令制以前研究、あわせて5つの分野に細分化される。これらの研究を通して得た『古事記』研究の成果を論集にまとめて刊行し、世界に開かれた『古事記』学構築を目指す。これらのうち、日本文化研究所の神道・国学部門では、Ⅱの(1)から(3)について分担して研究事業として遂行する。

## 日本文化研究所「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究

この研究事業の担当者は下記の通りである：

遠藤潤（研究代表者、神道文化学部准教授、研究開発推進機構准教授〔兼任〕）  
松本久史（神道文化学部准教授、研究開発推進機構准教授〔兼任〕）  
塚田穂高（研究開発推進機構助教）  
早乙女牧人（研究開発推進機構PD研究員）  
武田幸也（研究開発推進機構PD研究員）  
齋藤公太（研究開発推進機構研究補助員）  
林淳（愛知学院大学教授、研究開発推進機構客員教授）  
一戸渉（慶応義塾大学准教授、研究開発推進機構共同研究員）

この研究事業を実行するにあたっては、これまでの研究事業で形作ってきた「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を基礎として研究活動を行う。同プラットフォームでは、Ⅰ 国学に関する基礎的研究、Ⅱ 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開、Ⅲ 国学に関する研究連携のための組織づくりを大きな3つの研究の柱としてきたが、今期の研究事業においても、この枠組にしたがって、『古事記』の解釈史の把握を目指す。以下、それぞれの柱にしたがって、研究の概要を示すこととする。

### Ⅰ 国学に関する基礎的研究

国学に関する基礎的研究として、ここでは『古事記』の解釈史の研究を行う。先に示したように、対象となる時代を三区分別し、(1) 近世前・中期（寛永版本～賀茂真淵）、(2) 近世後期（本居宣長～幕末期）、(3) 近代の各時期における『古事記』解釈について、どの

ような解釈・研究があったのか網羅的な調査を行い、文献リストを作成する。それとともに、主要な解釈・研究や校訂された本文については内容を検討して、その特徴を研究会での報告や論文として発表する。

## Ⅱ 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開

ここでは、日本文化研究所の研究活動の成果のうち、神道・国学に関する基礎データの整理・公開を行う。Ⅰにおける『古事記』の解釈史研究の成果のみならず、研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」(平成23～25年度)をはじめとする研究開発推進機構における神道・国学に関する基礎的データの整理およびデジタル・ミュージアム等における公開を視野に収めている。

なかでも右の研究事業で作成・整理した、平田篤胤の著書『靈能真柱』および『古史伝』等についてのデジタルデータは、『古事記』や『日本書紀』の解釈にも深く関わるものであり、今期の『古事記』の解釈史研究においても基礎的データとして活用範囲の広いものである。これらを研究に資する形に整えるとともに、デジタルの形態でウェブサイト上で公開することによって、より多くの人の利用の便宜を図る。

## Ⅲ 国学に関する研究連携のための組織づくり

先行する研究事業ですでに国学研究会の運営を行ってきたが、今回の研究事業では『古事記』に関しては、21世紀研究教育計画委員会研究事業全体における『古事記』解釈の検討会に参加するとともに、広く神道・国学を対象とし、これまで継続的に開催してきた国学研究会をひきつづき行い、学内外の研究者に参加を呼びかけ、神道・国学に関する情報の交換・共有を行い、「国学研究プラットフォーム」としての役割をさらに強化するよう努める。

以上が、研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」の背景ならびに事業内容の概略である。包括的な研究事業である21世紀研究教育計画委員会研究事業の進行にあわせて、今回の研究事業は単年度で実施される。「國學院大學 国学研究プラットフォーム」という拠点の充実を、具体的な研究対象に即して進めるというのが日本文化研究所神道・国学部門の役割であり、今期は『古事記』を対象として、多角的な研究ならびに研究交流の推進を図っていく。



## 公開学術講演会

### 「ネットワークする宗教研究」

2013年9月6日、國學院大學学術メディアセンター一階の常磐松ホールで日本宗教学会主催・國學院大學日本文化研究所共催の公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」が開催された。これは國學院大學を開催校として、行われた第72回日本宗教学会学術大会の第一日目の企画である。

日本文化研究所ではこのところ毎年秋に国際フォーラムを開催しているが、日本宗教学会の開催校になったので、共催の講演会という形をとることとなったものである。

講師としてお願いしたのは、ハーバード大学教授で比較神話学者のマイケル・ヴィツェル (Michael Witzel) 氏、総合研究大学院大学教授で生物学者の長谷川眞理子氏、京都大学教授でキリスト教神学の研究者である芦名定道氏の三人である。趣旨説明と司会は、開催校の実行委員長で講演の企画責任者でもある井上が務めた。

ヴィツェル氏は、国際比較神話学会の会長の任にもある。2009年に國學院大學を会場に国際比較神話学会が開催された折にも日本文化研究所の教員と意見を交換したことがある。インド学者として高名であるが、最近は関連分野の研究を参照しながら、世界の神話を総合的に比較していく試みを始めている。会議直前に刊行された同氏の名著 *The Origins of the World's Mythologies* は、翻訳すれば『世界諸神話群の諸起源』という意味になり、その壮大な構想が反映されたタイトルであることが分かる。

長谷川眞理子氏は、生物学、ことに進化生物学で非常に有名な研究者である。『進化と

人間行動』(東京大学出版会、2000年)、『生き物をめぐる4つの「なぜ」』(集英社新書、2002年)、『ヒトの心はどこから生まれるのか—生物学からみる心の進化』(ウェッジ、2008年)、など多数の著書、また翻訳がある。宗教研究とはかなり離れた分野と思う人もいるかもしれないが、最近の研究動向は両者の意外な近さを指摘し始めている。

芦名定道氏は日本宗教学会の常務理事であり、キリスト教神学やキリスト教思想が専門である。しかし、近年は『脳科学は宗教を解明できるか?』(春秋社、2012年)というタイトルの書籍を編集するなど、ニューロサイエンスと宗教研究の関係に強い関心を抱いている。

それぞれ50分ほどの講演をお願いしたが、日本宗教学会の会員の他、いつも日本文化研究所の国際フォーラムに関心を示している研究者も聴講した。1990年代頃から急速に発展したニューロサイエンスの分野、そしてそれに刺激を受けて新たな展開を見せている認知科学の諸領域では、宗教研究にとっても参照すべき重要な研究成果が出てきている。こうしたことに目を広げていくという意味においても、非常に刺激的な講演会であったと言える。

なお、講演会の様子は、スカイパーフェクトTVで2013年10月30日に一時間番組として放映された他、講演の内容と趣旨を書き下ろしたものが、約1年近くをかけての編集され、井上順孝編『21世紀の宗教研究』(平凡社)として2014年8月に刊行された。

(井上順孝)

## 国際研究フォーラム

### 「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」

2014年2月13日（木）、日本文化研究所主催、科学研究費基盤（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者：井上順孝）の共催により、国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」を開催した。

本フォーラムの趣旨は、様々な民族的・文化的背景を持つ人々が日本社会で生活するという局面に焦点を合わせ、そこでどのような状況が生じているのかを検討し、その際にそこに宗教文化がどのように関わっているのか、とりわけ戒律をめぐる問題について議論するというものであった。これは研究所がこれまで推進してきた宗教文化教育を背景とするものであり、かつ日本社会における現在進行形の問題として検討していかなければならないという問題意識において本フォーラムは企画された。

登壇者について、まず英国ウォリック大学のジュリア・イプグレイヴ氏（Julia Ipgrave, Senior Researcher, Warwick Religions and Education Research Unit, Centre for Education Studies, University of Warwick, England）に多民族・多宗教状況下にある英国における宗教教育について「イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる——教育の現場を事例に」という題目の基調講演をお願いした（※その日本語訳を本号に講演録として掲載）。

続いて、実際に日本で生活する上で、様々な宗教文化の実践との関わりでどのような問題や注意点があるのかについて、三名の方よりそれぞれの経験や思うところについてお話

を伺った。まずインドからの留学生でありジャイナ教の実践者であるアンキタ・ジャイン氏より「インド宗教をめぐる」という題目で発題があり、次にイスラエル出身の野田ドリット氏より「ユダヤ教をめぐる」という題目で発題があった。最後にジャパン・イスラミック・トラストのクレイシ・ハールーン氏より「イスラームをめぐる」という題目で発題があり、その後小田淑子氏（関西大学）のコメントを受けて参加者全員による総合討議を行った。なお、冒頭の趣旨説明と全体の司会を井上順孝が務めた。以下、発題と議論の概要を記す。

ジュリア・イプグレイヴ氏の基調講演は英国社会において宗教的・文化的な多様性がどのように取り扱われてきているのか、またそれが教育の現場にどのような影響を与え、あるいは具体的に実践されているのかについて、1980年代頃から現在に至るまでを中心に歴史的な変遷に目を配りながら論じるものであり、議論の中でイプグレイヴ氏は英国における信仰学校について触れた。信仰学校のあり方は多様であるが、いずれもある信仰共同体と結びついて運営され、その信仰共同体の持つエトスを重視する点においては共通しているという。そして、ある信仰共同体がその子弟の信仰を育んだり、あるいはその価値観を継承したりしていく際に、こうした信仰学校が大きな役割を果たしていることが指摘された。

続いて、アンキタ氏からインドの宗教文化について発題がなされた。アンキタ氏はインド出自の諸宗教と、外からもたらされて根付

いた諸宗教についてスライドを交えながらそれぞれの概要などを示し、インドの地で多様な宗教伝統を奉じる人々が共生していることについて述べた。そして、もともとインドにおいて自分と異なる宗教伝統を奉じる人々と日常的に交流しているため、例えば日本のように異なる宗教文化を持つ社会においても、その違いを尊重して適応することができること論じた。

次に、野田氏よりユダヤ教の宗教文化について発題がなされた。野田氏は、苦労話を織り込みながら自身のこれまでの日本での生活を振り返り、現状に深刻な問題があるわけではないが、あえて問題点を挙げるならば日本ではユダヤ教やイスラエルについてそもそも知識が乏しく、正しく理解されていないように思うとした。これと関連して、世代間の継承において次世代の者がユダヤの宗教文化を誇りに思うことができないような感覚を持ってしまう可能性があることを指摘した。また日常的な信仰実践について、コーシャー（食事規定）などユダヤ教の戒律を簡単に紹介した上で、日本社会で生活する上でこれらを厳密に守ろうとするならば難しい点があることについて触れ、自身は折り合いを付けながら次世代にユダヤの宗教文化を伝えていこうとしていると述べた。

最後に、クレイシ氏からイスラームの宗教文化について発題がなされた。まずイスラームは生活の全ての領域に関わるものであり、狭義の宗教としてのみ捉えるべきではないとした上で、日本社会においてムスリムであることの問題については、外国から来た人がムスリムとして生活するよりも、日本人がムスリムとして生きようとする場合に社会的な障壁が多いと指摘した。そして全く問題がないわけではないにせよ、全体としてはイスラームについての理解が進みつつあるとし、戒律に関しても、例えば食べ物などについてはそれ程大きな問題となっていないとした。その

上で、あえて指摘するならば子弟教育の問題があるとし、イスラームの価値観を伝える学校があってほしいと述べた。

休憩を挟んで討議に移り、まず小田氏よりコメントがあった。小田氏は英国と日本の状況を比較した上で、信教の自由、そして異なる宗教文化を尊重するという姿勢を日本社会においてどのように育んでいくことができるのかという問題提起を行った。関連して司会より、日本には他宗教に寛容な土壌があるという見方もあるが、まだ本格的な多宗教状況を経験していないという側面についても考えなければならないのではないのかという補足がなされた。

その後の議論では、例えば食事に関する戒律を日本で守ろうとする場合の問題点が取り上げられ、実践において柔軟さが必要であるという見解が示された。これと関連して、もし戒律を守れなかった場合にどうなるのかということについても議論があったが、必ずしも罰則があるから守るというような感覚で行われているわけではないことも述べられた。

また日本の宗教文化との関係では儀礼、例えば冠婚葬祭などへの関わり方が論じられた。登壇者からは、厳格な解釈が存在することとは別に実践における柔軟な対応が述べられたが、しかし例えば仏式の葬式に参列はするが焼香はしないなど、守るべき点があることも述べられた。

全体を通して、戒律にまつわる問題と関連して、子弟教育の問題が浮かび上がってきたように思われる。いずれにしても、このフォーラム自体が得がたい機会であり、議論を通して、今後はホスト社会の側が多様な宗教文化的背景を持つ者たちの多様な参与のあり方を承認する方向へと向かっていくことが必要となるのではないのかという基本的な方向性が確認された。

(星野靖二)

## 2013年度のCERCの活動について

2011年1月に発足した宗教文化教育推進センター（通称CERC）は3年を1期としているために、2013年度をもってひとつの区切りを迎えた。この間に5回の宗教文化士認定試験を行い、計243名の受験申請者のなかから、144名の宗教文化士が誕生した。また、教材作成においても、2011～2014年度科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者井上順孝國學院大學教授）と連携して、「宗教文化を学ぶための基本書案内」、「世界遺産と宗教文化」、「映画と宗教文化」、「博物館と宗教文化」、「宗教文化に関する基本用語クイズ」という5つのコンテンツを作成、公開している。そのうち、「世界遺産と宗教文化」と「博物館と宗教文化」についてはスマートフォン向けアプリを開発しているデジタルアドバンテージ社の「ロケスマ」を用い、スマートフォンで地図と連動して活用できる形で提供している。

第1期のうち2012年度までの活動報告は『日本文化研究所年報』第6号を参照されたい。以下では、2013年度の活動内容として1.宗教文化士認定試験について、2.宗教文化士へのサポートについて、3.宗教文化教育推進のための教材作成について、それぞれの詳細と今後の展望及び課題を報告する。

### 1. 宗教文化士認定試験について

第4回認定試験は2013年6月30日（日）、北海道大学・東北大学・國學院大學・皇學館大学・関西学院大学・龍谷大学・天理大学の7つの大学で行われた。受験者総数33名で、

うち合格者は22名であった。次の第5回認定試験は11月10日（日）に國學院大學と関西学院大学の2か所で実施され、受験者は42名、合格者は25名であった。

また、これまでの試験で宗教文化士資格を取得した人の所属・修了大学をまとめたところ、以下の25大学から資格取得者が出ていることがわかった。宗教文化士資格への認知が広がっていることがわかる。なお、以下のリストはCERCホームページ上で公開中であり、試験毎に更新をしている。

大谷大学、オーストリア国立ウィーン大学、関西大学、関西学院大学、皇學館大学、國學院大學、駒澤大学、首都大学東京、上智大学、清泉女子大学、大正大学、東京大学、東北学院大学、東北大学、東洋大学、同志社大学、中央大学、筑波大学、天理大学、北海道大学、八洲学園大学、立教大学、立正大学、龍谷大学、早稲田大学

### 2. 宗教文化士へのサポートについて

宗教文化士へのサポートとして、年に4回配布している「サークメルマガ」は、2013年度末までに8号までを発行した。メルマガでは、CERCの協定機関の一つである宗教情報リサーチセンターが発行している『ラク便利』から記事を抜粋し、それぞれに解説を施している。また、協定機関や大学での講演会やシンポジウム情報を掲載することで、宗教文化士たちが最新の研究動向に触れることができる機会を提供している。

CERCのHP (<http://www.cerc.jp/>) に設



けられた「宗教文化士専用掲示板」では、資格取得者から質問が投稿され活用が進んでいる。質問が寄せられた場合、事務局研究員が専門家に回答を依頼するという形をとっており、宗教文化士たちがそうした応答を掲示板で共有することによって宗教文化理解が深まることが期待される。

また、宗教文化士が優待を受けることができる協定機関として以下のものがある。今後も協定機関の拡充を図っていく。

天理大学附属天理参考館、東洋文庫ミュージアム、宗教情報リサーチセンター、國學院大學研究開発推進機構資料館

### 3. 宗教文化教育推進のための教材作成について

認定試験の際に行うアンケートでは、毎回CERCホームページの教材の利用状況を尋ねているが、およそ7割の受験者がこれらの教材を利用したことがあると回答している。現在公開しているのは以下の教材である。

- ①「宗教文化を学ぶための基本書案内」
- ②「世界遺産と宗教文化」
- ③「映画と宗教文化」
- ④「博物館と宗教文化」
- ⑤「宗教文化に関係する基本用語クイズ」

前述したように、このうちの②と④についてはスマートフォン向けの地図アプリ「ロケスマ」と連携して、表示される地図上のピンをタップするとCERCで作成している教材へとリンクされるシステムとなっている。「ロケスマ」をスマートフォンにダウンロードしたのちに、トップ画面→「コラボ・イベントマップ」→「宗教文化教育推進センター」と進み、該当マップをダウンロードすることで使用することができる。

また、受験者へのアンケートのなかで過去に出題された問題の解説を希望する声が多

かったことから、正答率が3割を切る難問については解説を作成し、CERCホームページで公開した。教材の過去問題集のページからみることができる。これ以外にもアンケートでは、書籍の形での教材を希望する声が毎回数多くみられる。書籍については、既刊の井上順孝編『世界の宗教超入門』（東洋経済新報社、2013年）があるが、2014年度に櫻井義秀・平藤喜久子編『よくわかる宗教学』（ミネルヴァ書房）が刊行される予定であり、同書は宗教文化士認定試験のテキストとしての役割を期待されている。

### 4. 今後の課題

宗教文化士資格は5年間有効であり、その後希望者は更新することができる。2016年に最初の更新が予定されており、資格更新の方法として、e-learningと講演会、メルマガに基づくレポートの提出などが計画されている。これまでで150人近い宗教文化士たちを輩出しているが、資格取得者のなかには、大学を卒業したのちに宗教文化を学ぶ機会を失う人もいることだろう。そうした人びとに対していかにして継続的な学びの機会を提供することができるのか、更新方法と内容の検討を通して、資格取得者が卒業後の生活においても宗教文化理解を深めることができる環境を整える必要がある。また今後は、仕事や生活の中で宗教文化士の資格が実際にどのように役に立っているのか、体験談を募るなどして資格活用の状況を確認する作業も必要となってくる。

受験希望者については、教材へのニーズが高いことから、現在公開中のコンテンツのさらなる充実が求められる。特にインターネットやスマホアプリでの教材提供は、受験希望者のみならず、資格取得者、また広く宗教文化に興味をもつ人びとにも価値のあるものとなるであろう。

（村上 晶）

## 公開学術研究集会

### 「國學院大學の国学研究の現在」

研究開発推進機構日本文化研究所研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」(研究代表者 遠藤潤)は、科学研究費補助金基盤研究(B)「近世における前期国学の総合的研究」(研究代表者 根岸茂夫〈文学部教授〉)の共催を得て、2014年2月8日に公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」を開催した。

この研究集会は、研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築」の構成員であるとともに、科研費「近世における前期国学の総合的研究」の研究協力者でもある松本久史(神道文化学部准教授)の立案によるもので、その開催趣旨は次の通りである。

#### 開催趣旨

「国学」の名を冠する國學院大學においては、建学以来、学問の基盤として国学の伝統が継承されてきた。附置研究所であった日本文化研究所では、昭和30年の開設以来、国学に関する研究事業が継続して行われてきた。また、平成14年度に採択された文部科学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」事業では、学際的・総合的な日本文化研究として、國學院大學の現代的な国学のあり方が示された。

現在、國學院大學では、国学四大人の鼻祖、荷田春満を研究対象とした、科学研究費補助金研究事業「近世における前期国学の総合的研究」(代表 根岸茂夫 文学部教授)および平田篤胤研究を中心としつつ、幅広く研究連携を模索している研究開発推進機構日

本文化研究所「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」(代表 遠藤潤 神道文化学部准教授)の二つの研究事業が遂行されており、ともに平成25年度で事業の区切りとなる。本研究集会においては、両事業の概要を説明し、さらに双方の具体的な研究成果を示すことにより、國學院大學における国学研究の現状を周知し、今後の展望をも示すものとした。

日時は、平成26年2月8日(土)午後1時から午後6時30分までを予定していたが、当日東京地方は激しい大雪に見まわれたため、急遽予定を変更して、発題時間などを圧縮するなどして午後4時30分終了とした。以下、当日変更後の進行時間と発題者・発題題目を示す。

- 1:00-1:10 開会、趣旨説明(松本久史)
- 1:10-1:25 発題① 根岸茂夫「『近世における前期国学の総合的研究』事業の概要」
- 1:25-1:40 発題② 白石 愛(東京大学総合研究博物館特任助教)「江戸における荷田家のネットワーク—荷田信名『在府日記』を中心に—」
- 1:40-1:55 発題③ 松本久史「荷田派の祝詞研究—稲荷祠官 大西親盛を例にして—」
- 1:55-2:10 発題④ 一戸 渉(慶応義塾大学斯道文庫准教授)「和歌史上における荷田春満の位置」
- 2:10-2:20 休憩

2:20-2:35 発題⑤ 遠藤 潤「研究事業『國學院大學 国学研究プラットフォームの構築』の概要」

2:35-2:50 発題⑥ 小林威朗(研究開発推進機構 PD 研究員)「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成」

2:50-3:05 発題⑦ 三ツ松誠(研究開発推進機構 PD 研究員)「史料から見た『靈能真柱』への同時代的反応」

3:05-3:20 発題⑧ 小田真裕(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)「嘉永安政期における気吹舎の関心—高玉安兄宛平田鏡胤書簡をてがかりに—」

3:20-3:30 休憩

3:30-4:30 コメント 古相正美(中村学園大学教育学部教授)、質疑応答、閉会

なお、林淳(愛知学院大学教授、國學院大學研究開発推進機構客員教授)も参加した。

八つの発題のうちおおよそ発題①から発題④までが根岸科研にもとづく報告、発題⑤から発題⑧までが「國學院大學 国学研究プラットフォーム」研究事業にもとづく報告となっている。

発題①「『近世における前期国学の総合的研究』事業の概要」において根岸茂夫は、同事業の概要について、研究当初の背景、研究の目的、研究の方法、研究の具体的な課題、研究の成果などについて報告した。具体的な課題としては、春満の学問が時間的・空間的に広がっていく過程の解明、春満の生家である東羽倉家および稲荷社を中心とした社会関係の解明を提示し、それぞれについての成果の概略を述べた。

白石愛は、発題②「江戸における荷田家のネットワーク—荷田信名『在府日記』を中心—」において、春満の実弟である信名による5年間の日記である『在府日記』をとりあげ、同資料に見られる人名をもとにして、江

戸における荷田家の多様なネットワークについて論じた。同資料には多方面にわたる人物が1100人以上登場し、それらの人々との間で、さまざまな活動が行われていたことの一端を紹介した。

松本久史は、発題③「荷田派の祝詞研究—稲荷祠官 大西親盛を例にして—」において、いわゆる「カノン」形成史という文脈のもと、祝詞の古典とは何かという問題意識の形成に荷田派の活動がどう関わったのかという点について、春満、在満、賀茂真淵、大西親盛の大祓詞注釈の比較によって論じた。なかでも中心的な位置を占めたのは、根岸科研に関わる國學院大學による東丸神社史料調査によって発見された大西親盛の大祓詞注釈書の内容の考察であった。

一戸渉は、発題④「和歌史上における荷田春満の位置」において、春満の和歌の特徴について、上記の東丸神社史料調査で発見された史料などにもとづきながら論じた。従来、春満が恋歌を詠まないという理解が一般化していたきらいがあるが、実際史料に即して春満の歌を検討すると恋歌が存在しているということを指摘した。また、歌会のあり方について、史料にもとづきその具体相を明らかにした。

遠藤は、発題⑤「研究事業『國學院大學 国学研究プラットフォームの構築』の概要」において、同研究事業の概略について、國學院大學におけるこれまでの国学研究とその成果、「國學院大學 国学研究プラットフォーム」事業の趣旨、また国学研究の拠点あるいはハブとして優先的に必要なこと、などについて説明した。

小林威朗は、発題⑥「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成」において、秋田県文書館蔵の草稿本『古史伝』について、その書誌情報(表紙、段構成、加筆修正等)と平田家の書簡や日記との照合により、草稿本『古史伝』の成立時期をある程度の幅で推測でき

ることを示し、これをふまえて内容分析を行うことにより、版本のみからはうかがうことのできない、『古史伝』における篤胤の思想形成過程について具体的に考察した。

三ツ松誠は、発題⑦「史料から見た『靈能真柱』への同時代的反応」において、篤胤のが神道講釈を実施していたことをふまえて、未完であった『靈能真柱』講本を評価しなおし、講本と版本のあいだを考えることで、江戸の庶民と篤胤の学問の間の距離を考える一助になる可能性を指摘した。

小田真裕は、発題⑧「嘉永安政期における気吹舎の関心—高玉安兄宛平田鏡胤書簡をてがかりに一」において、日本文化研究所を拠点として読解が続けられている、相馬地方の高玉家宛平田鏡胤書簡という資料群について、諸国への平田国学の展開と、モノと情報の両面をもつ書物のあり方という二点を観点として、嘉永元年～嘉永五年、嘉永六年～安政年間の二期に区分しながら分析した。前者の時期の特色として、気吹舎訪問や書物注文による学風の広まりへの言及が散見すること、また後者には「珍書」の送付をめぐるやりとりが目立つことや高玉家の水戸学への関心などが見られることを指摘した。

古相正美はコメントとして、根岸科研にもとづく成果については、東丸神社の調査によって新史料の発見や新知見があったこと、また白石や一戸の発表に見られるように、和学の世界のネットワークが明らかになったことなどを指摘し、この共同研究によって、歴史、神道、文学、思想などいろいろな分野か

ら同じ対象へとアプローチする形が成立したこと、またモノを見る視点が活かされたことなどを述べた。

他方、平田篤胤研究については、秋田県立図書館・秋田県公文書館や国立歴史民俗博物館など史料の所在の問題にふれた上で、現在の研究状況に立てば、本居宣長と篤胤のあいだで、門人教授や広告、書簡のやりとりなどの比較が可能なのではないかと指摘し、写本と版本の違い、特に写本や書簡は門人を中心に流通することへの注目の必要性を述べた。

松本は、荷田春満と平田篤胤の研究状況の共通性として、ともに基本的かつ大規模な資料群が悉皆調査によって明らかになった点を指摘した。林は、両者の共同研究にはテキストの精読と社会集団への考察がうまくリンクしている状況が見られると述べ、その上で、ネットワークを形成して学問を行うようになった、その時代性の評価というものも必要だと指摘した。さらに参加者からもさかんな質問や意見が出され、大雪での帰宅の心配を忘れるような熱意あるやりとりが行われた。

「近世国学の入口と出口を」という松本の発案から始まった、荷田春満と平田篤胤を焦点とした今回の研究集会であったが、近世国学研究の今までとこれからを展望する会合になった。モノとしての書物、人のネットワークを具体的に追うことができる史料群の公開。その実現がなった現在、その先に今後の近世国学研究の太い一方向があることを実感した一日であった。

(遠藤潤)



## 出張報告 研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開による 鹿児島調査(2013年3月)

旧制度以来、日本文化研究所では日本各地における国学関連の資料・文献の調査・収集につとめてきており、本研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」においても、事業の一環として国学関係の資料収集を継続的に実施してきた。そうした中、平成25年度は、平成26年3月12～14日にかけて鹿児島県歴史資料センター黎明館及び鹿児島県立図書館において国学関連の資料・文献調査を行った。これは、薩摩藩および鹿児島県が近代日本形成において重要な役割を果たした地であるとともに、近世・近代の神道・国学を考える上でも重要な地域であるという理由による。例えば、近世薩摩藩では浄土真宗が禁止されていたことをはじめ、神代三山陵の存在すること、平田国学の受容、薩摩藩と桂園派歌人の交流、幕末における藩内での廃仏毀釈等があり、明治維新以降には、明治初年に設置された国学局や、浦上キリシタン配流、薩摩出身の神道人・国学者が中央政界へ進出することによる教部省の国民教化政策への関与、神宮の東京遷座案推進等といった多くのトピックスがあげられる。また、近代神道史の画期となった神官教導職分離による神官の葬儀関与の禁止法令に「但府県社以下ハ従前之通」との文言が盛り込まれたのも鹿児島県の実情を反映してのものであった。このように近世・近代の鹿児島は、神道・国学研究という視点からも検討に値する様々な課題を有しているのである。しかし、これまで日本文化研究所の神道・国学研究部門では、昭和60年に近藤芳樹・小河一敏関係調査において鹿児島県立図書館所蔵の

『八田知紀一代略記』『白鷺洲』『鹿児島藩紀伝体和歌史』を収集するに止まっており、その後、十分な資料調査は行われてこなかった。

こうした状況を踏まえ、本年度の調査では、遠藤潤（神道文化学部准教授）と武田幸也（研究開発推進機構PD研究員）の2名が、3月12日から14日にかけて国学関係の資料・文献の調査を行った。まず、3月12日には、武田が鹿児島県立図書館において、国学者の伝記研究や著作、明治以降に薩摩藩で設立された国学局関係の資料の有無、鹿児島県内の郷土資料の所在等について、主として鹿児島県の郷土研究の確認や、郷土資料に関する目録等を手がかりとして調査を行った。国学者の著作については、『近世薩州群書一覽』や『薩摩刊書関係資料』を通して、白尾国柱、山田清安、大河内隆棟、八田知紀、岩下方平、高崎正風、黒田清綱、田中頼庸、後醍院真柱等の著作の存在を確認した。国学局については、その動向を窺わせるような具体的資料については確認できなかったが、国学局の出版した『敬神説略』を閲覧した上で資料として複写を行った。また、郷土資料に関する目録からは、他の公共図書館にも国学者の書簡や資料の存在について確認することができた。ついで3月13日には、昼から遠藤が合流し、前日から継続して鹿児島県の郷土研究や郷土資料の存在を確認するとともに、翌日の鹿児島県歴史資料センター黎明館における葛城彦一文書調査に向けての予備調査も併せて行った。葛城彦一は、大隅国始良郡加治木に生まれ、はじめ竹内伴右衛門と称した人物で、天保5年、江戸に遊学して

平田篤胤の『靈能真柱』に触れ、天保9年気吹舎に入門している。次いで、嘉永3年の自由羅騒動（別名 高崎崩れ、嘉永朋党事件）に関与して脱藩し、筑前に身を寄せ、文久3年に帰藩して葛城彦一と称し、近衛家に仕えた。また、葛城と鈴木重胤との交流も注目され、重胤の『世継草』の後序を記すなどしている。このように葛城彦一は、篤胤から直接教えを受けた人物で、幕末には近衛家の執事となるなど、薩摩藩における平田国学の受容を考える上で一つの軸となる人物であるとともに、幕末における平田派国学者のネットワークや活動を窺い知る上でも重要な人物であることが再確認できた。

以上を踏まえ、3月14日は、鹿児島県歴史資料センター黎明館において、葛城彦一文書の内、平田鋳胤の書簡と葛城彦一関係の日記について調査を行うと共に、資料として収集するための撮影を行った。書簡は、平田鋳胤からの葛城らに宛てた書簡を9点、日記は断片的であるが幕末から明治10年代はじめにかけての8点である。

書簡の調査からは、葛城と平田鋳胤や学塾である気吹舎との交流の一端が明らかになった。また、日記は長い時期を網羅したものではないが、文久3年、元治元年、明治11年など、それぞれ幕末から明治にかけての神道・国学にとって特徴的な時期のものが残っており、これらの記録は平田国学者をはじめとする葛城の多彩な交友関係を窺い知ることのできる貴重な資料であることが判明した。

明治10年代からの平田国学をめぐる論点として興味深いものの一つに本教教会があるが、今回の調査では、年欠ではあるが、いずれも明治11年のものと推測されるいくつかの書簡、すなわち8月18日付葛城君宛鋳胤書簡（葛城彦一文書 3-2396）、10月9日付葛城彦一宛鋳胤書簡（葛城彦一文書 3-2397）の調査・撮影を行った。これらは山内修一『薩摩維新秘史 葛城彦一伝』（葛城彦一伝編

輯所、1935年）にすでに翻刻が収められているものであるが、原史料を改めて確認し、その内容を検討した。日記では、「葛城彦一翁日記の断片 明治十二年日記」（葛城彦一文書 3-2498）の3月5日前後の部分に本教教会関係の記事があり、平田家から彦一宛に書籍『本教学解』、『本教略解』や「本教学神号」、「本教教会祭神号」が送られていることが確認された。

これとは別であるが、近世後期から幕末期にかけての葛城は、嘉永2年（1849）冬に気吹舎が『三五本国考』を刊行するに際して序をものしており（山内前掲『葛城彦一伝』）、嘉永3年初頭には平田家に逗留して世話になるなどしている（『歴史民俗博物館研究報告』122）。鈴木重胤との親交も知られ、太宰府天満宮での和魂漢才碑の建立にも関与している（春山育次郎『月照物語』夏汀堂、1927年、山内前掲『葛城彦一伝』など）。今回の調査では、先行研究を手がかりとして、これらの経緯についての整理を進めたが、こうした九州での彦一のさまざまな活動も、近年の平田国学研究で明らかにされている諸史料ならびにそれにもとづく諸事実との照合を基礎とした再検討が必要かと考えられる。

総論的にいえば、今回の調査では、鹿児島県内における国学研究の状況や資料の所在等を確認するに止まり、薩摩国学に関する十分な調査には至らなかったが、近世・近代の薩摩国学の重要性については再確認できた。とりわけ葛城彦一関連の資料調査によって、葛城が個人として気吹舎と関係を有していただけではなく、九州地域における平田国学関係者間のキーパーソンであったことが確認された。そのため今後は、学内および諸機関所蔵の薩摩の国学者に関わる文献・資料等について再確認・整理した上で、鹿児島県における神道・国学関係資料の調査・検討を継続したいと考える。

（遠藤潤・武田幸也）

## 出張報告

### 「ハーバード大学ライシャワー日本研究所設立40年記念会議」

2013年はハーバード大学ライシャワー日本研究所が設立され40周年を迎えた。これを記念するシンポジウムが同年9月26日、27日の両日ライシャワー日本研究所で開催された。シンポジウムのテーマは〈Japan Re-examined: Perspectives Since 1973〉であった。日本学術振興会（JSPS）国際事業部の共催であったが、私はJSPSの助成を得て会議に参加した。研究所はハーバード大学の構内にあり、研究室、会議室の他にこうした講演会、シンポジウム等のための部屋もあり、そこで二日間の会議が開かれた。

初日の26日は〈Session 1: Constitutional Revision Since 1973 & Beyond〉が行われ、4組の発題者と応答者があり、さらに質疑応答が行われた。また二日目の27日は〈Session 2: The Question of Change: Forty Years of Japan〉が行われ、4つのパネルがあった。

初日は国際日本文化研究センター瀧井一博教授、慶応大学の駒村圭吾教授、ミシガン大学のKenneth McElwain教授、コネチカット大学のAlexis Dudden教授の発表とそれぞれへの応答がなされた。夕方にはレセプションが開かれた。

二日目4つのパネルは次のとおりであった。

- ・ The End of Postwar Japan?
- ・ New and Traditional Japanese Religions in the Information and Global Age: Considering Changes Since the mid-1970s
- ・ Women and Children First? Gender Relations and Family Change Across 40 Years
- ・ The Rise of Amateur/Otaku Popular

Culture in the 1970s & Issues of Archiving  
日本からは東京大学の吉見俊哉教授、京都大学の落合恵美子教授、明治大学の森川嘉一郎准教授が発表し、私は二番目のパネルである〈Panel on Religion and Religious Studies〉で発表した。同パネルはライシャワー研究所のHelen Hardacre教授との組み合わせであった。

会議では同研究所のスタッフ、また国外から研究に訪れている若手の研究者たちとの交流の機会ももつことができ、きわめて有意義であった。また同大学の主な施設、付属の博物館をいくつか見ることができたし、図書館の一部も見ることができた。

また会議に前後してボストン美術館の見学、キリスト科学（Christian Science）の本部の見学、その創始者のメアリー・ベイカー・エディ夫人の墓所の見学などもできた。

当時、研究開発推進機構の大東敬明助教がハーバード大学に國學院大學と同大学との協定に基づき滞在していたので、学内や近郊を案内してもらった。



(井上順孝)

## 日仏会館討論会

### 「宗教・ライシテ・道徳」

2014年3月20日、日仏会館フランス事務所の主催で日仏会館（東京都渋谷区恵比寿）での公開討論会が開催された。テーマは「宗教・ライシテ・道徳 日仏の道徳・宗教教育と新たな政策」(Religion, laïcité, morale Morale laïque, culture religieuse et nouvelles politiques en France et au Japon)であった。

講師はパリ国立高等研究実習院のジャン・ボベロ (Jean BAUBÉROT) 教授と私で、上智大学の伊達聖伸准教授が司会をした。

私は戦前戦後の日本の宗教教育を戦前三期と戦後の合わせて四つの時期に分けた上で宗教教育の課題に触れた。

戦前の第一期：明治前期、すなわち1870年前後から1890年前後あたりの時期である。

戦前の第二期：1890年前後から1920年前後の時期である。

戦前の第三期：1920年代後半から1945年までである。

戦後：1945年以降現在まで

戦前については国家の宗教教育とくに宗教情操教育と道徳教育に関する関与の変遷を概略述べたのちに、現代における宗教教育の問題点について私見を述べた。

戦後の宗教教育についての議論では、宗教教育を①宗教知識教育、②宗教情操教育、③宗派教育の三つのタイプに分けて考えるのが一般的である。このうちもっとも議論になったのが、公立学校において宗教情操教育が可能であるかどうかであるが、宗教情操教育をめぐる議論は複雑であるうえにイデオロギー論争の性格が保たれているので、合意に至る可能性は乏しいことを指摘した。

そして最近ではカルト問題が浮上し、またグローバル化・情報化に対応するような新しい宗教教育のあり方が論じられるようになった。それを受けて提唱されたのが宗教文化教育であることを述べた。

ボベロ教授は「宗教文化とライシテな道徳フランスにおける新たな教育政策か」という題で発表し、フランスにおけるライシテの原則が、現在どのような局面を迎えているかについて説明した。

私の発表に対してはボベロ教授から、三つの質問があった。①日本における道徳教育と倫理の連続、とくに初等教育から中等教育にわたる教育の関係について、②宗教文化教育と宗教知識教育との違い、③「寛容」と「リスク・センシティブ」という概念に関連して、宗教文化教育と道徳・倫理教育はどう関係するか。

私もボベロ教授に対し三つの質問をした。①宗教教育とライシテをめぐる問題に関して、政府の政策とは別に、教員による問題解決のための自主的なネットワーク形成の試みはあるのか、②インターネット時代の宗教教育の難しさについてどう考えるか、③ムスリムの団体は、公立学校での宗教文化教育のようなものに、どのような態度をとっているか。

それぞれの質問に対して回答がなされたのち、出席者からも質問がいくつかなされた。両国にとって非常に大きな課題となっているテーマであったので、突っ込んだ意見交換の場になった。

(井上順孝)



## 出張報告

### 「国際比較神話学会」

2013年5月15日から17日にかけて、ドイツのテュービンゲン大学において、第7回国際比較神話学会議（国際比較神話学会、テュービンゲン大学共催）が開催され、出席し、研究発表を行ってきた。

#### （1）学会について

国際比較神話学会 (International Association for Comparative Mythology) は、ハーバード大学の Michael Witzel 教授を会長とした国際学会である。2006年にハーバード大学と北京大学の共催により、北京大学で International Conference on Comparative Mythology が開催され、その席上、本学会の設立が決まり、2007年に正式に設立した。

本学会の目的は次のとおりである。

- ・先史時代から、儀礼や考古学上の遺物、宗教のなかに見いだされる神話のさまざまな姿を文献学、言語学、遺伝学、その他関係諸科学を用い研究する。
- ・すべての人類の神話の広がりや起源を研究する。失われた神話と現存の神話を比較し、その特殊性と起源を明らかにする。
- ・世界の危機的な状況にある神話の保存に向けた取り組みをする。
- ・論文や書籍等の刊行を通して、これらの研究成果を公開する。講義や討議を目的とした公式な会合を主催する。インターネットやその他のメディアを通じた通信教育を提供する。その他の教育方法によるカリキュラムを開発する。

2007年にエジンバラ大学で開催された第1回の会議にはじまり、毎年世界各国で国際会議を開催している。本学でも2009年に第3回の会議を開催している。

#### （2）第7回会議について

今回の会議は、ドイツのテュービンゲン大学で、日本学の講座が受け入れとなった。大会責任者の Klaus Antoni 教授は、古事記のドイツ語訳を2012年に刊行しており、本学とも大変縁の深い人物である。

今回の大会テーマは Sources of Mythology: National and International Myths であり、このテーマに関連し、26名が発表を行った。基調講演の他、発表は7つのセッションで行われた。下記にセッション内容と人数を記す。

基調講演：Michael Witzel, “Marching east, with a detour : the cases of Jimmu, Videgha Mathava, and Moses”

- ・第1セッション, General comparative mythology and methodology (4人)
- ・第2セッション, National myths: Hungary and Romania (3人)
- ・第3セッション, National myths: Austronesia (2人)
- ・第4セッション, National myths : Japan (5人)

・ 第5セッション, Mythology in modern times (3人)

・ 第6セッション, Indo-European mythology (8人)

・ 第7セッション, その他 (1人、1人キャンセル)

このうち、基調講演の Michael Witzel 氏と第1セッションの発表者1名、第4セッションの発表者5名の計7名が日本神話に関わる発表を行っていた。これはこれまでの会議のなかでは多いといえる。大会責任者の Klaus Antoni 氏が日本研究者であり、氏の関連の大学院生なども発表者に加わっていることも関係するだろうが、日本神話への関心の高まりを感じた。

筆者は“Deities in Japanese popular culture”と題する研究発表を行い、現代のポップカルチャーにおける神々の描かれ方、および人間と神の関係性について分析した。神の描かれ方については、浮世絵、近代の歴史画などと



会議会場のテュービンゲン大学アルテ・アウラ  
(旧大学本館)

マンガ、アニメを通時的に比較した。聴講した学生の多くは日本学を勉強しており、ポップカルチャーへの関心がきわめて高かったため、そうした若い学生からの質問を多くうけることとなった。

なお、本会議の内容は2014年に Klaus Antoni, David Weiß (Eds.) *Sources of Mythology*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften として刊行されている。

(平藤喜久子)

## 出張報告

### 「ボーダリング・ザ・ボーダレス：東アジアにおける近代仏教の諸相」

近年、近代仏教研究が盛んに行われているが、その展開の一つの方向性は「越境」である。それは対象が「越境」しているのと同時に研究者の「越境」でもあり、以下に概要を記す国際カンファレンスも、こうした「越境」のあり方をよく示している。

2013年10月4日から5日にかけて、デューク大学（米国ノースカロライナ州）にて国際カンファレンス「ボーダリング・ザ・ボーダレス：東アジアにおける近代仏教の諸相」が開催され、一報告者として参加する機会を得たので以下に概要を報告する（なお、より詳細な報告が『近代仏教』21号、2014年8月、に掲載されている）。

同カンファレンスはデューク大学のリチャード・ジャフィとキム・ファンズ、また高麗大学校のチョ・ソンテクとアメリカン大学のパク・ジンを共同企画者とし、デューク大学と高麗大学校、そして関連する諸機関の支援によって開催された。カンファレンスの趣旨として、一国史的な枠組みを超えたトランスナショナルな視点において近代東アジア仏教を捉え直すことが述べられていたが、その延長において、対象とする事例をローカル／ナショナル／トランスナショナルといった多様な文脈の一点に回収するのではなく、その重層性において捉えるようとする姿勢も強調されていた。こうした問題意識に基づいてアメリカ・カナダ・ドイツ・アイルランド・日本から登壇者が集められ、全14本の発表からなる4つのパネルと基調講演、そして全体討議が行われた。

4日午前に行われた第1パネルには4本の

発表があり、バーバラ・アンブロス（Barbara Ambros、ノースカロライナ大学チャペルヒル校）がディスカッサントを務めた：

- ・ジャスティン・リッツィンガー（Justin Ritzinger、マイアミ大学）「失われた土地：中国のセイロン留学僧が描いたテクスト、表象、そしてユートピア」
- ・リチャード・ジャフィ（Richard Jaffe、デューク大学）「河口慧海、グローバル化、そして日本における在家仏教の振興」
- ・ブルックス・ジェサップ（Brooks Jessup、ベルリン自由大学）「「誰入地獄？」：戦時日本占領下（1937-1945）におけるエリート中国仏教者」
- ・奥山直司（高野山大学）「明治「インド留学生」：植民地セイロンにおける釈興然と釈宗演の僧院生活」

昼食を挟んで午後に行われた第2パネルには4本の発表があり、レヴィ・マクローリン（Levi McLaughlin、ノースカロライナ州立大学）がディスカッサントを務めた：

- ・フランチェスカ・タロッコ（Francesca Tarocco、ニューヨーク大学）「ダルマのフレーム：写真と中国仏教を見る」
- ・ジャスティン・マクダニエル（Justin McDaniel、ペンシルヴァニア大学）「華人美術収集家における東南アジアの仏教 Buddhism in Southeast Asia in the Eyes of Chinese Art Collectors」
- ・キム・ファンズ（Hwansoo Kim、デューク大学）「高麗大藏経の解釈をめぐる闘争：一九一〇年から一九四五年にかけて

のコロニアリズムの文脈において」

- ・エイミー・ホルムズ＝タチャングダルパ (Amy Holmes-Tagchungdarpa、アラバマ大学)

続いて行われた第3パネルには3本の発表があり、ピアース・サルゲロ (Pierce Salguero、ペンシルベニア州立大学) がディスカッサントを務めた：

- ・パク・ジン (Jin Park、アメリカン大学) 「近代なる負荷：白性郁と井上円了における仏教哲学の形成」
- ・チャールズ・ジョーンズ (Charles Jones、アメリカ・カトリック大学) 「日本統治期台湾 (一八九五～一九四五) における中国仏教戒壇の設立」
- ・吉永進一 (舞鶴高専) 「日本の英字仏教雑誌：*Bijou of Asia* から *Young East* まで」

翌5日午前に行われた第4パネルには3本の発表があり、ローレン・レヴ (Lauren Leve、ノースカロライナ大学チャペルヒル校) がディスカッサントを務めた：

- ・星野靖二 (国学院大学) 「都合の良い／悪い他者：日本の近代仏教におけるアジア像」
- ・ホ・ナムリン (Namlin Hur、ブリティッシュ・コロンビア大学) 「朝鮮仏教と明治日本：一八七〇年代から八〇年代にかけての仏教の変容を準備したもの」
- ・マーク・ネイサン (Mark Nathan、ニューヨーク州立大学バッファロー校) 「仏教の宣教とダルマの伝達：近代朝鮮と東アジアの仏教におけるパラダイムとしての布教 (Propagation)」

その後、ブライアン・ボッキング (Brian Bocking、ユニヴァーシティ・カレッジ・コーク) が「鏡像の中の鏡？：植民統治下アイルランドからのアジア仏教者 (一八六三～

一九一三)」という題の基調講演を行い、その後インケン・プロール (Inken Prohl、ハイデルベルク大学) のコメントを受けてラウンドテーブル形式の全員討議が行われた。

全体の傾向として、インケンが指摘したように教義・思想的な問題を主要な論点とした発表がほとんど無かった。これは逆に仏教を「媒介」として捉え、より広い視野で議論を「越境」的に展開しようとしているということでもあろう。

議論に際しては様々な論点が提出された。例えば近代国家によって設定された国境はトランスナショナルという視野からは大きな意味を持つが、それが前近代における仏教徒の移動・交流とどのように連続しているのか、あるいは近代において仏教が多言語において「越境」的に語り直されていく過程と同時に、例えば文献学のような形で共通の仏教の起源へと遡っていかうとする動きがあったことをどう捉えるのかといったことが指摘され、議論された。

また後者の言語・翻訳の問題と関係して、近代仏教においては英語が多様な仏教のあり方、あるいは仏教徒達——そして研究者達——のコミュニケーションを成立させる役割を果たしていたことが指摘され、これは前近代における相互交流とは明らかに異なっている特徴であることが確認された。

二日間に渡るカンファレンスは、文字通り朝から晩まで議論づくしの濃密なものであった。なお、このカンファレンスは2012年にアイルランドで行われた国際カンファレンスとテーマ的に連続するものであり、2014年12月には京都で「複数の植民地主義と複数の近代性」という題で次のカンファレンスが予定されている。近代仏教研究の更なる展開が期待される。

(星野靖二)



## 出張報告 「世紀転換期の米国における日本宗教の提示についての研究」鹿児島・京都調査

平成25年度國學院大學特別推進研究助成金に採択された研究課題「世紀転換期の米国における日本宗教の提示についての研究」（國特推助第57号）の遂行のため、2013年度中に2度の調査を行った。まず2014年2月24日から3月1日にかけて、鹿児島と京都に行き、次に3月17日から3月19日にかけて、再び京都を訪れて資料調査を行った。これらの概要を以下に報告する。

本研究は標題にあるように19世紀末米国における日本宗教の提示について検討するものであるが、より具体的には米国、特にニューイングランド地方の大学に留学した日本人学生による発信に焦点を合わせた。その一人がハーバード大学神学部を日本人として最初に卒業した小崎成章という人物である（1891年に神学学士を取得）。調査の結果、この小崎は新島襄の没後に同志社二代社長となった小崎弘道の実弟であり、自身も同志社英学校にて学んでいたことがわかった。また、後半生は鹿児島にて第七高等学校造士館（以下七高）の英語教授となっていたことも判明した。

これらを受けて、まず2月24日から27日まで、鹿児島大学中央図書館、鹿児島県立図書館、鹿児島県歴史資料センター黎明館において、郷土資料と七高関連資料を中心に小崎の七高教員時代について調査した。

事前に確認したところ、七高についての資料の多くは戦争の際に焼失してしまったとのことであったが、それでも現存する記録や同窓会資料を披見し、一定の発見があった。また、郷土資料の中に成章の人物評を発見し、

『南日本新聞』上の死亡記事を確認するなどの成果も得た。更に七高の跡地に建てられた鹿児島県歴史資料センター黎明館において七高関連の展示を見学し、当時の様子についての知見を得ることができた。

続いて2月28日から3月1日にかけて主に同志社大学神学部図書館にて調査を行った。兄弘道の自筆稿など関連資料が同図書館に寄贈されて『小崎弘道自筆集』として整理されており、そこに含まれている成章の自筆ノートの内容を確認するためである。具体的にはラーネッドによる教会史講義のノート（1881年）と、講師不明の新約批評講義、デーヴィスの近代の旧約批評講義のノート（1882年）が残されており、これらを確認した。後者には成章の“We are the Temple of God”という説教案（1882年）が含まれており、貴重な発見となった。

次に、3月17日から19日にかけて再び同志社を訪れ、同志社社史資料センターにおいて調査を行った。事前に『同志社百年史』で確認してあったことを他の資料と付き合わせて確認し、また校友会関連資料などから成章の履歴について不明であった時期についての情報を得た。他方、成章が1893年に帰国してから同志社の教員となり、1895年に辞任したことについて、記録は確認できたが、当時の講義科目や辞任の背景等については言及が無く、今後の検討課題となっている。

なお、同センターでの調査にあたっては資料調査員の布施智子氏に大変お世話になった。記して謝意を示す。

（星野靖二）

## 宗教文化教育の教材としての映画

井上順孝

### はじめに

半世紀以上前の古いものなら1950年代に制作された『十戒』、21世紀にはいつてからのものなら『パッション』や『マリア』といった、いわゆる宗教映画と呼ばれるものは数多くある。こうした宗教映画のカテゴリーに含まれるものの他にも、宗教的テーマが重要な意味をもっている映画は数多くある。ドキュメンタリー映画、シリアスなストーリーの映画だけでなく、コメディ映画、恋愛映画、アクション映画などとされているものの中にも、宗教的テーマが深く織り込まれているものを容易にリストアップできる。映画が人々の日常世界を描こうとするなら、イスラーム圏は言うまでもなく、キリスト教文化圏の国々でも、宗教に関わるもろもろの事柄が必然的にはいりこんでくるからである。日本では比較的そうした映画は少ないとも言えるが、日本人からすると宗教あるいは宗教文化のテーマとは関係ないように思えても、外国人からは宗教的要素がふんだんにあるように見える場合もある。

比較的知られた例を挙げると、『平成狸合戦ぽんぽこ』（高畑勲監督）という映画を日本宗教の理解のために用いているフランスの研究者がいる<sup>1</sup>。また宮崎駿監督のアニメ映画『風の谷のナウシカ』、『もののけ姫』、『千と千尋の神隠し』などは、日本人のアニミズム信仰、靈魂観、神観念などを論じる際に用いられている<sup>2</sup>。

このことを考慮すると、映画は宗教文化教育の教材として、欠かすことができないものの一つである。宗教文化教育の教材の大半を占めるのは現段階では文字媒体のものであるが、これに比べると映画を教材とすることには当然利点もあれば弱点もある。情報媒体へのアクセスがやや面倒であるというのが弱点の一つである。しかし映画はかつてのように映画館で上映されたり、テレビで放映されるだけではなくなくなった。AV機器の技術が発達し、ビデオテープ、DVDなどとして、個人が観たいものを選んで随時観れるようになった。さらに一部ではあるがウェブ上でもアクセスできる映画がある。こうした現在の状況は、教える側にとっても、また学ぶ側にとっても、映画の利用を格段に簡便なものにしてきている。映画を宗教文化教育の教材として用いる上で、願ってもない状況となってきたのである。

宗教映画であれば、宗教系の中学校、高校において、宗教という科目の他、歴史、地理、倫理といった分野に関わる科目で、実際にビデオやDVDになった映画を教材として利用している例が数多く見られる。とりわけキリスト教系の学校では利用が盛んであるが、それは素材の豊富さも関わっている<sup>3</sup>。それぞれの宗教の創始者についての物語、歴史的展開、重要な出来事、そうしたものを具体的にイメージさせようとしたとき、宗教映画は非常なインパクトをもつ教材となりうる。

だが、宗教文化教育は特定の宗教の立場から宗教的教化を目指すものではない。むしろ自分が属していない宗教文化、あるいは自分が信じていない宗教文化についての理解が重要な課題となる。そうした立場からすると、宗教映画と呼ばれるものだけでなく、さまざまな視

点から宗教的テーマに迫った映画や、場合によってはさほど意図せず宗教的テーマを扱ってしまったような映画を広く視野に入れることが重要になってくる。映画は基本的に娯楽的要素が強いということがあり、また必ずしも事実を明らかにしようとしたり、史実に忠実であろうとするものではない。そのことが結果的に宗教文化教育にとってもさまざまなバイアスをもたらす可能性がある。ここに映画を宗教文化教育に採り入れるときの大きな難題が生じる。

以下では、まず宗教的なテーマを含む映画を具体的にいくつか取り上げるが、その映画によって広がりうる視点と、生じうるバイアスというものに注意を払う。これらの映画から拾い上げられる宗教文化に関わるテーマはきわめて多様であるけれども、紙数の関係もあり、本稿では大きく次の4つの視点に絞って、具体的な映画の事例とそこに浮上するテーマについて言及する。その上で、宗教文化教育が映画を題材としたときに直面せざるを得ない根本的な問題についても考察する。

- ①習俗や社会的慣習と宗教文化
- ②宗教史と宗教文化
- ③グローバル化と宗教文化
- ④宗教対立と宗教紛争

## I. 習俗や社会的慣習と宗教文化

日本の年中行事（初詣、節分、桃の節句、七夕、菊の節句など）や人生儀礼（初宮、七五三、成人式、結婚式、葬式など）の大半は、神社や寺院とゆるやかに関わりをもちながら、人々の意識としては社会的な慣習として実践されている。しかし習俗化した慣習にも、その底に潜む宗教的観念や理念というものへの関心が色濃く見いだされるものもあり、それを描き出す映画がある。宗教文化教育の教材になりうるものは数多い。さらに昨今は日本でもハロウィーンが短期間に年中行事化したように、グローバル化が進む現代世界では一つの宗教文化圏で担われてきた宗教習俗が、見る間に世界的に広がるという現象もみられる。このことは宗教的習俗を扱った映画が一つの社会や文化の問題にとどまらない視点を提供する場合が多くなることを意味する。

### (1) クリスマス

習俗化した宗教文化として代表的なものの一つはクリスマスである。クリスマスが年中行事的な祝祭になっているのはキリスト教文化圏に限らないが、この行事が現在でも宗教文化と深く絡み合う局面を描いた映画は、欧米、ことに米国で制作されたものに多く見出される。教会でのミサに加え、クリスマスが今日のような家族の団欒の大切さを感じる行事になる上で、チャールズ・ディケンズの小説『クリスマス・キャロル』が与えた影響は大きいとされる。19世紀半ばのこのイギリスの小説は、いくどか映画化された。育った境遇もあって、まるで守銭奴のように生きているスクルージが、クリスマスイブに過去、現在、未来の精霊にいざなわれて自分の姿を見て改心していくというストーリーである。

1970年に公開された『クリスマスキャロル』<sup>4</sup>はロンドンの下町を舞台として、スクルージの改心の過程を分かりやすく描く。また2004年には『A CHRISTMAS CAROL』<sup>5</sup>というミュージカル映画ができた。ここでは3人の精霊のうちの2人が女性であるのが注目され

る。2009年の『クリスマス・キャロル』<sup>6</sup>はディズニーのアニメ映画である。

同じ小説が下地であるので、筋書はどれも大きくは変わらないが、キリスト教で好ましいとされている価値観の一部、すなわち家族を大切にすること、貧しい人に施しをすることが、背景に据えられている。世俗的財への飽くなき欲望と、愛や慈しみに満ちた心とが、あまりにも単純に対比されていると思えなくもないが、映画が発するメッセージという観点からは、分かりやすい構図である。きわめて世俗的なイベントと化した日本のクリスマスとは少し異なる意義を考えていくときに参考にできる。

『フォー・クリスマス』<sup>7</sup>はどたばた喜劇の部類に属するが、現代アメリカ人のごくありふれたクリスマスへの感覚が垣間見える。家族とのクリスマスを嫌がって、恋人同士でフィジー行きの予約をしたブラッドとケイトだが、サンフランシスコ空港で濃霧ですべての飛行機が飛び立てないという事態に遭遇する。さらにハプニングがあり、ふたりはそれぞれの両親の家に行く羽目になる。ともに両親が離婚していたため、都合四つの家のクリスマス（フォー・クリスマス）に付き合うことになる。四つの家で思わぬ出来事が続くが、やがて子どもなど欲しくないと思っていたふたりに変化が訪れる。ハッピーエンドのコメディなのだが、どこか古き良きアメリカへの懐古調が見え隠れする。こうした形で伝統的なアメリカの価値観が滲出してきているという解釈も可能である。

ヨーロッパ大陸の映画には、「明るくない」クリスマスを描くものもある。『クリスマスのその夜に』<sup>8</sup>には、クリスマスの夜にノルウェーの町で起こったさまざまな出来事を重ね合わせている群像劇である。冒頭でクリスマスに飾る樅の木を探す男の子を狙う銃口が映し出される。それが誰であるか、なぜなのか、それは映画の最後の方で明かされる。

多様な人物が登場する。クリスマスイブなのに診察に出かけなければならない医師。物乞いをするも足を止める人もなく、みじめに故郷へ帰るための金を手に入れようとする路上生活者。離婚したが子どもに会いたくてたまらず、無茶苦茶な手段を使う男。妻子のある恋人の態度に業を煮やす女性。クリスマスを祝わないイスラームの女の子の家にいき、望遠鏡で空を眺める少年など。

夜勤の救急を担当していた医師が、呼び出された場所に行くと男にナイフをつきつけられ、ある所に行くように命じられる。その男の妻が出産に苦しんでいたのである。男は実はセルビア人で、妻はアルバニア人。コソボに帰れば家族に殺されるという運命にあった。ここで冒頭の銃口との関係が示される。ラストには無事子どもが生まれたふたりが美しいオーロラを見るシーンがある。エンディングの曲は「クリスマスのその夜に」である。神を信じれば幸せだと言おうとするのでもなく、神はいないと絶望を描くのでもない。神の働きが有るような無いような、微妙な情景がつけられる。ここでは習俗化した宗教的年中行事を描くことが主眼ではなさそうだ。クリスマスを軸にしながらも、現代社会のここそこに潜む社会問題に焦点を当てている。考えさせるための教材となろう。

現代のクリスマスにはサンタクロースが欠かせない。サンタクロースが信仰をともなっていた時代を描くのは『三十四丁目の奇跡』<sup>9</sup>という、第二次大戦直後の1947年に制作された映画である。ニューヨークのマンハッタン34丁目が舞台で、アメリカ人の当時のサンタ信仰をある程度推測できる。しかし、サンタクロース伝説は現代ではさまざまに展開し、北欧が舞台になってきている。フィンランドにはサンタクロース村があり、サンタ宛ての手紙を受け取ってくれる。サンタクロース村はラップランドのフィンランド部分にある。北緯



66.3度の北極線上のあたりで冬は極寒の地となる。このあたりを舞台にした映画が『サンタクロースになった少年』<sup>10</sup>である。サンタクロースの話は、聖ニコラス伝説がもとであるというのが定説になっているが、この映画はいわば「フィンランド版サンタクロース」が誕生する話である。サンタクロースの少年時代を描くという設定だからである。

冬の夜、幼いニコラスの両親と妹が、湖に落ちて命を失い、一人残されたニコラスは、村人たちによって1年交代で育ててもらふ。どの家族も貧しかったので、村人たちがとった苦肉の策であった。養ってもらふ家を変えるのが、クリスマスの日であった。ニコラスは器用さを活かして、家を去るにあたり世話になった家の子供たちに、木で作ったおもちゃをそっと置いていくようになる。しかし村が極度の不漁で厳しい状況に陥り、ニコラスはイサッキという物売りに引き取られる。偏屈なイサッキであったが、やがて村の子どもたちへのクリスマスのプレゼントを作り続けるニコラスに心を開いていく。聖ニコラスについての従来の伝承を知らない、サンタクロース村の歴史的由来を語っているのかと勘違いする人もいそうな内容である。

このように娯楽映画に見えるものであっても、クリスマス、サンタクロースが、欧米においてはどのような宗教的観念に関連づけられているかを考える参考になる。クリスマスが商業化しているのは、どの国でも同じであるが、信仰に通じる回路がストーリーのあちこちに読み取れる映画がある。その読み取りにはキリスト教の変遷についての基本的な知識が要求されることになる。

## (2) 葬儀

日本の年中行事、人生儀礼の中では葬儀がもっとも宗教的観念を刺激するものであろう。『お葬式』<sup>11</sup>は、葬式という誰もがいくどとなく経験するような出来事を、制作当時としては非常に斬新な視点から描いている。冠婚葬祭という、それまでの日本社会では世代から世代へ決まり事のように伝えられてきた儀礼の場が、1980年代には急速に継承がおぼつかなくなってきた光景を、ユーモアを交えて描いている。

俳優の井上侘助は妻で女優でもある雨宮千鶴子に頼まれて、急死した千鶴子の父の葬儀を仕切ることになる。しかし、葬儀のやり方に疎い侘助は、マネージャーである里見の助けを借りて乗り切ることになる。通夜から葬儀までの儀礼をどうするかを、葬儀屋のアドバイスを受けながら決められていくことになる。故人の兄で千鶴子の伯父である雨宮正吉が、故郷での昔ながらのやり方についていろいろ口出しするが採用されない。侘助夫妻は、葬儀の直前に葬儀のやり方を解説したビデオを見て、作法を急遽学ぼうとする。葬儀のマニュアル化が進行している時代をさりげなく描いている。

真言宗の檀家であったが、近くに真言宗の寺がないということで、里見は浄土真宗の僧侶を頼むが、これは葬儀の際に呼ぶ僧侶については、宗派にこだわらなくなっていた状況を踏まえている。大変な「善知識」であるというふれこみの僧侶は、高級車のロールスロイスに乗ってやってくるが、ここにいわゆる「葬式仏教」への批判的なまなざしがあると見て取れる。

日本では大半が葬儀は仏式で行われる。したがって葬儀は読経を始め僧侶が主導するイメージがある。『お葬式』ではそれが葬儀屋に主導権が移っていることを暗示していたが、さらに葬儀の準備をする納棺師に焦点を当てたのが、『おくりびと』<sup>12</sup>である。2009年にア

カデミー賞外国語映画賞を受賞している。納棺師が主人公であるから、当然死体に向かいあう場面が何度も出てくる。自殺者、孤独死した老人、子ども、交通事故死した若い女性等々。この映画が話題になったのは、死体と正面から向かいあう納棺師の姿にあったと考えられる。遺体への死に化粧、最後の心をこめた扱いはかつては親族が行ったことである。しかし、現代はそうしたことさえ、葬儀産業にゆだねざるを得ない。であればこそ、その罪悪感をいくばくか軽くしてくれるのが、映画に登場したような納棺師の心のこもった振る舞いと考えられる。

しかし、人生儀礼の一つとみなすにはあまりに過酷な現実もある。2011年3月11日の東日本大震災では1万5千人を超える死者が出た。ほどなく深刻な問題が起こる。被災地の各地で突然の多数の遺体をどうしたらいいかである。この事態を、岩手県釜石市の遺体安置所での実際の取材をもとに映画化したのが『遺体～明日への十日間』<sup>13</sup>である。最初から最後まで辛い場面が続く映画である。並べられた泥まみれの遺体。遺体の確認のために一人ひとりの口をこじあけ、歯を調べていく歯科医と助手の若い女性。連日遺体と向かいあい、心のバランスを崩す市の職員。読経に来たものの、読経の声を詰まらせる僧侶。

次々に運ばれてくる遺体の一つひとつに丁寧に対応するのは、かつて葬儀関係の仕事をしてきた経験があり、ボランティアを申し出た民生委員の相葉である。「死体ではない、遺体だ」と相葉は職員らに注意の言葉をかける。遺族にとっては遺体というより、「死んだとは思えない人」が目の前にいるに違いない。通常の葬儀ならきつとなされるであろう、きれいな死に化粧と枕元への花の飾りが無いことに、悔しさや申し訳なさがこみあげるのは自然の理である。そうした悲痛な思いをさまざまに描いていく。宗教家の役割の変化を考えさせる映画でもある。

年中行事や人生儀礼が宗教的要素をもつことは、具体的な場면을提示することで了解しやすくなる。こうした映画はその可能性をもつが、むろんそれを活かす上では、民俗信仰についての素養が教える側に必要になる。

## II. 宗教史と宗教文化

宗教文化教育にとって、個々の宗教史を理解するための映画はもっとも貴重な素材と言える。宗教史、さらに現代宗教に関係するテーマを扱った映画はことにヨーロッパに多いが、それを個人で網羅するのはきわめて困難である。ここでは人気を呼んだ映画や高い評価を得た映画を中心に、宗教文化圏ごとにいくつか取り上げて、そこで読み取っていけそうなことを述べる。当然ながら、一つの映画でも宗教のどのような側面に関わっているかの解釈は多様になる。それゆえ、ここで述べる個々の映画への着眼点はあくまで例示的なものにとどまる。

### (1) 東アジアの宗教文化への理解

#### ①中国の宗教文化

中国や韓国は大乘仏教、儒教、道教については、その影響の多寡はあるにしても、共通に影響を受けた宗教文化である。しかし、近代以後の社会変化はかなりの違いをもたらしている。こうしたことも映画を通して感じることができる。

中国の現代宗教や宗教文化への位置づけを知る一つのルートは香港映画である。娯楽性の

強い映画がほとんどであるが、そこからも現在の中国における伝統仏教の評価のようなものが見えてくる。『少林寺三十六房』<sup>14</sup>は17世紀の清の時代の伝説的な拳法の達人劉裕徳（リユー・ユテ）を主人公とする。劉が嵩山少林寺において課せられた修行の様子がかなり具体的に描かれて興味深い。嵩山少林寺は中国河南省にある名刹である。少林寺には禅宗において「西天第二八祖、東天第一祖」とされる達磨太子が訪れたとされる。「西天第二八祖、東天第一祖」とは、インドで28代目の祖師、中国で初代の祖師という意味である。同寺の壁には拳法の訓練に励むインド僧らの様子を描いた図がある<sup>15</sup>。また7世紀にインドに渡り、多くの経典を持ち帰った玄奘も、晩年は嵩山に行くことを望んだが、皇帝がそれを許さなかったと伝えられている。

天達（ティエン）将軍に父や仲間を殺された劉は武道を極めようと、嵩山少林寺の戒律院で修行に励み、僧名を三徳とする。35の修行房での厳しい修行が始まるが、最初いきなり頂房（最後の房）から修行を始めようとして、気合のみで倒され叩き出される。そして基礎訓練から始めさせられる。当初は手を抜こうとするが、すべて見破られ、しだいに真剣な修行態度へと変わっていく。7年の歳月を経て、すべての房を極め、どの房を選ぶかを決める段になり、新たに房をもうけると決意し、下山するのである。故郷は依然として天達将軍に苦しめられていた。三徳は同志を募り、将軍への闘いを挑む。将軍への闘いには少林寺の師も味方する。そして、ついに目的を達し、新たに街中に少林寺の塾を開設した。これが少林寺三十六房と呼ばれることとなった。

主人公の劉裕徳は、17世紀に実在した僧である三徳和尚がモデルになっている。三徳は、広東省の出身で、武術にすぐれていたようだ。のち「反清復明」、すなわち清を倒して明を再興するという目的をもって広州に西禅寺という寺を建立した。しかし、実際は最後には清兵に攻撃され戦死している。

香川県の多度津には戦後宗道臣により日本少林寺拳法が創設された<sup>16</sup>。しかし、これは嵩山少林寺とは別の組織である。特務機関の一員として中国に渡った宗道臣は、戦時中、中国各地で複数の師から拳法を学んだ。戦後日本に帰ってから、その精神的退廃を憂え、自分なりに集大成し、少林寺拳法と称したのである。しかし、両者は交流を重ねている。

少林寺をテーマにした映画はその後も作られ、1982年には『少林寺』<sup>17</sup>、また2011年には『新少林寺』<sup>18</sup>が制作された。『新少林寺』の冒頭では、死者への供養に「南無阿弥陀仏」という言葉が唱えられる。少林寺は禅宗であるが、中国では日本と違って、禅宗と浄土教とは融合した。宋の時代には禅宗が栄えたが、明末には禅は念仏と密教的要素を取り込み、以後の中国仏教のあり方に影響を与えた。この映画でも禅宗である少林寺の本堂に、大きな阿弥陀仏が置かれている。日本の禅宗なら、本尊は釈迦仏である。現代中国に伝えられている仏教儀礼の一端を垣間見れるものの、映画自体はあくまでアクション映画である。

なお、ここでは触れないが、香港で制作されたいわゆる「キョンシー映画」（1979年の『霊幻少林拳』、1985年の『霊幻道士』など）は道教における他界観も反映しており<sup>19</sup>、現代中国でそれが一般にどのように受け止められているかを考えるときに参考になるものである。

## ②韓国の宗教文化

韓国は伝統的に大乘仏教と儒教の影響が大きく、さらに道教的観念は日本より深く影響し

ている。しかし第二次大戦後キリスト教の影響が急速に高まり、今では人口の3割近くに達する。それゆえ現在の韓国の宗教文化について論じる場合には、キリスト教の広範な影響を考慮しなくてはならない。映画作品にもキリスト教的なテーマを扱った映画を見いだせる。

『私たちのしあわせな時間』<sup>20</sup>は死刑囚のチョン・ユンスと元歌手のユジョンが中心的人物である。だが現在の韓国の宗教文化を考える上では、カトリックの修道女であるユジョンの伯母の描き方が見逃せない。伯母はユンスの心の立ち直りを願いユンスの苦しみに向かいあう。ユンスは強引に誘われた企みのおり、ある娘を殺してしまう羽目になるのであるが、その娘の母親がユジョンの伯母に連れられて面会に来る。ユジョンもその場にいる。母親の激しい罵りの言葉にユンスはうずくまり謝罪する。しかし、気を取り直した母親は、赦しきれないが赦したいという自分の気持ちをユンスに伝える。これがユンスを改心へと導く。

ユジョンとユンスが刑務所の面会室で向かいあうシーンが幾度かある。その部屋には小さな十字架とキリスト像がある。実際このような面会室が韓国の刑務所にあるのかどうか分からないが、宗教の雰囲気背後に小さく添えられている。また刑務所の中で、神父がユンスの足を洗い、語りかけるシーンも韓国におけるカトリックの社会的機能を伝えているようである。

『訪問者』<sup>21</sup>には、主人公として対照的な2人が登場する。職がなく離婚状態のホジュンは、ワンルームでかなりすさんだ生活を送っている。ある日浴室のノブが壊れ、中に閉じ込められてしまった。長時間裸のまま出ることができず、気を失いかける。そのとき、何日前にホジュンの家に宗教の勧誘に来たイ・ケサンがやってくる。ケサンはかすかな「助けて」という声に気付いて部屋にはいり、ノブを壊してホジュンを救い出す。

これをきっかけに2人は少しずつ親しくなる。最初ホジュンはケサンが宗教へ誘うのが目的だろうと警戒していたが、しだいに打ち解けるのである。ケサンが自分の宗教のことを黙っていたことを理由に家庭教師を断られたのを知って、ホジュンは同情する。しかし、すさんだような毎日からなかなか抜け出せない。

韓国では徴兵制度がある。ケサンは信仰に基づき兵役を拒否する。判決の前に自分の信仰に基づく信条を毅然と述べる。ケサンは懲役1年6ヶ月の刑を言いわたされる。ホジュンは傍聴席でケサンの信仰の吐露と判決とをじっと聴いている。ホジュンの生活が変わるのは、この出来事のあとである。信仰を持つ者と持たざる者とのねじれ関係と交流とが、淡々と描かれている。ケサンの属する教団のモデルは、おそらくエホバの証人である。二人連れで各家庭を訪問する。布教用のパンフレットが用意されている。映画を観たがらない。信仰に基づき兵役を拒否する。このように描かれているからである。映画のストーリーから、韓国でエホバの証人にどういう位置づけが与えられているかを考える参考にできる。

## (2) インドの宗教文化

『リトル・ブッダ』<sup>22</sup>は、若きキアヌ・リーブスがブッダ役の映画である。ニューエイジ的な関心が見て取れるが、欧米からのインド仏教観の一つという意味でみると興味深い。米国シアトルに住む9歳の少年ジェシー・コンラッドの両親のもとに、ある日、2人のチベット僧が訪れる。ジェシーは、9年前に他界した高僧ラマ・ドルジェの生まれ変わりの可能性があるというのである。ドルジェの他界した1年後に生まれていた。生まれ変わりかどうか確かめるために、ジェシーはチベット僧とともにブータンに行くことになる。父親も同伴す



る。そこで他の2人の生まれ変わりの候補者の少年、ラジュとギターとともに、ブッダの生涯について話を聞かされることになる。

誕生してすぐ立って歩いたという奇跡的なできごとなど、ストーリーの要所要所で、神話化されたブッダの生涯を描く場面が挿入されている。王子として何不自由ない生活を送っていたシッダールタがあるとき解脱について考えるようになり城を出る。有名な「四門出遊」の話に基づく場面である。苦行の様子や奇跡譚も挿入される。老楽士が弟子に「弦は強く張りすぎれば切れる。緩めすぎても弾けなくなる」に語るのを耳にして、中道の正しさを悟る。魔王との闘いも描写される。そして最後は自分の心の克服というもっとも重要なプロセスがくる。こうした場面だけを拾っていくと、いわば神話化されたブッダの悟りへの道のハイライトシーンになる。学問的な議論にははいりこまないで、伝説化された話の再構成に徹しているから、それはそれで意味をもつ内容である。

インドの人口の約8割はヒンドゥー教徒だが、10数%のムスリムもいる。両者の対立は第二次世界大戦後、インドがイギリスから独立してからもずっと続いている。宗教分布が配慮されてヒンドゥー教徒が多いインドとムスリムが多い東パキスタン（現在のバングラデシュ）及び西パキスタン（現在のパキスタン）という具合に別々の国としてイギリスから独立したわけだが、宗教問題は解決とはほど遠い。

『ボンベイ』<sup>23</sup>はこうした背景を理解した上で見るべき映画である。ジャーナリスト志望の青年セーカルとムスリムのシャイラー・バーヌとの恋愛を中心に、ヒンドゥー教徒とムスリムの間の摩擦を扱う。家族の反対を押し切りふたりは結婚する。双子の男の子が生まれ、幸せな生活を送っていたが、1992年の「アヨーディヤー事件」<sup>24</sup>をきっかけに、ボンベイでも激しい宗教暴動が起きる。ふたりとその息子たちも暴動に巻き込まれていく。インドにおける宗教紛争にも関係する映画である。

インド宗教の基本的観念として、輪廻と解脱はもっとも重要なものである。輪廻転生は今でもごく普通に信じられている観念である。ハリウッド映画の『恋する輪廻～オーム・シャンティ・オーム』<sup>25</sup>でも輪廻の観念はストーリーの中で重要な役割を果たしている。ハリウッドというのは、ムンバイの旧称であるボンベイの頭文字「ボ」と、「ハリウッド」を合成した語である。ムンバイを中心に大量に作られている。ハリウッド映画には歌と踊り、そして恋が付きものだが、むろんこの映画も例外ではない。映画制作の話が劇中劇としてストーリーに組みこまれていて、それが最後のどんでん返しにつながっている。

オーム・プラカージュは脇役専門の俳優であったが、いつか主演にと夢を見ている。そして美貌の人気女優シャンティにあこがれている。ある日オームはシャンティが出演する映画の撮影現場で、撮影中の事故で炎に取り囲まれてしまったシャンティを助けたのだが、これをきっかけにふたりは仲良くなる。すっかり有頂天になるオームだが、シャンティはすでにプロデューサーのムケーシュと事実上結婚していた。ところが、彼女が妊娠していることを知ったムケーシュは、あろうことかシャンティ殺害を図る。オームは殺されそうになったシャンティを助けようとして大やけどを負い、さらに車に轢かれて死ぬ。その車を運転していたカプール夫妻の間には、その日に男の子が生まれ、オーム・カプールと名付けられるが、この男児にオームは転生するという筋である。そして30年後に人気俳優として名を馳せるようになる。仕事の関係でムケーシュと出会うが、やがて過去の記憶が断片的に蘇り始める。

インド宗教の基本的観念の一つである輪廻の思想が使われてはいるが、この映画に組み込まれた輪廻転生は、行為（カルマ）の結果としての輪廻転生というわけではない。30年後に別の人間に生まれ変わったオームが、再び同じ人に魅せられるストーリーにしたてられている。輪廻転生の話がごく普通にストーリーに組み込まれるということがポイントになる。

### (3) キリスト教文化

キリスト教文化は政治、教育、文学、芸術、美術など生活のあらゆる面に及んでいるので、極論すれば、ほとんどのヨーロッパ映画にキリスト教文化に関わるシーンを見出せると言える。しかしキリスト教にあまり詳しくない日本人に対しての教材として用いるときは、キリスト教会や修道会、修道院という組織、団体の活動が描写されている映画が導入としてはやりやすい。

ヨーロッパ社会の軸をなすキリスト教だが、その信仰形態は時代とともに変わる。とくに20世紀後半からはその変化は激しく、それは映画にも如実にあらわれている。それは神の描き方、イエス・キリストの描き方にもあらわれている。こうした変化の面に注意を促すことも大事である。

#### ①ローマ教皇

ローマ教皇（法王）はローマカトリック教会の頂点に立つ。『ローマ法王の休日』<sup>26</sup>は、コンクラーベでようやく選ばれた新しいローマ教皇が、それを嫌がって逃げ回るといふ、ほとんどありえない想定の話だ。コンクラーベは「鍵とともに」という意味のラテン語から来ている。13世紀後半に、教皇クレメンス4世死去後の教皇選挙が紛糾し、3年近く空位が続いた。これに不満を抱いた信者たちが、会場から出られないように鍵をかけて枢機卿たちを閉じ込めたのが起源とされる。コンクラーベの最中は、選ぶ役の枢機卿たちは隔離される。新法王が決まると白い煙が出て、決まらなかった場合は黒い煙が出るというシステムである。なかなか新しい教皇が決まらず、黒い煙が続けて出たのち、ようやく上った白い煙に見守る人々は歓喜する。しかし、選ばれたメルヴィルは、こともあろうに、新教皇としてバルコニーから人々に姿を見せるその直前に、大声をあげて、その場から逃げ去るのである。自分は教皇の任にはとうてい堪えないと悩み、ローマの町を逃げまわるのである。

映画の冒頭で死去した教皇の頭をハンマーで叩くシーンがある。コメディだからこうしたと思う人もいるかもしれないが、これも実は一つの儀式なのである。20世紀になってからは行われていないそうだが、かつてはこうして儀式的に死去を確認した。この役は、教皇が生前選んでいたカメルレンゴと呼ばれる枢機卿が行う。カメルレンゴは教皇の額を銀のハンマーで軽く叩いたのち、洗礼名で教皇を何度か呼ぶのがならわしであった。

枢機卿たちの描き方は、皮肉交じりである。選挙がなかなか決まらないので、暇をもてあまして、カードゲームをやったり、やたら酒を飲んだり、自転車をこいで体力をやしなったり、あるいはジグソーパズルに熱中する姿をみせたりする。果てはバレーボール大会が開かれる。

『法王さまご用心』<sup>27</sup>はさらにありえない話である。ローマ教皇が突然死去し、次の教皇を選ぶこととなった。マフィアとつながっていた枢機卿のロッコが、アルビーニ枢機卿を推薦する。20カ国語が話せ、またアフリカの難民キャンプなどで活動していたという触れ込みにし、これが功を奏する。ところが耳の遠い書記官が名前をアルビーニツィと聞き違え

る。こうして枢機卿でもなく片田舎の修道会の司祭であったアルビーニツィが突然教皇に選ばれる。陽気にエレキギターを手に子どもたちの前で歌うなどの態度が修道院長の機嫌を損ね、そこを首になった直後のことであった。教皇ヨハネ・パウロ3世となったアルビーニツィは、就任の記者会見の場で、避妊はどう思うかという質問には「いいことです」と答える。女性司祭はどうかという質問には「大歓迎です」と答える。どちらも実際の教皇ヨハネ・パウロ2世が「ノー」であったことを踏まえておくべきシーンである。バチカン銀行の腐敗についての質問が出るに至って、周囲は会見を止める。後半はアルビーニツィと腐った枢機卿及びマフィア一味との闘いというストーリーだが、現実離れしたコメディの中に、けっこう鋭い批判が盛り込まれている。

こうした映画はある程度ローマ教皇の役割やコンクラーベの仕組みを知らないとなんが実際に何がフィクションが分かりづらい。事前の説明が必要であろう。と同時に、カトリックの頂点にある人物をこのようにいわば茶化して描けるという現代のヨーロッパ社会のありようにも留意すべきである。宗教家を描くときの自由度は国や宗教文化圏によって異なる。その違いを理解する方途を追究するのは宗教文化教育の課題の一つであるが、きわめて困難な課題であることは間違いない。

## ②修道会・修道院

カトリックが世界に広まる上で修道会や修道院が果たした役割は非常に大きい。日本にも多くの修道会、修道院がある。しかし、閉ざされた組織となることも多く、その内実は一般にはほとんど知られていない。ことに歴史的な経緯は理解が容易ではない。十分な理解には至らなくても、独特の雰囲気を感じ取るに役立つ映画はある。

『尼僧物語』<sup>28</sup>は、オードリー・ヘップバーンが、カトリックの尼僧ルーク役を演じて話題となった。話は1930年代、ベルギーに住む女性ガブリエルは、医者の父をもち、看護婦として働いていた。しかしコンゴの病院で働くことを夢見て修道院に入ることを決意する。修道院でもらった名前が、シスター・ルークである。

カトリックの修道会は数多くあるが、共通する戒律は清貧、貞潔、服従である。物質的欲望を絶つ清貧と貞潔を守ることには揺らぎのなかったルークだが、服従という戒律が繰り返す彼女の試練となる。胸に秘めた個人的決意というものがあったからである。ラストシーンで、ルークが修道院を出るときの様子が静かに描かれる。修道会のウチとソトを厳しく分ける仕組みがよく分かる場面である。

「ドミニク、ニク、ニク」の歌詞で知られる歌は1960年代にレコードが発売され、世界で300万枚以上売れたという。その裏に何があったか、主人公の激しい人生が描かれているのが『シスタースマイル・ドミニクの歌』<sup>29</sup>である。

ドミニクの歌は「シスタースマイル」という歌手名でリリースされた。本名をジャンヌ＝ポール・マリ・デッケルス（映画ではジャンヌと表記されている）という実在の人物をモデルにした話だが、どこまで忠実に描いているかは、むしろ注意が必要である。ただ彼女がドミニコ会の修道女となってからつくった「ドミニク」の歌が世界的にヒットしたのという点は事実である。実名を隠すためにスール・スーリール（英語で言えばシスター・スマイル）という名を使った。

映画では、彼女は自分の生きざまを貫こうとし、見方によれば悲劇的ともいえるような生

涯を送ったように描かれている。束縛の強い母と主体性のない父親という家で育ち、嫌気がさして、ある日突然ドミニコ会に属する修道院での生活を選ぶのである。しかし、個性の強い彼女が修道院の厳格な規律に沿って静かな生活を送るのは、所詮無理な話であった。修道院の食事が十分でなかったのか、空腹に耐えられず、勝手にパンにかぶりついて、罰を受けたりする。

彼女の運命を変えたのは大好きなギターであった。修道女になってからも、規則への反発を止めない彼女に、修道院長は「なぜ修道院に来たのか？」と問う。ジャーヌは「生きる意味を求めて？」と答える。「今のままでは無意味です」とつけ加える。修道院長は彼女がギターを弾くことを許す。

たまたま修道院を見学に来た一般の人を前にギターを披露したのがテレビで紹介され、それをきっかけにやがて彼女が創った歌のレコード化の話が進む。それが「ドミニク」である。これが思わぬ大ヒットとなるが、それが運命を狂わしていく。レコードがいくら売れても、それは修道会の収入になる契約となっていたのである。より自由な生き方を求めて、修道会を出てからは、苦難の道が彼女を待ち受ける。規律を守ることに基本がある修道院生活と本来自由に生きたかった女性とのぶつかりが、いろいろな解釈を許すように描かれている。

カトリックに限らず、聖職者を「疑う」ことは極力避けられようが、その疑いをテーマにしたのが『ダウト～あるカトリック学校で～』<sup>30</sup>である。疑われたのは神父、疑ったのはカトリック教会が経営する小学校の校長である修道女。ここには2つのテーマが重ねられている。1つは1960年代にカトリックが向かい合ったりベラルな方針への転換という世界的課題。もう1つは、独身を守らなければならない神父という職につきまとう性的な誘惑という、現代なお続く問題。しかも神父への疑惑は、黒人の男子児童との関係についてであるから、さらに複雑な様相を呈する。1964年のニューヨークという、時代と場所が設定されているが、1964年は、ジョン・F・ケネディ大統領が暗殺された翌年であり、公民権運動の中心的人物であったキング牧師がノーベル平和賞を受賞した年である。そしてカトリック界にとっての大きな転換点であるヴァチカン第二公会議（1962～65年）が開かれている最中である。

話は3人の人物の心理劇的な色彩を帯びている。「疑い（ダウト）」の対象となったフリン神父は、教会に新しい風をもたらそうとしていた。説教もなかなか人気があった。神父が黒人の少年と性的関係をもったのではないかと疑うアロシマス校長は、これまでのやり方を踏襲しようとする修道女である。黒人の男子生徒と神父との関係に小さな疑惑を抱き、それを校長に告げたのは、学校で教えている若い修道女ジェイムズで、彼女はふたりのはざままで心が揺れる。どちらを信じるべきか。映画は一つの可能性を暗示しつつも、真実を明らかにしはしない。観客の判断にゆだねられる。

### ③神の描き方の変容

欧米の映画に描かれた神は、時代とともに神への観念の変化を反映している。興味深いのは、「ゴッド」が平凡な人間の姿をとって現れる映画が、1970年代以降アメリカ映画にいくつも見られるようになったことである。『オー！ゴッド』<sup>31</sup>では神は眼鏡をかけ野球帽をかぶった老人の姿で登場する。コメディアンジョーン・バエズが神様役である。神はみずか



らが神であることの証明として「GOD」と書かれた名刺を差し出したりするのであるが、なぜそんな格好になったかの説明も一応ある。本来は神に姿などないのだが、それだとわかりにくいだろうと主人公が受け入れることの出来る平凡な格好にしたというわけである。

この映画はシリーズ化され、1980年に続編の『オー!ゴッド2／子供はこわい』<sup>32</sup>が製作され、さらに84年には『オー!ゴッド3／悪魔はこわい』<sup>33</sup>が製作された。いずれもジョン・バエズが神様役で登場する。第三作では、バエズが神と悪魔の二役になっている。

少しスマートなかつこうな姿となって神が登場する映画が21世紀になって登場する。『ブルース・オールマイティ』<sup>34</sup>である。2003年に制作されたこの映画では、主人公のブルース（ジム・キャリアー）が「神よ、あんたは仕事をしていない」と悪態をついてしまったことが神の登場を招く。モーガン・フリーマン扮する神が「お前さんそう言うけれどこれでなかなか大変なんだぞ。なんならちょっと神様をやってみろや」とブルースに神の役を任せることとなる。ローカル・テレビ局の Reporter であるブルースは、こうしてドタバタ劇を始めることとなる。

この続編が2007年の『エバン・オールマイティ』<sup>35</sup>である。神の役は同じくモーガン・フリーマンである。今度は、下院議員に当選したエバンが、新しい家を購入し、「神様、世界を変えるため、力を貸して下さい」と祈ったことが、神が登場する発端になっている。

この映画では毎朝セットした時間とは異なる6時14分に目覚ましが鳴るといった具合に、「614」という数字が謎めいた数字として用いられる。やがてこれは創世記6章14節を意味することが分かる。創世記6章14節はノアの箱船の話の一部をなし、「あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。」とある。このシリーズでは、神が白いスーツを着こなした黒人の姿をとってあらわれる。そして、神はふいに現れ、ふいに消えていく。まったくの気まぐれのようにみえる出現形態は、キリスト教における啓示の観念と符合しているようでもある。啓示は一方的に神の側からもたらされるからである。

#### ④イエス・キリストの描き方の変容

神の描き方の変化はイエス・キリストの描き方の変化と並べて考えるのもいいだろう。「神の子イエス」から「人間イエス」、それも悩みを抱えた人間としての描き方が20世紀後半には顕著になる。それはまたイエスという人物の表象の変化にも関わりをもっている。

イエス・キリストの人間としての悩みや苦しみを描くような映画は1970年代から増えた。とくにミュージカル『ジーザス・クライスト・スーパースター』<sup>36</sup>や、キリスト教教徒から激しい反発を受けた『キリスト最後の誘惑』<sup>37</sup>などでは、イエスとマグダラのマリアとの愛が生々しく描かれ、従来のイエスを描いた映画とは大きく様相が異なってきた。エロスに満ちたイエス像が前面に出てきた。ヒット作となった『ダ・ヴィンチ・コード』<sup>38</sup>はさらに踏み込んで、イエスとマリアとの間に子どもがいたという前提のもとにストーリーを展開させる。映画の各シーンは謎解きのスリルでつないでいるが、この前提も関心をもたらし一因であろう。

イエスの表象についての変化に関しては、2012年に國學院大學で開催された国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」<sup>39</sup>でパネリストの一人 MacWilliams 氏（米国、セントローレンス大学）が、多くの画像を用いて示した。「イエス

の再生—映画、マンガ、アニメにおける救世主のポップカルチャー的変容—という発題において、同氏は白人イメージであったイエスが多様化してきていることを説明した。

『ライフ・オブ・ブライアン』<sup>40</sup>はイエスは登場しないが、間接的にそのメシア扱いが皮肉られる。英国のコメディグループであるモンティ・パイソンが中心的な役を演じている。イエス・キリストが生まれたのとほぼ同時に、一つ隣の小屋でブライアンが生まれたという設定で始まる。ブライアンが自分の意思に反してメシアにまつりあげられて、あげくの果てに処刑されてしまう。救世主にまつりあげられる過程は、すこぶる簡単である。

ブライアンは、ローマ人に抵抗する「人民戦線ユダヤ」というグループにはいる。入会に際してある任務を命じられるが、それは壁に「ローマ人よ家へ帰れ」と描くことであった。ところが現場を見つかり、ローマ兵から追われる身となる。逃げる途中で説教者のまねをするが、ローマ兵をやり過ぎたので、説教を途中でやめてその場を去ろうとする。ところが話が「人々に与えられる」とまで言って終わったので、そのあとに重要な話が隠されていると思った人たちが、「何が与えられるのか」と問う。そして彼を神の子と思いつむ。自分はメシアではないと言うと、「本当のメシアだけが力を否定するのよ」と返され、メシアだと答えると「やっぱりメシアだ」と返される。ついにブライアンはメシアに祭り上げられる。

メシア崇拜もセクト間の争いも、ローマ人とユダヤ人の対立も、何もかも笑い飛ばす。茶化し方が半端ではない。いったんメシアとされると、何を言ってもそれがメシアの言葉としてありがたがられる。そういう人々のありようがもっとも揶揄されているわけで、これをどう受け止めるかで多分評価も大きく分かれる。コメディとはいえ、信仰を徹底して茶化しているわけであるから、なぜこうしたものを見せる必要があるかを、教える側が自問したのち教材とするのがよさそうである。

## ⑤神父と牧師

神父や牧師の描き方から、現代のキリスト教が抱える問題が見えてくる。『ヤコブへの手紙』<sup>41</sup>は、登場人物も少なく、静かな老齢の牧師の生き様が描かれる。宗教家はなんのためにいるのか？人と人とのメッセージの交換の中で、救われているのは誰か？そうした問いかけが底にある。

殺人罪で終身刑となっていたレイラが恩赦で出獄する。引き受け人となったのが、年老いた牧師のヤコブ。暗い過去のレイラは、盲目のヤコブ宛の信者たちからの手紙を読むことを依頼される。ヤコブはレイラに常にいたわりの言葉をかける。だが心温かいヤコブによってレイラの心がしだいにほぐれるといったようなありきたりのストーリーではない。牧師として、神と人をつないできたと思ってきたヤコブ自身の深い悩みが描かれていく。それとともに、重い凍ったような心の扉をもつ人が、どのようなときに、それをかすかに開いていくのか。そのありようが丹念に描かれている。

タイトルの「ヤコブへの手紙」は、新約聖書の一書である「ヤコブの手紙」を連想させる。イエスの兄弟が記した書簡とされる同書には、信仰に基づく行いのあり方が説かれている。しかし、その内容を知らずとも、この映画が訴えることは伝わる。北欧のキリスト教文化の今を考えるに適した映画であろう。

## ⑥特徴的な教派の理解—アーミシュの例

プロテスタント教派の中には、監督派、会衆派、長老派といった主流派に属するような教派の他に、かなり特徴的な教えや信仰実践をする教派がある。アナバプテスト派（再洗礼派）に含まれるアーミシュやメノナイトなどもそうである。再洗礼派は本人の意志に基づかない幼児洗礼を拒否する。米国のペンシルバニア州には、アーミッシュの中でも伝統的な生活様式を守ろうとするグループが今でも多く住むことで知られている。近代文明の利器を退け、移動には馬車を使い、家では電気を使わないなどの独特の生活を送る。このアーミシュの生活場面が出てくるのが『刑事ジョン・ブック 目撃者』<sup>42</sup>である。

ハリソン・フォードが刑事ジョン・ブック役を演じているが、彼が担当した殺人事件にアーミッシュの母子が絡む。彼らの宗教信条を示す場面が何度か出てくる。アーミッシュはヨーロッパで迫害を受けたため、18世紀前半以後、アメリカに移り住む者が相次いだ。ドイツ語圏から来た人が多く、映画でもドイツ語での説教や会話の場面がときおり出てくる。また非暴力主義も広く知られ、アーミッシュの村に隠れ住むことになった刑事のブックも拳銃を手放す。そうした彼らの生き様がラストシーンに取り入れられている。

『大富豪、大貧民』<sup>43</sup>もアーミッシュの宗教生活が描かれる。アーミッシュの村に紛れ込んだ俗っぽい社長夫妻のドタバタぶりを描いた喜劇である。大会社社長のブラッド・セクストンは、金儲けに夢中で宗教など馬鹿にしているが、お抱えの会計士が金を使い込み、脱税を疑われ国税局の追及を受ける羽目になる。妻との逃亡の旅をする羽目に陥り、ペンシルベニア州にあるアーミッシュの村にたどり着く。ふたりは信者になりすまし、そこでの生活を始めるが、近代生活を拒否して農作業にいそしむ彼らの生活についてゆくのに苦勞する。アーミッシュではないことがばれそうになるのを、なんとかつじつま合わせする場面が愉快だが、しかしアーミッシュたちは、実はとうに見抜いていた。原題の For Richer or Poorer は、キリスト教式の結婚式のときによく使われる「富めるときも貧しきときも」という文句である。それが邦題に活かされていれば、この映画に込められた笑いの中の教訓が、読み取りやすくなったはずである。「大富豪、大貧民」では趣旨が分かりにくい。

## ⑦キリスト教原理主義と進化論

キリスト教原理主義は科学と宗教の関わりという観点から見逃せない動きである。とくにアメリカにおけるキリスト教原理主義（ファンダメンタリズム）の問題を考えると、『風の行方』<sup>44</sup>は是非参照すべき映画である。これはスタンリー・クレイマー監督の『聖書への反逆（風の遺産）』<sup>45</sup>をリメイクしたものである。1925年にアメリカ・テネシー州の町デイトンで実際に起こった事件を題材にとっているが、舞台となる町や関係者の名前は変えてある。問題となった裁判は俗に「スコップス・モンキー裁判」と呼ばれているが、進化論をめぐる生物教師と聖書に記されたキリスト教の教えを文字通り信じようとする人たちとの対立がテーマである。

教師のケイツが学校で進化論を教えたため、逮捕され裁判にかけられる。聖書の教えに反する理論を教えるはならないという州の法律に違反したという理由である。ボルチモア・ヘラルドの記者が、田舎の町の後進性を話題にできるいい機会ということで、裁判の取材にやってくる。一方、3度も大統領選挙に出馬したことのあるブレイディが原告側弁護士に加わる。彼は聖書に書かれている一言一句を信じる熱心なクリスチャンである。

裁判ではケイツの弁護士ドラモンドとブレイディとのやりとりが中心となるが、科学者を証人とすることを拒否されたドラモンドは、なんとブレイディを証人に求める。ここが映画の圧巻で、ドラモンドは聖書に関する質問を、次々とブレイディに投げかける。ヨナがくじらに呑み込まれたという話を信じるのか。ヨシヤが太陽を止めたという話を信じるのか。創造のときはいつか。一日目はどれくらいの長さであったか。太陽もできていなかったのに、一日の長さが分かったのか。聖書に書かれていることが実際に起こったというなら、当然起こるであろうような疑問を次々とぶつける。ブレイディは答えながらしだいに興奮していく。創造のときは紀元前 4004 年 10 月 23 日であると断言する。裁判自体はケイツの有罪で終わるが、罰金わずか 100 ドルであった。

この映画のもとになったデイトンでの裁判では、科学と宗教の立場の違いが、創世記をめぐって際立ち、キリスト教原理主義者と言われる人たちの認識が浮き彫りにされた。スコープスは実際に被告となった高校の生物教師の名前で、モンキー裁判と呼ばれるようになったのは、人類の先祖が猿であるかどうかという形で話題になったからである。

実際の裁判も映画と同じく原理主義者たちが勝訴している。しかし、原理主義者たちの時代遅れの認識があらわにされてしまった。米国では 20 世紀後半にプロテスタントのリベラル派の信者が減少気味になったのに対し、福音派と呼ばれるようなグループは増加傾向にあるとされる。その福音派には原理主義的傾向が強いものが含まれる。そうした一つの教会に焦点を当てた非常に興味深いドキュメンタリー映画が『ジーザス・キャンプ～アメリカを動かすキリスト教原理主義～』<sup>46</sup>である。ブッシュ政権の時代に制作された。保守派のサミュエル・アリートが合衆国連邦最高裁判事に任命されて、リベラル派が危機感を感じた頃である。

ドキュメンタリー風のこの映画で中心的に扱われているのは、ミズーリー州のベッキー・フィッシャーという女性牧師が主催する子どもを対象とするサマーキャンプの様子である。進化論を否定し、墮胎に反対する。「アメリカをキリストの手に取り戻そう」というスローガンを繰り返す。

彼らは子どもたちへの教育が宗教界の将来の動向に非常に重要な意味をもつことを自覚し、さまざまな道具を使って、自分たちの信念を子供たちに伝える工夫をする。敵か味方かと、常に明確な二分法を突き付ける。一部の子どもたちは思惑通りその枠で考えるようになる。用いる小道具は人間の認知をうまく利用したものである。敵への攻撃を形としてあらわすために、子どもたちに金槌を渡しコップを割らせる。攻撃心を具体的な行動によって植えつける手段である。墮胎への嫌悪感を強めるために、妊娠後の月数に対応した胎児のおもちゃを見せる。キリスト教原理主義には欧米でも強い危機感を抱く人がいるので、こうした映像を教材とする場合は、そのことにも触れた方がいいだろう。

ドーキンス<sup>47</sup>をはじめとした科学者側との進化論をめぐる論争に不利を感じ取った創造論者の一部は、1990 年代あたりからインテリジェント・デザイン (ID) 論によりどころを求めるようになった。ID 論とは、生命や宇宙の不思議な仕組みを「何らかの知的な設計者」によるものと考えようとする立場である。神を言い換えただけという批判もある<sup>48</sup>。この ID 論に対抗して、オレゴン州立大学卒のボビー・ヘンダーソンが 2005 年に作ったのが「空飛ぶスパゲッティ・モンスター教」である<sup>49</sup>。ID 説が教育の現場に採用される事態が生じたことに対する抗議としてのパロディ教団である。唱え言葉は「アーメン」ならぬ「ラーメ



ン」である。あえて馬鹿馬鹿しい教義を打ち出して、挑発しているのである。こうした厳しい対立がある現実もまた認識しておく必要がある。

#### (4) イスラーム

イスラームは偶像崇拝を禁止するので、ムハンマドを扱う映画の制作は困難である。『ザ・メッセージ』<sup>50</sup>はムハンマドの生涯を扱った稀有な映画である。ムハンマドの説いた教えが、多神教の町メッカでどう広がっていったか、どのような波紋を周囲にもたしたのなどを交えつつ、ムハンマドに従った人々の信念の深さが描かれる。商人たちでにぎわうメッカの物質主義と、それに対応した多くの神々への崇拜。そこに突如あらわれたムハンマドの教えは、多くの人々に衝撃的であったが、若者を中心に帰依者が現れる。彼らはムハンマドを通じて次々と下される新しい啓示に引きこまれ、親たちを説得していく。

だが偶像崇拝禁止を配慮してのことと考えられるが、映画の中ではムハンマドの姿も声も出てこない。彼と接した人々の表情を描き、彼の発した言葉をなぞる人々を通して、彼が何を行い何を語ったかが間接的に示される。

『ハーフェズ ペルシャの詩』<sup>51</sup>は、イランと日本の合作映画で、麻生久美子が主演のイラン人女性ナバートを演じたことで注目された。タリーカと呼ばれるスーフィ教団の規則が重要な柱となる。シャムセディンは小さいときからタリーカでコーランをすべて暗唱する修行をしていたが、試験に合格した。そして、コーラン暗唱者だけに与えられる称号ハーフェズを獲得する。ある日、宗教家の娘ナバートにコーランを教えることとなる。ふたりは会話しながら視線を交わしたが、このごく普通に思われる行為がこの教団では戒律違反で、大きな問題となる。シャムセディンはハーフェズの称号を剥奪されてしまう。さらにナバートは、父のもとで学ぶ男と結婚させられることになる。

イスラームの戒律は地域により厳格さに差がある。イランはシーア派が国教であり、現在は戒律は厳しい方に属するが、その厳しさは時代により揺れ動く。ハーフェズの称号は、14世紀イランの詩人ハーフェズから来ている。彼は愛にまつわる詩を数多く作ったことで知られ、家にコーランはなくてもハーフェズの詩集はあると言われていたほどイランでは人気がある。宗教の戒律が人間の愛を押さえ込んでいることへの静かな抵抗の映画とも解釈できる。

アヤトッラー・ホメイニに主導された1979年2月のイラン・イスラーム革命は、西洋世界にも大きな衝撃をもたらした。『ペルセポリス』<sup>52</sup>は、この革命前に生まれ、革命後に成長期を迎えた女性の目から描かれたアニメ映画である。主人公のマルジャンは、活発でブルース・リーの映画が大好きな少女。しかしホメイニに率いられた革命で、自由が急速に失われていくのを実感する。

知り合いの女性が来て嘆き悲しむ場面がある。息子が学校で鍵を渡され、戦争で名誉の死を遂げたら、この鍵で天国に行けると教えられたという。それはプラスチックの鍵だった。「天国にはごちそうが並び女にも困らない。金とダイヤモンドでできた家もある」と教えられたという。彼女は言う。「大変な思いをして5人の子を育ててきたのにこんな鍵と引き換えに長男を奪われるとは。ずっと信仰に忠実でした。ちゃんとヴェールを被り祈ってきたのに、これが答えならもう何も信じられない。」

イラン・イラク戦争が始まり、女性に対する戒律遵守も厳しく迫られる。マルジャンの将

来を案じた両親は、彼女をウィーンへ留学させることにした。最初は楽しんだマルジャンだが、しだいに壁を感じていく。そしてテヘランの家族の元へ戻る。戦争は終わっていたが、百万人が死亡した。スカーフの長さが短いと批判され、未婚の男女が手をつないただけで鞭打ちにあう。面倒くさくなって結婚するがすぐ離婚。祖母が最初の結婚は予行演習と慰めるのがたくましい。しかし母に勧められフランスへ旅立つ。このあたりは恵まれた環境のわがままな女性の半生という印象もありうる。全体としては革命後のイランで、宗教的な締め付けが厳しくなったことへのあきらめが強く漂う。

『アルゴ』<sup>53</sup>はイラン・イスラーム革命の年の11月に起こったイランの米国大使館占拠事件に基づいて脚色された話である。冒頭でそこに至る経緯が短く説明される。西欧化を進めつつ、自らは贅沢な生活をしていたパーレビ国王がイラン国民の怒りを買ったこと。ホメイニに率いられた革命の前に、パーレビ国王がエジプトに亡命し、最終的に米国に移住したこと。そして国王の引き渡しに米国が応じず、これにイラン国民が怒ったことである。

映画は怒れる民衆が米国大使館に押し寄せる場面から始まる。大使館の敷地は治外法権であるという国際常識をまったく無視して、多くの人が大使館内になだれ込み、そこにいた人々を人質にとる。そのとき間一髪でカナダ大使館に逃げ込んだ6人の米国大使館員の救出劇が中心的ストーリーである。CIAで人質救出が専門のメンデスが単独イランに乗り込み、6人の救出にあたる。そこでとられたのがまことに奇抜なアイデアであった。「アルゴ」というSF映画を撮影するためにカナダからの撮影隊がイランにやってきたと欺いて救出しようとする。この映画におけるイランの描き方は当然イランには強い反感をもたらした。2013年のアカデミー賞作品賞の他、2012年のゴールデン・グローブ作品賞を取ったことなどは、この反感をいっそう強める結果になった。つまりはイスラームフォビアを刺激しかねない要素も含んでいるわけで、この点には要注意である。

### Ⅲ. グローバル化と宗教文化—移民社会と宗教

日本ではグローバル化が1980年代以降、急速に進行する。それは外国人労働者の増加、留学生の増加、国際結婚の増加など各種のデータから見ても明らかである。グローバル化の定義からして、むしろそれは日本に限ったことではない。20世紀後半から21世紀にかけては、国際化さらにグローバル化の影響が、各国の宗教文化にも顕著に及んでくる。移民の多い国ではそれがどんな形になって表面化するのかを考えさせる映画が増えてきている。

『僕の国、パパの国』<sup>54</sup>は英国で生活しているパキスタン系一家がテーマである。パキスタンからの移民である夫と英国人の妻、その間に生まれた六男一女がさまざまな問題を起こす。ファストフード店を営む父親は、子どもたちの人生をムスリムとしての自分の思い通りに育てたいと考えている。ところが父が勝手に決めたパキスタン系の移民の娘との結婚に反旗を翻す息子や、こともあろうに同性愛者であることが明らかになった息子も出てくる。末息子の割礼問題では大もめ。子どもたちとの文化差は開く一方となり、子どもの幸せを第一に考えようとする妻との関係もぎくしゃくしていく。

英国は戦前に南アジアなどに植民地があったことが関係し、アジア系の移民が多い。ヒンドゥー教徒やムスリムも多く、彼らがもつ独自の宗教文化とどう向かい合うかは、英国の宗教教育においては大問題である。キリスト教以外にもユダヤ教、イスラーム、仏教などを学ばせる多文化教育を積極的に推し進めている。だがこの映画のように、家庭内に複数の文化

が混在するときは、異なる文化との共存、共生というような理念をもってしても、なかなか処理できないような入り組んだ感情的問題が生じる。イスラームでは同性愛は非常なタブーであるし、食品はハラールであるかどうかが問題である。しかし移民二世、とくに母親が生まれながらのムスリムでないとするれば、移民してきた世代にとっては当然の感覚も、よほど失われてしまう。宗教文化のズレが世代間で発生するという問題は、どこでも生じうるゆえ、特殊な事例を通して一般的な問題を考えていくというのに適した映画である。

米国は移民によって形成された国であるから、宗教文化の問題も多様な姿をとってあらわれる。『アリ ALI』<sup>55</sup> は、「蝶のように舞い、蜂のように刺す」という言葉で一世を風靡した元プロボクサーのモハメッド・アリの半生を描く。ウィル・スミスがアリ役である。アリはムスリムとしてのこの名前をもらう前は、カシアス・クレイという名であった。

当然ながらボクシングの場面が多くを占めるが、黒人への人種差別を扱い、ムスリムとしての思いを扱っていて、彼のボクシング人生の理解にもこれらが重要な意味を持つことが分かる。アリは1964年にヘビー級王座に就くが、その翌日ブラック・ムスリムの団体であるネイション・オブ・イスラームのメンバーとなる。そして指導者のイライジャ・モハメッドから、モハメッド・アリという名をもらったのである。ネイション・オブ・イスラーム<sup>56</sup> は当時、なかなか過激な主張を掲げていた。マルコムXもこの教団に属していたが、この頃離脱してスニー派に属するようになった。マルコムXとも親交のあったアリは、翌年にマルコムXが暗殺されたことに大きな衝撃を受ける。アリ自身ものちスニー派に属する。アリはベトナム戦争さ中に、自分を差別する国の側に立って、関わりのないベトナム人を殺すことはまっぴらであると宣言する。当初有罪判決が繰り返されるが、最高裁でくつがえり、良心的兵役拒否が認められる。黒人、そしてムスリムという、アメリカ社会では二重に覆いかぶさる差別との闘いが描かれる。

『マイ・ビッグ・ファット・ウェディング』<sup>57</sup> はシカゴに住むギリシャ系アメリカ人女性トゥーラの結婚にまつわる話を中心である。ギリシャ系住民のアメリカにおけるマイノリティ感が分かってくる。

強調されているのは、ギリシャ系の人たちのギリシャの文化や宗教への愛着である。冒頭部分で、ギリシャ娘の三つの義務についてのナレーションがある。それは、「ギリシャ男と結婚すること」「子どもを産むこと」「死ぬまで家族の面倒をみる」である。トゥーラの幼少期の回顧で、父が娘とその友だちを車で学校に送りながら、ギリシャ文化を誇らしげに語るシーンがある。天文学、哲学、民主主義はギリシャに始まったと言い、すべての語源がギリシャ語であると主張する。「アラクノフォービア」を例に、アラクノはギリシア語でクモでフォービアは恐れ。だからクモ恐怖症となると説明する。娘の友だちがからかい気味に子供たちに「キモノ」の語源はと聞くと、「ヒモナ」(=冬)であり、寒いとき着物を着るからとこじつけを答える。

こうした家庭に育ったトゥーラだが、知的で好奇心が強く、そうしたことに違和感もっている。トゥーラはある日、働いていたレストランで、友人と語っていたイアンを一目見て心奪われる。やがて、イアンも彼女が気に入り結婚を申し込む。しかし、ふたりの文化的、宗教的障壁が立ちふさがる。少なくともギリシャ正教の信者でなければ結婚を許さないというトゥーラの父に、イアンは信者となることを受け入れる。浸礼という全身洗礼の場面が出てくる。イアンの両親がリベラルであったから、ハッピーエンドになったわけで、リベ

ラルな生き方の存在意義が隠し味になっていることも見逃せない。

『ゴッド・イン・ニューヨーク』<sup>58</sup>は、微罪で留置場に送られた男たちによる会話部分がほとんどの場面を占める。後半の宗教や民族問題をテーマにしたやりとりは、どぎついほどである。自称ミュージシャンの黒人、プエルトリコ系の彼の友人、この2人に乗車拒否したアラブ系タクシー運転手、音楽関係の制作会社で働くアジア系ビジネスマン、その同僚のイギリス人、さらにユダヤ系、イタリア系、刺青師のアイルランド系の人物という構成で、英国人を除き皆米国人。この顔ぶれから当然予想される対立があり、また実際そのようにストーリーが進む。

「アラーを信じろ。神は慈悲深い」というアラブ系に、ユダヤ系が「なぜ俺と争う」と反論。「お前の先人は片手に和解の印を持ちながら、もう片手には剣を持っていた。野蛮な民族だ」とののしる。「カトリック教会はよそに口出ししない」というカトリック教徒に、英国人が「祖父がIRAのメンバーに殺された。カトリック教会が無実だなんていうなよ」と反論する。「白人は黒人の国に押し入ってきて、キリスト教を強要したと認めるべきだ。俺らの国に聖書を持ち込んだ。聖書を押し付け国を乗っ取った。」と黒人が主張する。

果てしない応酬が続く、偏見に満ちたやりとりへとエスカレートする。神の嘆きはこうだ。「愛し合う能力を与えたのに、いがみあっている。」原題はGod Has a Rap Sheet、つまり「神は前科がある」というなかなか刺激的なものである。米国の宗教事情の基礎知識がないと面白さは半減するだろう。

『マイネーム・イズ・ハーン』<sup>59</sup>は、インドにおけるヒンドゥー教徒とムスリムの反目、9.11が米国のイスラーム系住民に与えた影響、そしてアスペルガー症候群という、いずれも重い問題が詰まっている。アスペルガー症候群のハーンは、たびたびいじめにあいながらも高い知能を見出されて育つ。先に米国に行った弟の伝手で、米国に移り住む。そこでヒンドゥー教徒のマンディラに一目惚れして、求愛を続けて結婚する。マンディラは離婚していて一人息子サミールがいる。幸せな日々が続いていたときに、悪夢のような「9.11」の事件がニューヨークで起こる。サミールがハーン姓になったことが一因でいじめられ、サッカーボールを腹部に蹴りこまれ、それが原因で死亡する。激しいショックを受けたマンディラは、ハーンに対し大統領に自分はテロリストではないと伝えるまで家に帰るなど言う。かくてハーンの奇妙な旅が始まる。差別は受ける側の視点が提示されないと、なかなか分かりにくい。これを自分たちの国で起こっている問題につなげていくのも宗教文化教育の課題の一つである。

ヨーロッパにおいてはムスリムの移民が多く、国でさまざまな問題を生んでいる。『おじいちゃんの里帰り』<sup>60</sup>は、戦後のドイツにおけるトルコ移民の話をおさえて観た方がいい。監督のサムデレリはトルコ系ドイツ人2世の女性である。妹とともに実体験を基に制作したというだけあって、リアルな描写がちりばめてある。ごく普通のムスリムが持っているキリスト教へのイメージが、随所に示されている。

今はもう老人となったトルコ人移民一世のフセインがドイツに来ることになった経緯と、故郷への里帰りの旅のいきさつ、つまり過去と現在とが交互に描かれる。多くのトルコ系移民がドイツに押し寄せた1960年代、100万1人目のドイツ入国労働者となったフセインは、ドイツでの生活を選び、妻と子供3人をドイツに呼び寄せる。

ドイツに行くときに、近所の人がかけた言葉を通して、当時のトルコ人が描いたドイツへ



のイメージが描かれる。ドイツにはジャガイモしかないというのは愛嬌としても、豚だけでなく人も食うと警戒の言葉を投げる。豚のタブーとイエス・キリストの磔のイメージ、ぶどう酒のミサなどが、彼らにとってキリスト教の警戒すべき面を代表する表象であつたらしい。明治初期の日本人の中にも、ぶどう酒を血と勘違いした人もいるというから、ぶどう酒は似たような誤解を生みやすいということか。

一家が車で旅立つときもそうであるが、見送る人がバケツで車が去ったあとに水をまくシーンが何度かある。これは水がすぐ蒸発して元通りになるように、それくらい早く帰れるためのまじないのようだ。こういう細かな描写も面白い。また十字架上の傷ついたイエス像は、ムスリムの子どもたちにとっては、恐怖の対象でしかない。孫娘の恋人が英国人であることをめぐって、せめてドイツ人なら、という家族たちの反応がある。トルコにとって英国のイメージはドイツより悪いようだが、これはオスマントルコ時代の歴史が関係している。

移民は一世、二世、三世となると、一般に元の国より住んでいる国へのアイデンティティが強まる割合が高くなる。言葉、宗教、スカーフ、服装、髭など。しかし同じ一世でもフセインはトルコ人としてのアイデンティティが強いのに対し、妻はドイツ国籍をとれて大喜びするような心境である。最初はキリスト像が怖かった二世にあたる次男も、クリスマスを祝ってくれと親にせがむようになる。三世であるフセインの孫になると、トルコ語も満足にしゃべれる。

最後に墓の話が出てくる。旅の途中でフセインに突然に死が訪れる。ドイツ国籍をとったがために、トルコでは外国人墓地に埋葬しなければならないという現実。それでも家族はフセインの思いを汲んだ選択をする。移民と宗教。重い問題も関わってくるのだが、それを軽やかに、そして日常的な出来事に即して描いていて、とても良質の映画である。

#### IV. 宗教対立と宗教紛争

宗教文化教育にとって、宗教がもたらす葛藤やその負の面への目配りは重要な課題である。その観点から宗教紛争をテーマにした映画と、「カルト・セクト問題」に注目してみる。

##### (1) 宗教紛争

国際的な紛争、あるいは一国内の民族対立などに宗教問題が絡むことは珍しくない。それらは宗教紛争と総称されることが多いが、宗教紛争と呼ばれるものの中にも、主たる紛争の理由は民族問題であったり、国境紛争であったり、経済的な問題であったりする。しかし、宗教が絡むことで問題が複雑化する傾向が強いのは事実である。具体的な問題を扱った映画は、事態の複雑さへの想像力を養うことができる。

##### ①パレスチナ紛争

宗教紛争の代表とされがちなパレスチナ問題を扱った映画は多い。『パラダイス・ナウ』<sup>61</sup>は、自爆テロと殉教との関係を考えさせる。2005年のベルリン国際映画祭でヨーロッパアンフィルム賞、また同年のゴールデン・グローブで外国語映画賞を受賞した国際的評価の高い映画である。ヨルダン川西岸地区は、1967年の第三次中東戦争以来、イスラエルによって占拠されている。その西岸地区の町ナブルスに住む2人の若者、サイドとハーレドが自爆攻撃の実行者に選ばれてからの二日間が描かれている。アサド監督はイエス・キリストの生まれ育った地とされるイスラエルのナザレで生まれたが、19歳のときにオランダに移住し

たという経歴をもつ。

自爆テロが解決への道でないことは明らかであるが、そうせざるを得ないを信じさせる論理を補強するものとして、端々でイスラームの教えが用いられる。司令した男は、「殉教したらどうなる？」というハーレドの質問に、「2人の天使が迎えに来る」と答える。殉教は正義であり、神は正義を愛するという言い方も出てくる。だが、イスラームの教えがこうした行為をもたらすと短絡的に解釈するのは早計であろう。似たようなロジックはここ日本にも顔をのぞかせている。「平和ボケ」などという表現を織りませ、外国への敵対心を煽るような人はここかしこにいる。それがどのような道に通じているのか、この映画はそれを考えるよすがともなる。

『パレスチナ 1948 NAKBA』<sup>62</sup>もパレスチナ問題に関して必見の映画と言っていい。なるべく事実に即して描こうという姿勢がはっきりしている。広河隆一監督がみずから取材した40年にわたる写真と映像を編集したもので、アラブ人、ユダヤ人の双方に多くのインタビューがなされている。広河監督はキブツダリアで1年間働いていたのだが、しかし、やがてそこがもともとアラブ人の村ダリヤトルーハの土地につくられたものであることを知った。そして土地を奪われた人たちの取材を始めたのである。映画のタイトルになっているNAKBAとは、大惨事を意味する。これはむろんアラブ人にとっての大惨事である。

アラブ人だけでなく、イスラエルのマツペンのメンバーにもインタビューする。マツペンは1962年に設立された組織で反資本主義、反シオニズムを旗印に掲げていた。アラブ人を追放したり、虐殺したりする政策には、当然反対であった。

この映画はその原点を1948年に起こったタントゥーラ村での出来事に求め、さまざまな証言をインタビューによって引き出す。ナチスによって大虐殺を経験したユダヤ人が、なぜパレスチナの地で迫害者となるのか。そこにはパレスチナは神よりイスラエルの民に与えられた土地だという旧約的信仰が存在する。

『撤退』<sup>63</sup>は2005年にガザ地区からイスラエルが撤退するときの話だが、話はフランスから始まる。前半の伏線はややわかりにくい。後半部分でのガザ地区で起こる出来事の描写が重要である。イスラエルがパレスチナ側に配慮しようとするときの、イスラエルの入植者たちの反対。そこでのユダヤ教の宗教的指導者であるラビたちの振る舞いも描かれている。

『シリアの花嫁』<sup>64</sup>はゴラン高原に住む一人の女性の結婚をめぐる政治、民族、宗教などの要素が渾然一体となった複雑な問題を描く。2004年モントリオール世界映画祭グランプリ作品である。ドルーズ派という日本人にはあまりなじみのない宗教名が登場する。ドルーズ派はドルーズ教と呼ばれることもあるが、イスラームの一派で今から千年ほど前に形成され、シリア、レバノン、イスラエルに散在する小さな教派である。この教派に属する一家の娘が結婚することになる。

モナはゴラン高原のマジュダルシャムス村に住む娘である。ゴラン高原はもともとシリア領であったが、1967年、第3次中東戦争の際、イスラエルが占拠した。以後国際的に認められていないが、イスラエルによる占領状態が続いている。花婿となるタレルは境界線（軍事境界線）の向こうのシリア側に住んでいる。それは通常の国境ではない。いったん、その境界線を越えたなら、家族の住む側、つまりイスラエルが占領する地域には帰ってこれない。国家、民族、宗教。本来人びとを結びつけるはずであったものが、それを少しはみ出しただけの人間に対しては、執拗とも言えるチェックの機能を帯びてしまう。そのやりきれな

さと、しかし、それに立ち向かうとくに女性の強い心が描かれている。

## ②北アフリカ関連

北アフリカにあるアルジェリアはイスラーム圏の国だが、1830年から1962年までフランスの植民地であった。『神々と男たち』<sup>65</sup>は1996年3月にアルジェリア南部の町チビリヌで実際に起こったトラピスト会の修道士殺害事件を題材にとっている。イスラーム過激派が近辺でテロを拡大させていく中での、修道士たちの心の揺れ動きを中心にストーリーは展開する。彼らは宗教の違いにこだわることなく、病人に薬を施し、生活を支える活動を続けていた修道士たちは地元の人たちからの信頼を勝ち得ていた。

あるとき、イスラーム武装グループが負傷した仲間を治療しろと修道院に押し入る。そのリーダーと修道院のリーダー的存在の人物とのやりとりは、「啓典の民」同士が争っているという現実をありありと描き出す。修道士はコーランの一節を引いて毅然と武装グループのリーダーに対峙する。「“信仰者”に一番親愛の情を抱くのはキリスト教徒たちである。それは彼らの間に司祭と…」。すると、過激派のリーダーがその言葉を引き継ぎ、「司祭と修道士がいて彼らが傲慢でないためである」と述べる。この文章はコーランの5章（食卓）82節に出てくるものである。

修道士は「だから私たちは隣人だ」と述べる。それを聞いて危害を加えることなく去ろうとするリーダーに対し、修道士はその日が特別な日、つまり「平和の王子、イーサー」の誕生日であると告げる。これに対し、リーダーは「イエスカ」と言葉を返し、そのような日に乱暴にふるまったことをわびる。コーランの中ではイエスも預言者の一人として扱われている。イエスはマシーフ・イーサー（救世主イエス）と表現されている。神の啓示を人びとに示した存在として認められているのである。

『約束の旅路』<sup>66</sup>は、エチオピアに住んでいたファラシャと呼ばれる黒人のユダヤ人たちの過酷な運命を扱っている。実際に起こった出来事を踏まえており、中東の政治と宗教の複雑さを思い知らされるような映画である。ファラシャをイスラエルに移住させる「モーセ作戦」<sup>67</sup>が1984年11月に始まった。しかし当時エチオピアは移民を禁止していたので、3ヶ月間続いたこの作戦は大きな困難に直面した。そこでとられた方法は、彼らをエチオピアの北西に隣りあうスーダンの難民キャンプに連れてゆき、そこから空路でイスラエルに連れて行くというものである。

主人公のシュロモは、実はユダヤ人ではなかった。母が息子だけでも救おうと、子どもを亡くしたばかりの別の母親に託してイスラエルへ送ってもらった。託された女性も病死したので、シュロモはフランス系ユダヤ人の里子として育てられることになる。割礼の場面があるが、シュロモは当然ながら割礼を受けていなかった。実はユダヤ人でもムスリムでもなかったからである。割礼は一般に幼少期に行なわれ、ユダヤ人やムスリムにとっては、重要な儀礼である。その根拠は旧約聖書（ヘブライ語聖書）にある。創世記17章12節には、「あなたたちの男子はすべて、割礼を受けなさい。生まれてから八日目に割礼を受けなければならない。」という記述がある。神からこのように命じられたアブラハムは息子のイサクに割礼を施す。コーランには割礼の記述はないが、アブラハムの宗教の一つであるイスラームではムスリムは少年時代に割礼する。

黒い肌のシュロモはイスラエルでいろいろな差別を受ける。決して見逃してならないのは、若者たちによる討論会の場面である。討論会の課題は「アダム肌の色は何色だった

か？」というものであった。シュロモの討論の相手となった若者は、神は白人を創ったと主張する。旧約聖書の記述に基づき、ハムの長男がクシュ、それがアフリカの黒人クシになったと論を展開する。自分の番になったシュロモは「初めに言葉があった」と切り出す。そして「神は一人一人の人間を信じ、人間に言葉を託した」と。神はアダムを粘土と水から造り、言葉のように命を吹き込んだから、アダムの肌は粘土の色の「赤」だと述べる。終わると場内からは拍手が沸き起こる。

創世記1章27節には、「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」とある。さてではどこまで細部に神は人のかたちを決めたのであろうか。そうした問いが生まれる。この箇所はそれに関連する場面である。映画が神学的問題にも踏み込んでいるいい例である<sup>68</sup>。

### ③北アイルランド紛争

北アイルランド紛争はカトリックとプロテスタント（英国国教会）が絡む紛争である。キリスト教人口が少ないこともあって、日本ではカトリック、プロテスタント、オーソドックスの違いと、その間の確執の歴史はあまり実感をもって受け止められていない。しかし、ヨーロッパではこれらの違いはきわめて大きい。歴史的な対立はときに戦争にも至ったわけである。「なぜ同じ宗教なのに争うのか」といった類の質問はナイーブすぎることに日本人も気付かなければならない。

北アイルランド紛争をテーマにした映画は、当然ながら重苦しいものになるが、対象とした時代と局面の違いへの斟酌がとくに重要になる。北アイルランド紛争は多くの犠牲者が出たし、カトリックと英国国教会の対立が絡むので、深く問題の根を掘り下げようとする映画がいくつかある。

アイルランドには紀元前からケルト人が移り住んでいたが、聖パトリックと呼ばれる人物により、5世紀にこの地のカトリック化が推進された。聖パトリックは現在、アイルランドの守護聖人である。英国がアイルランドへ政治介入を始めるのは12世紀である。16世紀、宗教改革を行なった国王ヘンリー8世は、英国国教会をアイルランドにも強要した。アイルランド人の多くがこれに抵抗したが、エリザベス1世を継いだジェームズ1世はアイルランド全土を統治し、国教会に属する教会を多く建てた。これが現在の北アイルランド紛争の淵源と言える。

『麦の穂をゆらす風』<sup>69</sup>は2006年のカンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞を受賞した作品である。19世紀から20世紀に起こった北アイルランド紛争の渦中で起こった出来事を、若者たちの行動に焦点をあてて描く。当時英国の支配下にあったアイルランドでは、独自の言葉であるゲール語を話すことを禁じられていた。アイルランドと英国の激しい戦いの後、英国が停戦を申し入れたので、1921年2月に和平条約が締結された。アイルランドは自由を手に入れたかに見えたが、中途半端なその講和条約が、今度はアイルランドの内部での対立を招くこととなった。条約を支持する者と不満を抱く者との間で内戦状態になる。若者がかつての仲間から殺されるという事態になっていく。この映画では、カトリックを信じるアイルランド系の住民と英国国教会を信じる英国軍という図式はあまり強調されていない。主義主張のゆえ、かつての同志をさえ殺していくシーンがストーリーの中心をなしている。戦争を美化することに努める人たちへの、ケン・ローチ監督の静かな怒りのメッセージが伝わる。



こうした紛争に直面したときのカトリックの神父の描き方も注目される。神父が登場する場面は2回ある。英国を攻撃する前に神父が祈るシーンと、英国との間に条約ができたあと、神父がこれに従うように説教するシーンである。前者では神父は神が自分たちを加護するように祈る。イエスの受難を引き合いに出して攻撃に精神的支えを与える。そして後者では、神父が英国との条約に従うように諭し、過激派は破門であると宣言する。

『ブラディ・サンデー』<sup>70</sup>は1972年1月30日の日曜日、北アイルランドのデリー（ロンドンデリー）市でデモをしていた一般市民13名が英国軍の発砲で死亡した事件を扱う。現場に居合わせた人物の原作を基にしている。2002年のベルリン国際映画祭で金熊賞、サンダンス映画祭で観客賞、ディナールイギリス映画祭では作品賞を受賞していて、きわめて評価の高い作品である。

1922年の英国からのアイルランド独立以後も、アイルランドの北部六州は英国の統治下にとどまった。そしてユニオニストは英国との結びつきを重視し、ナショナリストはアイルランドへの統合を求め、両者の激しい対立が生じることになった。ユニオニストはプロテスタント勢力で、ナショナリストはカトリック勢力であるので、必然的に宗教紛争の性格が強くなった。

1972年はカトリック系住民の公民権運動が高まっていた時期である。地元出身のアイバン・クーパー下院議員は運動を推し進めるため、平和なデモを企画していたが、暴徒に手を焼く経験をしていた英国の軍隊はパラ部隊を投入し、フーリガンを逮捕する機会をうかがった。壁の上に狙撃兵を並べ、デモ隊を刺激したので、若者たちがそれに過敏に反応する。そしてコースを外れた一群に対し、狙撃兵が発砲する。丸腰の市民が次々と倒れる。英国軍が英国国民を殺害するという忌まわしい事件が勃発するのである。

#### ④アフガニスタン問題

1979年は旧ソ連によるアフガニスタン侵攻の年である。『君のためなら千回でも』<sup>71</sup>では、ソ連侵攻以後大きく変わったアフガニスタンでの民族対立とそこに絡む宗教問題が描かれる。ソ連侵攻以前の比較的人々が自由であった時代の風揚げのシーンが前半の光景を彩る。原題の *The Kite Runner* は、この風揚げから取っている。少年アミールは反共産主義者の父をもち、裕福な家庭に育つ。アミールの父の召使の子供が一つ年下の少年ハッサンである。ふたりは仲良しで、風揚げ大会にコンビを組み優勝する。だがハッサンが年上の子に性的暴行を受ける場面を見ながら、アミールは知らぬ振りを、アミールはしだいにハッサンを避けるようになる。前半ではハッサンがいじらしいほどアミールに尽くす姿が描かれるが、そこにはアフガニスタンにおけるパシュトゥーン人とハズラ人の関係が示されてもいる。同じムスリムでもパシュトゥーン人はスンニ派で、ハズラ人はシーア派が多い。モンゴル系の風貌のハズラ人をパシュトゥーン人はしばしば蔑視する。ムスリムは皆平等というのが理念だが、実際は民族によってしばしば階層的に分断され、対立も起こる。これもその一つの例である。ハッサンはハズラ人であり、アミールや暴行した少年たちはパシュトゥーン人であった。

ハッサンと彼の父がアミールの嘘がもとで家を出たあと、ソ連侵攻が起こる。アミールの一家はアメリカへと逃げる。大学を卒業し作家となったアミールがカブールに向かってハッサンの息子を探すのが後半のトピックだが、ここではタリバンが占領した地域での息苦しい生活が描かれる。姦通した女性をサッカー場で公開処刑する一方、孤児院の子どもを男女間

わずさらっては性的虐待をしている兵士たち。タリバンを強く批判する描き方になっている。

## (2) グローバル化がもたらす宗教の複雑化

多様な宗教的価値観を理解しようとすることは、宗教文化教育にとって非常に困難な課題の一つである。とりわけ対立し互いに批判し合うような局面について扱うのは、非常な注意と配慮が求められる。そのむずかしさを具体的に示してくれる映画もいくつかある。

『11'9"01 / セプテンバー 11』<sup>72</sup>は2001年9月11日の同時多発テロをテーマに制作された事件である。世界的に著名な11人の映画監督によるオムニバス形式の映画で、「11分9秒」と1カットの短編が11作品含まれている。それぞれ異なる宗教文化が支配的な国の監督が独自の視点から作品を作っている。第59回ヴェネチア国際映画祭で最優秀短編賞とユネスコ賞を受賞した。

その一つ、インドのミラ・ナイール監督が描いたのは、実際に事件で息子をなくした事件現場に住むパキスタン系のムスリム一家の悲劇である。一家の自慢の息子は実は飛行機が突っ込んだ世界貿易センターで救助活動中に死亡したのである。だが、ムスリムであったがゆえに、当初数週間にわたってテロリストという疑惑を受けた。近所の人々が彼の両親を見る目も冷たくなる。事実が判明すると、彼は英雄の扱いを受けるが、母親の嘆きが癒されるはずはない。「人情味のある息子を育てた代価がこれ？」というつぶやきは、やり場のない悲しみと怒りの表現である。アメリカにおいてムスリムとして生活するときの壁。けっして「人種の坩堝」ではなく、「サラダボール」であると指摘されるアメリカの厳しい現実への告発と読み取れる。

アモス・ギタイ監督（イスラエル）は、テルアビブでの爆弾テロが9.11のテロによって、たちまち背後に押しやられる光景を皮肉に描く。パレスチナ問題を抱えたイスラエルでは、テロ事件は絶えず起こる。現場で声高に叫ぶリポーターだが、テレビ・クルーはニューヨークでの事件にさっと切り替えさせられる。ニュース報道では、どちらが衝撃的かで放映が選択される。他に競合するテロがなければ放映されたであろうテルアビブの事件が、ニューヨークで起こった事件で、一挙に背後に追いやられたのである。

その他、サミラ・マフバルマフ監督（イラン）は、アフガン難民の子供たちが通うイランの小さな学校を舞台に設定する。クロード・ルルーシュ監督（フランス）は耳の不自由な女性写真家とツアーガイドの愛を描く。ショーン・ペン監督（米）は、一人暮らしの老人の部屋がタワーの崩壊で光が差すようになったシーンを挿入。ユーセフ・シャヒーン監督（エジプト）は、さまざまなテロで死んだ人の霊との対話を描く。ダニス・タノヴィッチ監督（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）は、セルビア人によるムスリム大量虐殺に対する女性たちのデモを扱う。イドリッサ・ウェドラオゴ監督（ブルキナファソ）は、アフリカ西海岸ブルキナファソで賞金目当てにビン・ラディンを探す子どもたちをややコメディタッチで描く。少年たちは彼を捕えると2500万ドルもらえるという新聞記事を読んだのである。ケン・ローチ監督（英）は、チリで1973年に起きた事件との連想へといざなう。アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督（メキシコ）は、9.11の実際の映像、ときに音声のみを流す。そして今村昌平監督は、太平洋戦争に重ね合わせて、聖戦への批判を訴える。

イスラームが関連するテロが起こると、必ずと言っていいほど、聖戦（ジハード）という

が概念が取り上げられる。イスラームに理解を示す人は、ジハードは本来的には精神的なものが中心であったとする。すなわち心を治める大ジハードこそ肝要で、戦闘は小ジハードであるとする。だが実際にはもっぱら戦い際してジハードという言葉が用いられる。戦いを鼓舞するために宗教的理念を用いるということには、ここに作品を寄せた監督たちはおそらく否定的な思いを抱いているであろう。とりわけ今村昌平監督製作のものは、聖戦というスローガンへの強い嫌悪感に貫かれている。

### (3) カルト・セクト問題

1995年3月に起こったオウム真理教による地下鉄サリン事件以後、「カルト・セクト問題」も日本の宗教文化教育における重要な課題として浮上してきた<sup>73</sup>。宗教活動はすべて善であるという前提はもはや社会的に支持されなくなっている。日本ではむしろ「宗教は危険である」という見方も若い世代では増えている。

『ガイアナ 人民寺院の悲劇』<sup>74</sup>は、1978年に南米のガイアナで新興宗教団体の人民寺院（ピープルズ・テンプル）の信者たち900人以上が集団自殺した事件を題材にとった映画である。サンフランシスコにあった教会で、教祖のジェームズ・ジョンソン（実際の人民寺院の教祖はジェームズ・ウォレン・ジョーンズ）が信者たちに世の乱れを説くところから話は始まる。この国は約束の地、選ばれた地ではないとして、南米のガイアナに移住すると伝える。かくてガイアナのジョンソントウン（実際はジョーンズタウン）へ集団移住するが、そこでの共同生活はしだいに束縛が強いものとなり、信者には強制労働のような日々となる。この情報を得た下院議員のオブライエン（実際はレオ・ライアン）は、実態を調査すべくガイアナにやってくる。実態が明らかになりそうになり、共同体を立ち去ろうとしていたオブライエン一行はジョンソンの指示に従った信者数名に射殺される。追い詰められたジョンソンは、信者全員に毒を飲ませる。

人民寺院事件では900人以上が集団自殺したので世界的に衝撃をもたらした。米国では1993年にテキサス州ウェイコでブランチ・デヴィディアンがFBIとの銃撃事件を起こした。1997年にはカリフォルニア州でヘブンズゲイトの信者39人が集団服毒事件を起こした。1990年代前半にはスイスに本部をもつ太陽寺院（ソーラーテンプル）が各地で集団自殺事件を起こした。こうした事件で危険性をもった宗教団体という意味でのカルトないしセクトという言葉は頻繁に使われるようになった。しかし、他方でこうした事件に至らなくても、半ば強制的なやり方、あるいは非常にマニュアル化されたやり方で、人々を不安に陥らせたり、家族から引き離そうとしたりする行為に着目する研究者もいる。この場合にはしばしば洗脳とかマインドコントロールといった概念が参照される<sup>75</sup>。

こうした視点からのカルト・セクト問題に関しては、『ザ・マスター』<sup>76</sup>が一見の価値がある。第二次大戦が終わり、米国の兵士たちは戦場から解放されたが、多くの兵士は新しい職場を求めなければならなかった。フレディ・クエルもその一人だが、彼は精神的な問題も抱えていて、行く先々の職場で問題を起こした。そうしたフレディが会うのが、小さな宗教集団のリーダーであるランカスター・トッドで、トッドは信奉者たちからは「マスター」と呼ばれていた<sup>77</sup>。

心の病を抱えるフレディとマスターは相互依存関係に近い。マスターもある意味、心の問題を抱えているからである。マスターの息子はそのいかがわしさを見抜いているようであ

る。フレディはマスターのやり方に反発を覚えたりしながらも、統御できない心の問題にずっと向かい合う。

その前年に公開された『マーサ、あるいはマーシー・メイ』<sup>78</sup>も、やはりカルト・セクト問題に直結するストーリーである。カルト的集団からの生活から逃げ出した一人の若い女性の心理と行動を描いているが、現実と過去の記憶とを交互に描写していくやり方が、サスペンシ的な雰囲気を生み出している。

パトリックをリーダーとする集団と暮らしていたマーサは、そこではマーシー・メイという名前をもらっていた。その集団は表面上は農場を営むようにみせかけているが、実は盗みもするし、みつかれば殺人さえいとわない。「浄めの儀式」の名のもとに、リーダーは女性たちと性的に交わる。2年の間そこで生活した後、マーサは脱走を試みる。唯一の身寄りである姉のルーシーに連絡し、姉夫婦のもとに身を寄せる。ルーシーは深くは事情を聞かず、妹の支えとなろうとする。しかし姉夫婦と同居を始めたマーサは、周囲を戸惑わせる奇妙な行動を繰り返す。裸で湖で泳いだり、突然どなったり、性行為中の姉夫婦の寝室に突然はいってきたりする。すべて集団で生活していたときの習性であり、またトラウマである。

心理的な面からカルト・セクト問題を扱った映画は、非常にシリアスな描き方になる。一定期間特異な集団生活を送った人間には、その集団特有の身体的記憶が刻まれる。理性で判断しての是非とは別に、体と心が自然に反応してしまうようになった人間の描写を扱うとなると、宗教文化の理解という範囲を超えるような局面が出てくる。それゆえこうした類の映画を宗教文化教育の教材に用いる場合には、カルト・セクト問題の対象とされるような教団なり運動についての認識を、一定程度蓄えておくことが必要とされる。

## むすび

以上、宗教文化教育の教材として用いうる映画を、4つのテーマに分けて取り上げた。最初に述べたように、本稿では宗教文化教育に関わる映画を網羅的に論じてはいないし、ここで設けたテーマも暫定的なものである。評価の高い映画、話題になった映画、そしてDVDやビデオで入手しうる映画などをとりあえずの対象としている。また宗教文化教育にとっては自国の宗教文化の理解を深めることと、外国の宗教文化の理解を深めることの双方が課題であるが、本稿では後者に力点を置いた紹介となっている。前者に関しては稿をあらため論じたいと考えている。

映画を宗教文化教育に用いる際の手引きの一つは、井上順孝編『映画で学ぶ宗教文化』（弘文堂、2009年）として刊行されている。同書には82の映画の紹介とその他百余の作品についての短い言及とがある。またこれを受けて、書籍よりも広く情報を共有するために、ウェブ上に「宗教と映画文化」のデータベースが作成され、情報は逐次更新されている<sup>79</sup>。本稿はこうした研究を踏まえ、映画を宗教文化教育の教材として取り上げるに適していると考えられる映画名を具体的に示し、そこで可能になるテーマを例示したものである<sup>80</sup>。扱った対象に偏りがあることは否めないにしても、最後にこうした際に生じると考えられる当面の課題についてまとめておきたい。

ここで紹介した映画にはキリスト教、イスラーム、仏教、ヒンドゥー教、ユダヤ教の教えや儀礼、実践などが見出される。これらはグローバル化が進むこれからの時代に日本人が遭遇する確率が高いと考えられる宗教文化である。キリスト教に関連するものが多くなったの



は、日本において入手できる素材としては、やはりキリスト教関係が多いことに起因する。いわゆる宗教映画と中心的テーマは宗教でないものの双方が含まれるが、教材とするうえで、両者を厳密に分けることはしばしば困難であるし、あまりそのことにこだわる必要はないと考える。

日本映画の場合であると、教団作成の映画、たとえば天理教の『扉は開かれた』（1975年）、金光教の『教えは和賀心にあり』（1983年）、創価学会の『人間革命』（1973年）などは、主として信者を対象としている。しかし、『日蓮』（1979年）、『空海』（1984年）、『親鸞—白ひ道』（1987年）、『禅ZEN』（2008年）などは各仏教宗派の開祖の生涯を扱っている宗教映画であるが、広く一般の日本人を対象としたものである。そして同時に日本の仏教文化を知る上で参考になる。たとえばドイツで制作された『MON-ZEN』<sup>81</sup>は禅に惹かれて日本にやってきたドイツ人を描く喜劇的要素のある映画だが、これを道元の生涯を描いた『禅ZEN』と比較しながら禅文化を考えるという方法もある。宗教映画かそうでないかより、視点の違いがどこにあるかを考えた方が教育の場では広がりが出る。

では視点の違いという場合、どのようなことに留意すべきであろうか。主として誰の立場に立っているかは、まず認識しようと努めるべき事柄である。特定の個人やグループ、教団、民族あるいは国家など、レベルはさまざまだが、誰の立場ということはきわめて重要である。またその立場に立っているのが自覚的か、無自覚的かについても吟味すべきである。これは一つの作品に対する多様な解釈という以前のこととして、映画を宗教文化教育の教材として用いるときに踏まえておかなければならない根本的な事柄である。

映画の製作者と鑑賞者とを分けて考えた場合、まず映画の制作はさまざまな人々の思惑の集合体であることにも留意しておかなければならないだろう。ヒットするしないの経済的問題。どんな社会的メッセージを込めるかの政治的あるいは社会的問題。どんな価値観を示すかの宗教的、倫理的、さらに哲学的問題。娯楽に徹底するかしないかの遊び的問題。こうした数多くの要因に関して、制作会社、監督、演出家、出演者など制作に関わる人々は、大なり小なりそれぞれの関与をすることになる。

できあがった作品を鑑賞する側もまた多様である。制作者が想定していなかったような鑑賞者も当然出てくる。内容に大きな権限をもつ監督だが、その監督が想定しうる鑑賞者には限りがある。さらに同じ人物が異なった時期に同じ映画を観て、異なった場面に注意を向けるということがありうる。若い頃と年取った頃でも見方が変わるかもしれない。制作側が孕み持つ多様性と制作者が意図していなかった要因、そして鑑賞者側のそのときどきの多様な評価。こうしたことを大前提としながらも、宗教文化教育として用いるときにとりわけ注意を払うべきことがある。

まず自分があまり体験することのない宗教文化への理解を、映画を通して行うことは非常に難しい。それはとりわけ強い偏見をもって描かれた映画であることを感知しようとする際に顕著である。自分が専門的な研究対象としている宗教史以外については、偏見を見抜くことがきわめて困難な場合があると考えられるからである。さらに偏見の存在が見て取れても、それをどの程度考慮して教材に用いるかも難しい。

これはおそらく教員個人の努力では到底解決しえない事柄である。それを多少でも克服しようとするなら、少なくとも次の二つの準備ないし実践が必要になる。一つは教員相互のネットワークを形成することである。もう一つは教材として与えられた側、つまり学生側の

反応なり解釈の収集に努めることである。一番目と二番目を重ねると、学生からの反応を教員が共有していくことが重要になってくる。これによって、認知科学において議論されるテーマの一つである認知バイアスに関わる問題にある程度対処できる。制作者側の作ったフレームは対象に関する認知バイアスを必ず含む。鑑賞する側もまた認知バイアスをもって観る。バイアスは避けがたいものであり、常に再生産されるものである。それが社会的に負のスパイラルの原因とならないように努めることである。これが映画を宗教文化教育の教材とし、かつ教員相互のネットワークを形成するうえでのもっとも肝要な点の一つである。

\*本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者・井上順孝）による研究成果の一部である。

## 注

- 1 2009年9月20日に國學院大學日本文化研究所で開催された国際フォーラム「映画の中の宗教文化」のパネリストの一人であったジャン-ミシェル・ビュテル（Jean-Michel Butel）氏は、「アニメはどんな宗教を語ってくれるか」という発表で、『平成狸合戦ぽんぽこ』という映画のなかに日本文化や日本宗教がいかに混じりこんでいるかについて言及した。これについては井上順孝編集責任『国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」報告書』、2010年、國學院大學、を参照。
- 2 *The Encyclopedia of Religion and Film*, ABC-Clío, 2011 には宮崎駿の項目が立てられているが、宮崎アニメを通して日本宗教を議論する論考は数多くある。
- 3 これについては1990年代に國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトで実施した宗教系の学校に教材に関して質問したアンケートの結果が参考となる。國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』（弘文堂、1997年）の資料篇を参照。
- 4 原題：Scrooge、監督：ロナルド・ニーム、米国。なお1951年にも同名の映画が制作されたが、入手が困難である。
- 5 原題：A Christmas Carol the Musical、監督：アーサー・アラン・シーデルマン、米国、2004年。
- 6 原題：A Christmas Carol、監督：ロバート・ゼメキス、米国、2009年。
- 7 原題：Four Christmases、監督：セス・ゴードン、米国、2008年。
- 8 原題：Hjem til Jul、監督：ベント・ハーメル、ノルウェー、ドイツ、スウェーデン、2010年。
- 9 原題：Miracle on 34th Street、監督：ジョージ・シートン。なお、1994年にリメイクされたが、ストーリーは多少異なっている。
- 10 原題：Joulutarina、監督：ヨハ・ウリオキ、フィンランド、2007年。
- 11 監督：伊丹十三、日本、1984年。
- 12 監督：滝田洋二郎、日本、2008年。
- 13 監督：君塚良一、日本、2012年。
- 14 原題：少林三十六房、監督：劉家良、香港、1977年。
- 15 達磨に関しては「面壁九年」という言葉がある。達磨太子は中国に来て、少林寺において壁に向かって9年間ひたすら座っていたとする伝説である。そうした静かな禅の教えと、荒業をもつ拳法とがどうつながるのか。推測されているのは、達磨は王子であったがゆえに、中国に来るにあたっては、護衛としてインド拳法の達人が随伴し、その護衛の者たちが中国に拳法を伝えたのではないかということである。
- 16 宗道臣の少林寺との関わりについては、井上順孝編『近代日本の宗教家101』（新書館、2007年）の「宗道臣」の項を参照。

- 17 原題：少林寺、監督：ベニー・チャン、香港、中国、1982年。なおこの映画の製作を支援したのが宗道臣の創設した少林寺拳法連盟である。宗道臣の娘としてその後継者となり、現在少林寺拳法グループ総裁であるのが宗由貴氏である。同氏も、父の遺志を継ぎ、日中友好に力を注いでいる。少林寺の壁画の修復に取り組み、2002年には少林寺希望小学校を設立するなどしている。1980年頃は少林寺は文化大革命の影響もありさびれていて、僧侶は数名しかいなかったという。しかしこの映画で少林寺ブームがおき、現在は700人を超える僧侶がいるとされる。
- 18 原題：新少林寺、監督：チャン・シン・イェン、香港、中国、2011年。
- 19 これらの香港映画は『幽玄道士』（1986年）といった台湾映画に影響を与えた。
- 20 原題：우리들의 행복한 시간、監督：ソン・ヘソン、韓国、2006年。なおこの映画の原作である孔枝泳著の小説を日本語に翻訳したのは、1978年に北朝鮮に拉致され2002年に帰国してきた蓮池薫氏である。
- 21 原題：방문자、監督：シン・ドンイル、韓国、2006年。
- 22 原題：Little Buddha、監督：ベルナルド・ベルトルッチ、米国、1993年。
- 23 原題：Bombay、監督：マニラトナム、インド、1995年。
- 24 1992年12月6日、ウツタルプラデーシュ州アヨーディヤーのイスラームのモスクであるバーブリー・マスジドを暴徒化したヒンドゥー教徒が襲って破壊した。アヨーディヤーは叙事詩ラーマヤナの主人公であるヒンドゥーの英雄神、ラーマの生誕地であり、モスクはラーマ誕生地寺院を破壊して建てたものだと信じていた。ヒンドゥー教徒とムスリムの対立を象徴する事件の一つである。
- 25 原題：Om Shantio Om、監督：ファラー・カーン、インド、2007年。
- 26 原題：Habemus Papam、監督：ナンニ・モレッティ、イタリア、2011年。
- 27 原題：The Pope Must Die、監督：ピーター・リチャードソン、英国、1992年。
- 28 原題：The Nun's Story、監督：フレッド・ジンネマン、米国、1959年。
- 29 原題：Soeur Sourire、監督：ステイン・コニクス、フランス、ベルギー、2009年。
- 30 原題：Doubt、監督：ジョン・パトリック・シャンリー、米国、2008年。
- 31 原題：Oh, God!、監督：カール・ライナー、米国、1977年。
- 32 原題：Oh, God! Book II、監督：ギルバート・ケイツ、米国、1980年。
- 33 原題：Oh, God! You Devil、監督：ポール・ボガート、米国、1984年。
- 34 原題：Bruce Almighty、監督：トム・シャドヤック、米国、2003年。
- 35 原題：Evan Almighty、監督：トム・シャドヤック、米国、2007年。
- 36 原題：Jesus Christ, Superstar、監督：ノーマン・ジュイソン、米国、1973年。
- 37 原題：The Last Temptation of Christ、監督、米国、1988年。
- 38 原題：The Da Vinci Code、監督：ロン・ハワード、米国、2006年。
- 39 2012年9月29日（土）13:00～18:00、國學院大學渋谷キャンパス 学術メディアセンター1F 常磐松ホール。概要については『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』6号、2013年参照。
- 40 原題：Monty Python's Life of Brian、監督：テリー・ジョーンズ、英国、1979年。
- 41 原題：Postia Pappi Jaakobille、監督：クラウス・ハロ、フィンランド、2009年。
- 42 原題：Witness、監督：ピーター・ウィアー、米国、1985年。
- 43 原題：For Richer or Poorer、監督：ピーター・ウィアー、米国、1997年。
- 44 原題：Inherit The Wind、監督：ダニエル・ペトリ、1999年。
- 45 原題：Inherit the Wind、監督：スタンリー・クレイマー、米国、1960年。
- 46 原題：Jesus Camp、監督：ハイディ・ユーイング、レイチェル・グレイディ、米国、2006年。
- 47 ドーキンスは原理主義に焦点を当てているが、宗教全般への批判的視点もある。これについては、ドーキンス『神は妄想である—宗教との決別』早川書房、2007年（原著：Richard Dawkins, *The God Delusion*, Houghton Mifflin Harcourt, 2006）や、同『悪魔に仕える牧師—なぜ科学は「神」を必要としないのか』早川書房、2004年（原著：A Devil's Chaplain: Reflections on Hope, Lies, Science, and

*Love*, Houghton Mifflin Harcourt, 2003) などを参照。

- 48 ID 論と日本で一部に広がっている「サムシング・グレート」との関連についての論考として、藤井修平「日本における反進化論思想と道徳教育の結びつきー「サムシング・グレート」を例にー」(『ラーク便り』63号、国際宗教研究所・宗教情報リサーチセンター、2014年)を参照。
- 49 Church of the Flying Spaghetti Monster の公式ホームページの URL は次のとおりである。<http://www.venganza.org/>
- 50 原題：THE MESSAGE、監督：ムスタファ・アッカド、モロッコ、クウェート、リビア、サウジアラビア、1976年。
- 51 原題：Hafez、監督：アボルファズル・ジャリリ、イラン、日本、2007年。
- 52 原題：Persepolis、監督：マルジャン・サトラピヴァンサン・パロノー、フランス、2007年。
- 53 原題：Argo、監督：ベン・アフレック、米国、2012年。
- 54 原題：East is East、監督：ダミアン・オドネル、英国、1999年。
- 55 原題：Ali、監督：マイケル・マン、米国、2001年。
- 56 日本ではネイション・オブ・イスラームについての研究はまだそれほど多くはないが、基本的な紹介としては Ch. パートリッジ編『現代世界宗教事典』(悠書館、2009年)の「ネイション・オブ・イスラーム」の項目、あるいは『世界宗教百科事典』(丸善出版株式会社、2012年)の「ネイション・オブ・イスラーム」の項目を参照。
- 57 原題：My Big Fat Greek Wedding、監督：ジョエル・ズウィック、米国、2002年。
- 58 原題：God Has a Rap Sheet、監督：カメル・アメッド、米国、2003年。
- 59 原題：My Name Is Khan、監督：カラン・ジョーハル、インド、2010年。
- 60 原題：Almanya - Willkommen In Deutschland、監督：ヤセミン・サムデレリ、ドイツ、トルコ、2011年。
- 61 原題：Paradise Now、監督：ハニ・アブ・アサド、フランス、ドイツ、オランダ、パレスチナ、2005年。
- 62 監督：広河隆一、日本、2011年。
- 63 原題：Disengagement、監督：モス・ギタイ、イスラエル、イタリア、フランス、ドイツ、2000年。
- 64 原題：THE SYRIAN BRIDE、監督：エラン・リクリス、イスラエル、フランス、ドイツ、2004年。
- 65 原題：Des Hommes et des Dieux、監督：グザヴィエ・ボーヴォワ、フランス、2010年。
- 66 原題：Va, Vis et Deveins、監督：ラデュ・ミヘイレアニュ、フランス、2005年。
- 67 エチオピアのユダヤ教徒をイスラエルに移送する計画は2度実施された。この映画で紹介される「モーセ作戦」と1991年の「ソロモン作戦」である。この2つの作戦で2万数千人のファラシャがイスラエルに移住できたとされている。しかし、その過程で飢え、襲撃、拷問などによって、数千人が命を落としたと言われる。きわめて過酷な出来事がこの映画の背景に存する。このような計画の背後には周りをイスラーム国に囲まれたイスラエルが、ユダヤ人の人口を増やさなければならないという要因が大きく介在している。
- 68 この映画の字幕監修は現代ユダヤ教研究の専門家白杵陽氏である。こうした宗教的背景が深く関わる映画に、専門家の監修がはいることは好ましいことである。
- 69 原題：The Wind That Shakes the Barley、監督：ケン・ローチ、アイルランド、英国、フランス、2006年。
- 70 原題：Bloody Sunday、監督：ポール・グリーングラス、英国、2002年。
- 71 原題：The Kite Runner、監督：マーク・フォスター、アメリカ、2007年。
- 72 原題：11'9"01 September 11、監督：ケン・ローチ、ショーン・ペン他、フランス、2002年。
- 73 日本や米国ではカルト問題と呼ばれ、ヨーロッパではセクト問題と呼ばれるので「カルト・セクト問題」と表現しておく。この用語を使用するようになった経緯については井上順孝編『現代宗教事典』(弘文堂、2005年)の「カルト・セクト問題」の項を参照。



- 74 原題：Guyana: Crime of the Century、監督：ルネ・カルドナ・Jr、パナマ、スペイン、メキシコ、1980年。
- 75 こうした観点からのカルト問題の整理には、櫻井義秀『「カルト」を問い直す—信教の自由というリスク』（中公新書 2006年）を参照。
- 76 原題：The Master、監督：ポール・トーマス・アンダーソン、米国、2012年。
- 77 マスターの風貌、作家、医者、原子物理学者、理論哲学者、こうした多くの分野にまたがる肩書、また第二次大戦後ほどない時代設定ということからして、この団体のモデルがサイエントロジーではないかという見方が生じた。マスターが信奉者たちに施す療法が、コース・メソッドと呼ばれているが、これもサイエントロジーのオーディティングを連想させるものである。
- 78 原題：Martha Marcy May Marlene、監督：ショーン・ダーキン、米国、2011年。
- 79 科学研究費補助金 基盤研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表者・井上順孝)による研究成果である。URL は下記のとおり。  
<https://sites.google.com/site/cercfilms/>
- 80 2007年以來毎年刊行されている渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本』（平凡社）にはデータ集の一つとして「宗教がわかる映画ガイド」のコーナーがある。このコーナーの執筆にあたり、毎年10点程度を紹介しているが、宗教文化教育に関連するものも含まれている。本稿に扱い得なかったものについては、そちらを参照のこと。また筆者が扱った書籍の一覧は下記のホームページのうち「宗教関連の映画のエッセイ・リスト」のサイトで公開している。  
<http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/>
- 81 原題：Erleuchtung Garantiert、監督：ドーリス・デリエ、ドイツ、1999年。

資料紹介

河合博之駐ポーランド特命全権公使の改宗と客死（1933年）  
— 『無原罪の聖母の騎士』誌より—

加藤久子

はじめに

フランシスコ・ザビエルの日本到来以降、宣教師の日記や手記は、日本の政治文化（統治のしくみ）や社会、学問、文化、民俗を現在に伝える貴重な資料となってきた。幕末～明治期以降、諸外国との往来が活発化するにつれ、外交官や軍人、教師やジャーナリストなど、記録の書き手は多様化し、宣教師の書き残した記録は「日本」を理解するための資料としては副次的なものとなった。しかし、文化接触の歴史、または交流史の文脈において、今なお、新たな視点や情報（歴史的な事実）を獲得するための資料となり得る。

本稿では、1930～36年に断続的に長崎に居住したマキシミアノ・コルベというカトリック司祭が編纂した月刊誌『無原罪の聖母の騎士』より、戦間期欧州に駐在した一人の日本人外交官のカトリックへの改宗と死にまつわる記事を紹介する。コルベ神父については、カトリックの聖人として全世界において崇敬の対象となっているが<sup>1</sup>、本稿で取り上げるのは、日本で宣教を行った1930～36年の時期である。分析対象としたのが1点の出版物であり、また期間も限定的であることから、おのずと限界はあるが、雑誌の内容を紹介しつつ、（1）日本滞在がコルベ神父にもたらした内的変化、（2）第二次世界大戦開戦前夜の日本人外交官のキリスト教への改宗といった2つの視点から、今後の研究の展開の可能性について示唆したい。

1. コルベ神父と『無原罪の聖母の騎士』誌

ライムント・コルベは1894年、ポーランドの儉しく敬虔な職工の家庭に生を受けた。コンベンツァル聖フランシスコ修道会の神学校に学び、同修道会に志願。マキシミアノという修道名を授かり、司祭となる。コルベ神父は、博士号取得のためローマに留学中、フリーメイソンの示威行動に衝撃を受け、無信仰者や反カトリック主義者を回心させることに並々ならぬ熱意を抱くようになった。1917年に「無原罪の聖母の騎士会」（信心会）を立ち上げ、ポーランドに帰国後、出版による宣教を思い立ち、『無原罪の聖母の騎士』誌の発行を開始した。雑誌は20年かけて、100万部を超える月刊誌へと発展を遂げ、ポーランドの農村や貧しい労働者の間にも定着をみた（当時、小教区教会や各家庭、職場でのいわゆる「回し読み」や「読み聞かせ」が一般的であったことを考えれば、その影響力は出版部数の数倍と考えられる）。

このような中、コルベ神父はかねてから構想していたアジア宣教の計画を具体化すべく、1930年4月に長崎に到着した。早速5月15日付にて日本語版『無原罪の聖母の騎士』第1号が発刊されている。内容は年を追って変遷が見られるが、1930年に出版された7号分では、①コルベ神父による講話（特に聖母マリアについて）、②読み物（聖人伝、ルルドの奇蹟の紹介）、③信徒の投稿（ポーランド語版からの転載）が中心である。

これが翌 1931 年になると、①が減少し、④世界各国におけるカトリックへの改宗者に関する記事が毎号のように掲載されるようになる（1931 年 1 月号「ニューヨークに於て高名なる牧師の歸正」、「プロテスタント信者社會の首領歸正して公教司祭と成る」、2 月号「カトリック教會への改宗に關して」、3 月号「ビルマニアに於ける衆團的改宗」、「ロルツイング牧師の活動」、「英國教會の宣教師の歸正」、「何故かくも多くの英國の作家がカトリック教會に歸正するか」等。歸正とは、キリスト教の他の教派からカトリックに改宗することを指す）。また、同年 4 月号では、3 月 7 日に長崎の「無原罪の聖母の騎士修道院」が初の日本人修道士を迎え入れたことが報じられ、この年の後半より、日本人の書き手による記事が増加し、連載も複数始まっている。

記事の主題が短期間で変転しているのは、コルベ神父が欧州やインド等への出張により、不在となる期間が少なくなかったのが一因であろうが、会と雑誌の日本への浸透や、コルベ神父の内面に一定の変化があった影響とも考えられる。3 年目にあたる 1932 年までは、雑誌に日本に関する記述、または日本人との対話というものがほとんど登場せず、稀に記述があったとしても、日本の街頭にマリア像がないことへの嘆き（1930 年 6 月号）や、以下のような、対話の形式を取りつつも実質的にはコルベ神父の講話と言えるものである（「我は無に歸するを欲せず」1930 年 6 月号）。

それは五月の半ばでした。私は用向きのため大阪へ旅行をしました。汽車の中で一人の青年と會ひました。彼は妻を娶るべく東京より故郷へ歸る所だつたのです。

「あなたはどんな宗教を御守りですか。」

「神道を守つて居ます。」

「そしてあなたは何んな目的で生活してゐなされるんですか。」

「……」彼は其目的をはつきり答へることは出来ないで、困つている様子でしたから私は續いて尋ねました。

「死後私等は無に歸するんでせうか、或は何か残る所があるんでせうか。」

「勿論何も残りはしませんよ、私信仰は有ちません。」

「今信仰問題をしばらく置き只だ道理だけで考へて見たならばどうでせう。幸福を欲するのは人間の性質です、誰でも幸福を欲しないものはありません。この性質から推せば人の目的は幸福でなければならぬ。又實際誰でも夫れを目的としてゐるぢやありませんまいか。」

「左様！實際ですネ」

「あなた自身は如何です？幸福でありたいと思ひぢやありませんか」

「それも出來得る限り長く幸福でありたいとお望みでせう。」

「勿論左様です。」

「そして實際の所死んでからでも何にも無いものに……虚無になりたいですか、或いは何かとなつてゞも残りたいと思ひませんか。」

「私虚無になりたくはないですナ」（以下略）

さて、このような中、4 年目にあたる 1933 年頃より、日本の宗教や日本人の靈性について踏み込んだ記述がみられるようになる。同年 2 月号に「誰が全世界の秩序を考へた乎」と

して、長崎近在の仏教寺院（宗派、寺院・僧侶の名など不明）を訪ね、僧侶と「アミダ仏は被造物ですか？」「否え、造られた物ではありません」「では始めも無いんですか？」「左様！終り無く永遠です」「ぢやあ全世界はアミダ仏に依って創造られたんでせうか？」「否え！全世界は造られた物では無いのですから、勿論始めはありません」というような問答を行ったと記している。コルベ神父は言下にこれに論駁しなかったものの、誌上では、「即ち学問上に於ける眞理が唯一だから、眞の宗教も唯一であらねばならぬ」とし、「しかして、眞の神とは全世界の創造主、即ち天主を指して言ふに外ならぬ」と結論づけている。

1934年9月号に掲載された精霊流しに関する記事は少し様相を異にする。コルベ神父は、異国情緒あふれる光景に大いに感興を催したようで、道行く人に、精霊舟や祖先の靈魂について尋ね、以下のような感懐を漏らしている。

思ひ浮かべると其れは實に綺麗な祭でありました。所謂人は死んでも大丈夫だ。何處かに幸福は見つけ出されるのだから即ち死んだ兩親に對して子供が行ふこの盆祭といふ立派な行事に依つてこの上もない美しい愛が施こされ又死せる兩親はこの盆祭といふ年一度の式にはるばる家族を訪れて自分の愛を子供等に分つ、何と麗はしい盆祭よ」と信じ切つている居る世人の多くに果して如何ばかりの「愛」といふ幸福が齎らされてゐるのでせうかの果たして如何ばかりの愛が彼等の死せる兩親に送られて居るでせうか？

ここでも、最終的には、「煉獄に止まつてゐるかも知れない彼等の靈魂を一日も早く天國へ入らせるためには如何にすればよいでせうか。それこそ眞心より進む私共の祈りこそ死せる靈魂と天主様とを近づけるものではありませんか、天主様に祈ることこそ祖先に對し又兩親に對してより大なる愛、此世に於いて故人に對してより立派な供ひはないと私は確信致します」と、カトリシズムの文脈において結論づけてはいるが、一定の共感を示している。

ただし、これは、コルベ神父が日本の風土や靈魂觀に親和的になってきたというより、精霊流しを、ポーランドのカトリック教会の行事（民間信仰と融合したもの）や民俗的靈魂觀と重ね合わせて理解した可能性が考えられる。ポーランドには、11月2日の「死者の日(zaduszki)」にあわせ墓参し、墓地に花などとともに蠟燭をともした色鮮やかなランプを飾る風習がある。「死者の日」そのものは、998年にクリュニー修道院で始められたカトリックの習慣であるが、ポーランドでは、それ以前から存在した10月31日～11月1日にかけて父祖の霊が家に戻ってくるという民間信仰に基づき、墓地に蠟燭をともすことで靈魂を「あたため」て呼び覚まし、家までの十字路に松明を灯して道案内をする風習があったとされる。戦前のポーランドの農村では、「死者の日」の前日には、死者のための食事やウォッカを用意し、夜通し家のドアを少し開けたままにし、タオルや水、石鹸を用意した。用意すべき食事のメニューや「靈魂が嫌う行為」とみなされた細々とした禁忌も言い伝えられ、前夜から当日にかけてそれが守られた。コルベ神父が、道行く人から聞いたとされる「死んで居た祖先の靈魂が自分の家族を訪問して最後の十五日の晩には又極樂に歸る」との説明は、カトリックの教義には合わないにせよ、ポーランド人にとって決して理解しがたいものではなかったに相違ない。だからこそ、精霊流しから、11月2日の「死者の日」を連想し、煉獄に止まっている家族の靈魂のために祈るカトリック教会の慣習と結びつけて説明したものと考えられる。



さて、この時期、コルベ神父は、一時帰国中のワルシャワにおいて、一人の日本人外交官と知り合い、同氏の改宗について『無原罪の聖母の騎士』誌に長文をしたためている。1933年12月号に掲載された、「聖母の小さき花：ポーランド駐劄日本帝國公使河合博之氏受洗」と題する記事がそれである。

## 2. 河合博之駐ポーランド特命全權公使の葬儀と墓

ワルシャワ市北西部のポヴォンスキ (Powązki) 地区には、各教派の墓地が集中しており、墓地の代名詞となる地名である。特に、カトリックのワルシャワ大司教区が管理するスタレ・ポヴォンスキ (古ポヴォンスキの意) 墓地は、18世紀末に造営が始まって以来、増築を重ね、現在では43haに及ぶ広大な面積を有し、しばしばヴァチカン市国の面積 (44ha) に匹敵するとの喩えが用いられる。



河合博之公使の墓 (ポヴォンスキ墓地)<sup>2</sup>

独逸露三国分割期のコシチュシコの反乱

(1794年) から第二次世界大戦中のワルシャワ蜂起 (1944年) に至るまで、多くの戦死者が葬られてきたほか、ショパンの両親、作曲家のカルウオヴィチやヴェニャフスキ、近年では映画監督のケシロフスキなど、著名人の墓も少なくない (もともと、20世紀以降は、戦死者も著名人も、スタレ・ポヴォンスキのさらに北西に造営された公営のポヴォンスキ軍用墓地に葬られるケースが圧倒的に多い)。

そのスタレ・ポヴォンスキ墓地の一角に、河合博之公使の墓がある。パウシュルトコフスカによれば、河合公使の外交官としての経歴は以下のようなものである。

河合博之 (1883-1933) は1920年代にポーランドに駐在した前任者の多くと同様、東京帝国大学法科大学の出身であった。外交官としてのキャリアは1908年に始まり、1921年までフランスに駐在し、リヨン領事、在パリ日本大使館のアタッシュおよび一等書記官などを務める。次いでスイス、ソ連に駐在。帰朝後、条約局第三課長となる。1923年から在ベルギー大使館参事官、1926年から31年まで再びパリ勤務となる。同年7月ワルシャワに赴任。8月1日に信任状をポーランド大統領に手交している<sup>3</sup>。

さて、ポーランド在勤中の河合公使の、旺盛な仕事ぶりについては、外交文書から推しはかることができるが、パウシュルトコフスカの記述は、早々に公使の葬儀へと移っている。

河合公使は在任中の1933年8月15日未明、この年の4月から静養していたオトフォツクのサナトリウムで亡くなった。死因は1932年の晩秋、国際連盟会議からの帰途に感染した感冒による合併症であった。8月17日に行われた葬儀は、当時ピェラツキ通り10番地にあった日本公使館を出発した葬送行進で始まった。軍楽隊を伴ったポーラ

ンド軍が葬列を先導し、大統領、首相、外務省からの花輪を携えた代表団がこれに続いた。そのあとを、死後に贈られた大ポーランド勲章を飾った公使の棺が運ばれていく。棺に続いて未亡人と子女、木下代理公使はじめ日本公使館の職員たち、さらにポーランド政府および民間人、軍の代表、ローマ教皇大使を始めとする各国外交団、ポーランド・日本協会、東洋研究所、日本愛好学会の代表が更新した。イエンジェイエヴィチ首相も参列した礼拝式は、聖十字架教会にてガル大司教により厳かにとり行われた<sup>4</sup>。

『無原罪の聖母の騎士』1933年12月号に掲載された葬儀の写真を下記に掲げる（右上の写真が、ショパンの心臓が納められていることで有名な聖十字架教会）。

河合公使がカトリック墓地に葬られている以上、カトリック信者であったことには間違いないであろうが、では、公使はいかなる経緯でカトリック信者になったのだろうか。

### 3. 河合公使の改宗

『無原罪の聖母の騎士』において、河合公使の死に関する記述は以下の4か所にみられる。

① 1933年12月号、354～363頁

「聖母の小さき花：ポーランド駐箚日本帝國公使河合博之氏の受洗」コルベ神父著

② 1933年12月号、371～373頁

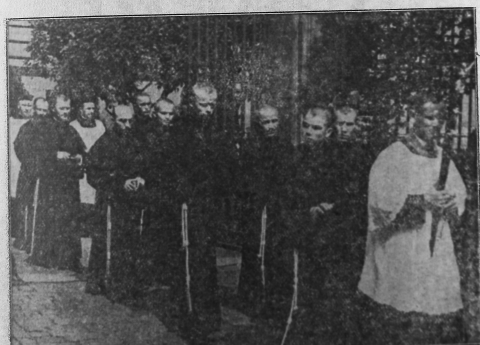
「河合公使夫人の無原罪の園訪問」コルベ神父著



公使の棺、葬儀の儀仗隊、車隊、儀仗隊、音次、の兵士、河合公使の遺骸を運ぶ。送る。



葬列、天主堂に着く。



十字架の次に、無原罪の園の修道士、ついでに神父、その後、棺、河合氏家。



天主堂を出て、墓地向左、河合夫人、同令、平田書記官。



司馬馬使教れる率を葬に墓  
教大デマル使節皇るさ引列て地



式 葬 祈 の 所 墓

③ 1934年1月号、16頁

「故波蘭公使河合氏御夫人始め、……」

④ 1934年3月号、92～93頁

「前ポーランド駐在河合公使の葬儀」

結論を先取りして言えば、①の記事により、河合公使の改宗については、臨終に際しての洗礼であったこと、また、公使夫人がもとよりカトリック信者であったことが明らかとなる。

河合公使の死の半月前にあたる1933年8月1日、4月より会議のためポーランドに帰国中であったコルベ神父は、カトリック信者である河合夫人と面識を得たいと考え、公使館訪問に際し、無原罪の聖母の像を持参し、これを夫人に贈呈したと説明されている。

夫人は贈り物を喜び、数日後、ワルシャワのコンベンツァル聖フランシスコ会の修院長とコルベ神父を別荘に招いた。コルベ神父は、河合公使が「肺を患つて」病床にあることは、この時に初めて聞かされたと記されている。数日

後、コルベ神父は公使を見舞いたい旨申し出て、夫人と夫人の母君とともに公使が療養するサナトリウムを訪問している。車中、夫人から、公使が重態であることを告げられたとし、初対面の公使の様子を「生た人とは思へない程、お顔、お手先など枯木の様にやせ細つてゐられた」と描写している。

然し、その日は御気分が大變宜しかつた様で、私と會話を喜んで下さつた。四方山の話の末、宗教へ自然話に移つた。公使は言れる。「仏蘭西にゐたとき、ル、ドに聖母御出現以來、奇蹟が絶えない話も聞いてゐた、そして、自分自身もその夥しい巡禮者に交つて、實際にル、ドの聖地を踏み、奇蹟も見たり、聞いたりして、その強い宗教的雰囲気包まれて來たが、しかし、それによつて信仰に這入らうと云う發心は起らなかつた、また、フランスで「イエズスキリスト」と云う表題の佛語の書物を貰つて讀んだ、そしてその本で、眞のキリスト教はカトリック教だと云う認識を深めたけれども、更に之によつてカトリックに入門しようと思ふやうな、はつきりした轉心は起らなかつた」。さう云つて、公使は次々に御自身の宗教觀を漏らされる。私が眞理の一なる所以を説明すると、さうだとうなづかれる。それで、宗教も亦、種々の教義を信ずる爲には一であらねばならぬ、また天主も一でなければならぬ等々の私の神學上の理論も、この智識階級の人によく解つて下さつた。三位一体に就ては、支那の教で、キリスト教とは異つた意味のものであるが三位一体説を教へられてゐたから、その觀念から容易に理解ができる。斯う云うかなりつき込んだ問題にふれる前、公使は、多くの色々な異なつた宗教があるが、皆それぞれに一樣に眞理を持つてゐるのではないかと言はれたが、私はそれを



否定しなかつた。

「真理の一なる所以」について得心しつつ、「多くの色々な異なつた宗教があるが、皆それぞれに一樣に真理を持つてゐるのではないか」と応じた河合公使の発言は、宗教多元主義の考え方に近いものと考えられる。しかし、コルベ神父は公使の発言を取上げて否定せず、夫人に「不思議のメダイ」（聖母マリアを描いたメダル）を託け、そのまま席を辞している。8月14日、公使危篤の知らせを受け、神父は医師、公使館職員らとともに病床に駆け付けた。

今は一刻の猶豫もない私の爲には大切な時間だ、私は直にかねて公使が親友として深交があつたポ國在各國外交官主席、教皇使節マルマヂー大司教にその旨電話でお知らせして、御來臨を乞うた。使節は宙をとばして自動車でかけつけられ、それから一時間の後には早くも病室にあつた。使節大司教に最後のお勧めをして戴くことは、私が前からきめてゐたことであつた。

折角お近づきになつたばかりの、またこの後も私に親しくしていただけるものと楽しみにしてゐた、このよき公使に今お別れしなければならぬのは、私には大きな悲みであつた。また、それと同じく大きな歎きは、誠の宗教に這入れず、そのまゝ逝かれるのではないかと云ふことであつた。私はひたぶるに聖靈の光を祈りながら、使節の來着を待つてゐた。使節は、別室で私から公使と私との今までの交渉、私が差上げたメダイを公使が好感をもつて受けられたことなど聴きとられて病室へ這入られた、使節は公使の日頃の高潔な人格該博な智識に敬服してゐられ、公使とは殊に親しくしてゐられた、この友情を通じて、又友人として最もよき言葉をかけられるのである。力強く救世主を物語り、來世を説かれ、信仰に入るの定義を諄々と教えて行かれた、その間、病床に侍べるもの、夫人を始め使節秘書、私それに信者でなかつたが御母堂この四人は心を籠めて祈つた。人類の元后なる聖母は河合公使のよき靈魂を召された。やがて公使は口を開かれると使節閣下に洗禮を乞はれたのだ。公使はフランシスコの靈名を望まれた、使節大司教の手によつて「父と子と聖靈の御名によつて汝フランシスコを洗ふ」との言葉がかけられ、聖水は頭に注がれた。受洗後公使は大きな心の喜びを受けられた。その喜びの色は顔から容易に察せられた。この深い大いなる喜び？平和は、眞の道に這入つたものでなければ味へないものであらう。この喜び、この平和こそ、天主のお恵みを得た證據ではないだらうか、且つ眞の宗教に這入つた證明にはならないだらうか。公使はそれから數時間のあいだ、地上に在つて、實に平和な喜びに浸つてゐられた。そして私たち病床を繞る人々に、何故もつと早くこの教に這入らうとしなかつたのだらう、この喜びを知らなかつたのだらうとくり返しくり返し言つてゐられた。かくてその日の夕方、即ち聖母被昇天の前日この平和な、そして清らかな靈魂は、聖母の御手に抱かれて地上をさつた。

なお、この後、コルベ神父は公使館に日參してカトリックの教を説き、9月7日には夫人の母君と日本から随伴していた家政婦の1人が教皇使節によって洗禮を授けられている。また、翌8日には、既に洗禮を受けていた2人の遺児（10歳と6歳の令嬢）が、使節大司教より初聖体に与っている。





河合公使遺影と遺族の教皇謁見の記事

なお③として挙げた1934年1月号の記事によれば、河合公使の遺族一行は、日本への帰国の途次、ヴァチカンに立ち寄り、教皇に謁見した。正装の河合公使の遺影とともに、教皇より、公使への哀悼と遺族への慰めの言葉があった旨報じられた。

#### 4. 日本人外交官のキリスト教への改宗

この後、『無原罪の聖母の騎士』誌では、立て続けに外交官（夫人・子女）の改宗について取り上げられる。『無原罪の聖母の騎士』誌は、カトリックへの改宗のニュースを継続的に取り上げていたが、この時期、特に外交官の改宗について立て続けに報じられたのは、河合公使の改宗を受けてのものであることは、以下のとおり明らかである。

⑤第46号（1934年3月1日付）81～82頁

「佐藤駐佛大使の令嬢受洗」

⑥第51号（1934年8月1日付）272頁

「スイス公使館の川村書記官歸正、夫人の熱心な祈の効」

⑤の記事では、本文の文脈とは関係なく、末尾に「又別項記載の如く去る17日東京麻布教會で葬式ミサを挙げた故ポーランド公使河合博之氏も臨終の病床に在つて洗禮を受けたことも讀者の知悉さるゝ通りである」と付言されている。記事内には、洗禮を受けた佐藤大使の令嬢（24歳、19歳）は東京の聖心学院に9年間学んだとの記載があるほか、サンパウロ総領事の令嬢（9歳）の受洗についても触れられており、総領事はワルシャワ在勤時に、後に教皇ピオ11世となるラッティ駐ポーランド大使と面識があったと説明されている。

⑥の川村書記官については、夫人が17歳の時に洗禮を受け、5人の子女にも洗禮を受けさせており、「夫君の歸正を日頃熱心に祈願してゐた」ことから、受洗に至ったとの説明がなされている。

以上の①～⑥の記事だけでは、何らかの結論を導き出すには甚だ心もとないが、明治期から昭和初期にかけての女性のキリスト教への改宗（ミッションスクールと女子生徒の改宗）、そういった女性と外交官との婚姻、戦間期欧州における外交官とカトリック高位聖職者との交友といった点が、少ない事例の中でも重複して浮かび上がってきていることは指摘できる。これらの点がどれほど一般的だったかを精査した上で、第二次世界大戦前夜における外交官のキリスト教への改宗とその職務への影響について、検討する余地はあると考える。

#### 5. まとめにかえて——コルベ神父の内的変化の徴候

川下勝は、コルベ神父の書簡を主要な資料として用いて著した伝記の中で、「日本に行くまでのコルベ神父は、カトリック以外のキリスト教や他宗教の人々に対して、かれらと議論し、理論的にカトリック教会の正統性を認めさせようとする努力をしている。日本での6年

間の滞在の後、神父は議論して、理論的に相手を納得させるよりも、対話という方法をとっている。日本滞在中、プロテスタントの牧師や仏教の僧侶などと親しく交わり、かれらの中に優れた宗教性を発見したのであろう。このような態度は、ナチスの収容所で一緒だったイスラム教徒との間でも見られる」とし<sup>5</sup>、そのイスラム教徒の証言を取り上げている<sup>6</sup>。

書簡や日記などのエゴ・ドキュメントと、活字メディアとでは性質が異なるのは言うまでもないが、川下の指摘するような変化が『無原罪の聖母の騎士』の記述の中で明確に確認できるかと言えば、そうではない。しかし、6年間の『無原罪の聖母の騎士』における記述を通じて、相手の言葉に耳を傾けながら、注意深くカトリックとの共通点・類似点を探す態度が生じている点は指摘できる。(単純に日本語の上達に依るところも大きいにせよ、)日本への到着間もない頃のコルベ神父であれば、精霊流しや祖先の霊魂について市井の人々が語った言葉や、河合公使が吐露した宗教観を丁寧に雑誌の紙面に転写することはしなかったのではないか。そういった姿勢が、最終的に日本人の改宗を促すためのプロセスに過ぎなかったとしても、コルベ神父の他者との対話の質が変化していることは指摘できる。

## 注

- 1 ポーランドのニェボカラヌフ修道院の院長に就任するため帰国したコルベ神父は、1939年、ドイツのポーランド侵攻に伴い、ナチスの思想・イデオロギーに反する活動を行う「思想犯」としての扱いを受けるようになる。開戦直後に逮捕され、3ヶ月間収容所に送られたが、釈放後も変わらぬ活動を続けたことから、1941年2月、アウシュヴィッツ強制収容所に送られた。7月、コルベ神父が収容されていた獄舎から脱走者が出たことから、無作為に選ばれた10人の囚人が見せしめのため、「餓死牢」に入れられ処刑されることとなったが、選ばれた1人の囚人が「妻子を残して行くのが無念だ」と涙を流すのを見て、コルベ神父は、身代わりとして自らが処刑されることを名乗り出た。この「身代わりの愛」と呼ばれる行いにより、戦後、コルベ神父はカトリック教会の崇敬の対象となり、1971年に福者に、1982年には聖人に列せられている。
- 2 ポーランドの著名人の墓地画像を収集したサイト“Moje Cmentarze”より転載。河合公使の墓石画像へのリンクは以下(廣田弘毅揮毫の墓碑銘の写真もあわせて掲載されている)。  
[<http://mojecmentarze.blogspot.com/2012/06/hiroyuki-kawai.html>]
- 3 E. パワシュ=ルトコフスカ & A.T. ロメル『日本・ポーランド関係史』彩流社、2009年、143頁。
- 4 前掲書、144頁。
- 5 川下勝『コルベ』清水書院、1993年、76～77頁
- 6 前掲書、136～137頁

※『無原罪の聖母の騎士』からの出典(発行年月)はすべて本文中に記載した。また、同誌からの引用については原文ママとしたが、縦書きの原文を横書きで表記する都合上、ごく一部(繰り返し記号など)変更を加えた箇所がある。

講演録

イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる  
—教育の現場を事例に—

ジュリア・イプグレイヴ Julia Ipgrave

(翻訳：間 永次郎)

はじめに

発表者は、英国における多民族・多宗教の問題について報告をするよう依頼を受けた。はたして、英国では、いかなる多民族・多宗教の問題があるのか。そして、その解決はいかにして可能であるのか。最初に、本題についての簡単なコメントから始めたい。

第一に、議論を特定の都市部に限定する場合、英国における多民族・多宗教の状況は、必ずしも問題視されている訳ではない。実に、2012年のロンドン五輪において、ロンドンの多文化主義と文化的多様性は、マルチカルチュラルイズム ダイヴァーシティ 自国の大きな強みであることが示された。市長は誇らしげに、「世界が集う都市 (the world in one city)」について語ったのであった。

そうした状況にもかかわらず、発表者が論じたい第二の点は、今日のイギリスにおける文化・民族・宗教の多様性は、明らかにいくつかの課題を抱えているということである。まさにこれらの課題の具体的内容は継続的に変化している。今日の公共的言説において、「多様な社会」が語られる時に抱かれるイメージは、20～30年前のものとは異なる。

第三に、発表者が強調したい点は、政策立案者と国家公務員がこれらの問題の解決を模索しているにもかかわらず、彼らがしばしば問題そのものを捉え損なっているということである。

本発表では、教育の事例を手がかりに、英国社会における文化的多様性に対する取り組みの変容について検討していく。教育は、公共圏と、多様な家族・コミュニティの日常生活といった英国社会を構成する二つの要素を結び合わせる働きを持つ。すなわち、[教育の場である] 学校は、家族やコミュニティからの要請に答えなければならない。学校はまた、将来に備えて若者を訓練するなかで、彼らに必要な態度と振る舞いを教える。さらに、学校は若者が送り出される社会そのものを定義する役割も持つ。実際のところ、多文化主義という英国独自の性格を決定付ける最も重要な2つの文書は、教育に関するものなのである。すなわち、1981年の『ランプトン報告 (Rampton Report)』と1985年の『スワン報告 (Swann Report)』である。

以下では、近代の英国における様々な文化的・民族的集団の状況について概観した後、次の3つの主題をそれぞれ取り扱っていきたい。これらは、英国の世論において影響力を持つ、文化的・民族的・宗教的少数派に関する3つの理解である。それらは以下の通りである。

- (i) 社会の犠牲者としての少数派 (Minority as a victim of society)
- (ii) 社会における行為者としての少数派 (Minority as an actor in society)
- (iii) 社会への脅威としての少数派 (Minority as a threat to society)

議論の前提として、英国における民族的・宗教的多様性は、地域によってかなりの相違があることを知る必要がある。確かに、英国全体を見渡した時、大多数が白人であり、多数派の宗教は未だキリスト教である。2011年の人口調査によれば、全体の白人人口は、80%前後であり、(全てが白人英国人という訳ではないが)キリスト教徒は60%前後である。だが、これら以外の集団もかなり存在している。例えば、人口の7%がアジア人であり、3%が黒人、4.5%がムスリムである。そして、英国には、民族的・宗教的多様性が顕著にうかがわれる地域がある。例えば、発表者が住んだことのある、次の3つの都市がそうである。まずロンドンにおいては、白人英国人はわずか45%しかおらず、12.4%がムスリム、5%がヒンドゥー教徒、1.8%がユダヤ教徒である。バーミンガムでは、53%が白人英国人、21.8%がムスリムである。レスターにおいては、ロンドン同様に、わずか45%が白人英国人であり、18.6%がムスリムであり、15.2%がヒンドゥー教徒である。さらなる文化的多様化は、ヨーロッパとその他の地域からやってくる移民によって継続的に促されている。例えば、2010年の英国居住者のうち、13%が国外で生まれている。しかしながら、そもそも英国の多文化主義的特徴をもたらした最初の人口変動は、大英帝国が崩壊した第二次世界大戦直後に、元植民地国から大量の移民労働者がイギリスに流入してきたことに端を発する。西インド諸島からの移民の流入は、1940年代後半から始まった。続いて、家族を連れた南アジア系の労働者がやってきた。そして、1970年代には西インド諸島出身のアフリカ系カリブ人やインド人が、1980年代にはパキスタン人、1990年代にはバングラディッシュ人のコミュニティが、それぞれ英国で誕生していった。このような経緯で、アフリカ系カリブ人の子供が、地元の学校に通うようになっていった。後にアジア人の子供も、地元の学校で見受けられるようになっていく。

#### (i) 犠牲者としての少数派

ここからは、上で挙げた3つの主題のうち、最初のものである、「犠牲者としての少数派」について論じたい。移民たちにとって、終戦後にイギリスへ移住することは容易ではなかった。それは単に、彼らの祖国の温暖な気候と輝く太陽の光が、イギリスのジメジメとした薄暗い空に取って代わられたからではなく、彼らの多くが移住先のコミュニティから冷たい待遇を受けたからであった。嘆かわしいことに、過去のイギリス社会において、こうした移民たちの到着は、否定的で人種差別的な扱いを持って迎えられた。アフリカ系カリブ人への移民は、宿泊先の主人からうとまれたり、アジア人コミュニティのメンバーは言葉による嫌がらせだけでなく、時に人種差別主義者から身体的虐待さえ受けたりした。人種差別主義者による嫌がらせは学校でも路上でも行われた。

これと並行して、特に黒人生徒の成績不振が問題となった。しばしば高い成績で学校生活を始めたにもかかわらず、彼らはすぐに成績を落とし、同級生よりも遥かに低い成績になってしまうのであった。1981年の『ランプトン報告 (Rampton Report)』は、この現象について調査し、これが人種差別と教育差別から引き起こされているという結論を出した。教師は人種差別の否定的ステレオタイプに影響され、黒人の生徒に対して低い期待しか持っていなかったのである。

『ランプトン報告』を引き継いだ、1985年の『スワン報告 (Swann Report ; Education for All という別名でも知られる)』は、人種差別に基づくいじめや、(時に無意識的な)ステレ



オタイプ化に言及しつつ、少数派の子供と家族が経験している嘆かわしい現実を明らかにした。そこでもうかがわれるのは、被害と差別を受ける [少数派] コミュニティの姿であった。そこで、『スワン報告』は、次のような問いに答えようとした。学校と教育制度は現状を改善するために何ができるのか？（少なくとも）4つの戦略が挙げられている。すなわち、(a) 文化的同化 (assimilation)、(b) 反人種主義教育 (anti-racism)、(c) 文化的適応化 (accommodation)、(d) 肯定的是正措置 (affirmation) である。これらの教育戦略は、社会全体に行き渡った少数派の問題に対する取り組みの一貫として位置付けられる。

(a) 文化的同化では、生徒の民族性と文化的背景は、差異の要因にはならないという、「人種的偏見を排した (colour-blind)」アプローチが用いられる。そこにおいて生徒は、他の可能な評価基準に優先して、先天的な能力が評価される。そして、それらの生徒は、ある段階において、既存の教育条件に順応していくことが求められるのである。すでに、『ランプトン報告』と『スワン報告』は、この戦略が、教師と生徒の両方にとって効果がないことを明らかにしている。なぜなら、教師たちは（無意識レベルの人種差別意識などの理由によって）、移民の子供の真の能力を適切に評価できずにおり、移民の子供もまた、しばしば同級生たちが直面することのない、異質で時に敵対的でもある環境に対処することを迫られるからである。何らかの [外部的な] 介入は必要不可欠である。

(b) 反人種主義教育は、政治的左派の教育者の戦略として特に人気がある。彼らは、権力問題に対し積極的な取り組みを行う。そして、反人種主義教育の授業を通して、生徒たちがこれらの問題について自覚的になり、問いを発することができるよう働きかける。それは良心化のプログラム (conscientization programme) とも言える。反人種主義教育は、既存の学校や教育制度で流通している人種主義的ステレオタイプや偏見を是正する手段として、ある程度、有用であった。だが、これらのアプローチはしばしば的外れで単純化されすぎてもいた。そこにおいて問題は、黒人対白人といった二項対立で捉えられており、問題の背景にある階級、ジェンダー、宗教の差異といった要因が見過ごされてしまっていた。反人種主義教育は、1986年にマンチェスターで起こった、人種差別を動機としたアジア人学生の殺害という悲劇的な事件の後、信用を失った。この事件を機に、反人種主義に対する学校側の強制的方針を強く批判する調査報告が出された。その中では、白人が人種差別主義者と見なされることによって、白人労働者階級の生徒や親が疎外されてしまっていると指摘されている。70年代と80年代における反人種主義教育や反人種主義的な政治運動は、少数派の要求を一括して「黒人」のカテゴリーのなかに入れてしまう傾向があった。アジア人コミュニティや、[支援活動に携わる] 活動家は、彼らの要求が十分に代表されていないと感じるようになり、徐々にこうした [反人種主義教育の] 方針から遠ざかっていった。そして、承認をめぐる運動において、人種的アイデンティティよりも宗教的アイデンティティが、より重要なものとして見なされるようになっていった。

(c) 文化的適応化は、異なる文化的集団における特定の要求が、学校の演習や政策に適応されるべきことを主張する。これによって、生徒やその家族は、学校や教育の現場から疎外されていると感じることがなくなる。『スワン報告』は、学校における文化的多様性に応え

るための戦略の一つとして文化的適応化を提唱した。特に、ムスリムの生徒が意識されていた。つまり、「学校からの要求が生徒の信仰上の要請と根本的に対立しないこと」を、学校が保証すべきことが述べられている。信仰に対する文化的適応化の事例には、学生食堂におけるハラール食の提供、水泳の授業において男女を分けること、女子学生のズボン着用の許可、サルワール・カミーズ〔南アジアの民族衣装〕やヒジャーブ〔ムスリム女性が頭に着用するベール〕を制服の一部と認めることなどが挙げられる。多くの学校では、少数派の生徒のために、こうした対応が実施されている。しかしながら、社会一般においてもそうであるが、学校において、どの生徒や親の要求を聞き入れるべきかを判断することは極めて困難であった。何が具体的に文化的適応化の対象とされるべきかは、中央政府や法によって決定される訳ではない。一般的に、特定のコミュニティを動揺させたり、子供の教育の機会を制限したりしない限りで、それぞれの学校が自由に取り決めている。ゆえに、学校と少数派コミュニティとの間の交渉は必要不可欠である。

(d) 肯定的是正措置とは、学校行事やカリキュラムにおいて、生徒の宗教や文化を、承認・尊重していく積極的な働きかけを意味する。この政策は、少数派の生徒、特に、アフリカ系カリブ人の生徒が、学校で疎外されている現実に対処するなかで発展した。彼らの親は、子供が学校に馴染めていない問題について学校側に相談を持ちかけた。そこにおいては、黒人アイデンティティの尊重や、それを促すための歴史を授業で教える必要が主張された。そして、学校がこのような対応を充分に行っていれば、生徒たちは自尊心を向上させ、学校のカリキュラムにより積極的に参加するようになるだろうという見通しが持たれた。こうしたことから次第に、イギリスの学校では、生徒たちの宗教フェスティバルが祝われることが一般的となっていく（例えば、〔ヒンドゥー教の祝祭である〕ナヴァラートリーやディーワリーでは、ヒンドゥー教徒の生徒やその家族のためのダンス、劇、作品作りなどの催し物が行われている）。また、授業において、生徒の宗教文化の諸要素が取り入れられた。例えば、算数の授業でイスラム式の幾何学模様や、音楽の授業でカリビア人歌曲が教えられたりした。一方で、これらの肯定的是正措置の取り組みは、知的発展よりも感情的要求に焦点を当てた「中身の無い (watered down)」カリキュラムを少数派の生徒に提供しているという批判や、特別な対処が必要な不利な立場にある集団とみなされることで少数派の生徒が教育の場で周辺化されているのではないかという疑問の声も上がった。カリキュラムが知的要求に応えていないのではないかという懸念は、授業の内容を改善していくことで乗り越えられるだろう。また、少数派の生徒たちが周辺化されてしまっているのではないかという懸念は、少数派文化の学びが単に少数派だけではなく、全ての生徒に資するものであると捉え直されていくことで解消されるだろう。

『スワン報告』は、少数派生徒たちの宗教的要請に対する文化的適応化や肯定的是正措置を推進していく上で極めて大きな影響力を持った。だが、このことは同時に、英国社会が再定義されていく中で、社会の多数派による少数派集団の承認ということ以上の意味を持つこととなった。

英国は、多人種的で多文化的な社会である。そして、全ての生徒はこのことの意味を充

分に理解できるようにならなければならない。

この報告書の主張は、少数派コミュニティが脅迫・差別を受けていることを認めるべきであるというものから、いかなる生徒も彼らの文化的アイデンティティによって疎外されてはならないということ、そして、文化的多様性こそが主流なのであるから、あらゆる人種の生徒の文化は主流社会の一部と見なされるべきである、という主張へと変化したことを示している。すなわち、今や文化的多様性こそが、社会全体を特徴付ける包括的な価値と見なされるようになったのである。

この文脈において教育は、以下のことを目指すべきとされる。

現代社会におけるあらゆる価値体系や生活スタイルの文化的多様性に対して、より深い理解と評価を示せるように、全ての生徒の視野を広げること。同時に、民族的に少数派のコミュニティが自分たちの文化的アイデンティティにおいて大切にしている要素を維持できるように手助けすること。

『スワン報告』は宗教について特別の配慮を示している。特にアジア人の宗教についてそうである。すなわち、宗教はコミュニティの結束力を維持する中心的要因であるから、彼らの宗教的信仰を尊重・承認すべきことが書かれている。「英国で表象される宗教の多様性」について生徒に教えることにより、宗教教育は多文化カリキュラムの一つの方向性を示したのであった。

## (ii) 行為者としての少数派

ここで本発表の議論は、第一の主題である「社会の犠牲者としての少数派」から、第二の主題である「社会の行為者としての少数派」に移る。すなわち、ここにおいて、脆弱で、虐げられ、他者の善意に依存的な存在としての少数派コミュニティという発想から、英国社会内部に、自分たちのコミュニティの利害に応じて、自らの空間を形成していく活動的な少数派という発想に移行する。社会における信仰共同体の行為主体性には、共同体主義的多文化主義のモデルを見出すことができる。すなわち、多文化主義的英国と言った時に含意されているコミュニティとは、必ずしもさまざまに独立したコミュニティのなかの一つに過ぎないというわけではないのである。

戦後に英国へやって来た移民は、しばしば祖国で同じ地域に住んでいた者たちと共に居住し始める。これによって、自国にいた頃の間人間関係やネットワークが移住先にもたらされる。その際、宗教はコミュニティ、特にアジア人移民のコミュニティの強度と結束を維持する鍵となった。宗教的礼拝やコミュニティの祝祭の場は、集団的な取り組みや管理、また指導の構造を必要とした。コミュニティや組織の活動を円滑にするためには、それらの成員が新たな生活と環境に実践的に適応していくことを支援する働きかけが必要不可欠である。教育とはそのための一つの方法である。

## ●自分たちの面倒は自分たちで見る

『スワン報告』によって、学校教育の主流で少数派生徒を承認すべきことが提言されるよ

うになる以前、移民コミュニティの間には長きに亘り、自分たちの子供の教育の面倒を、自分たちで見るという伝統があった。イギリスにおける英国国教会の教会付属学校は、長い間、国費によって賄われてきた。19世紀中葉には、ローマ・カトリック教徒やユダヤ教徒も自分たちの学校設立のために国家から助成金を受けるようになった。そこにおいては、多くの貧しいアイルランド人移民や中東欧地域からやって来たユダヤ人移民の子供たちが通うようになった。『スワン報告』は、異なる「信仰学校」\*の設立を勧告していた訳ではなく、むしろいかなる宗教的・民族的背景や移民の歴史を持つ子供に対しても平等に施される教育制度のあり方を提案していたのであった。それにもかかわらず、少数派コミュニティに自分たちの文化の本質的要素を維持することを奨励したことで、民族的・宗教的分離主義の意識が醸成された。そして、(意図的ではないにしろ) 宗教的アイデンティティに基づく学校教育の制度が助長されることになった。独立の信仰学校の数は、過去数十年の間に急増した。そして、1997年以降、ムスリム・コミュニティや他の信仰共同体によって設立された学校に対しても、キリスト教やユダヤ教と同様に、国家の助成金が提供されるようになった。今日、イギリスにおいて、助成金を受けている学校のおよそ三分の一が教会付属学校か信仰学校である。

過去30年の間に、(助成金を得た独立の) 信仰学校の性格は変化した。そこにおいては、生徒の宗教アイデンティティや宗教的価値観の保護に、より大きな力点が置かれるようになった。例えば、1990年代に、国家助成によってムスリム学校の設立を求める運動が起こった。そこにおいて配布されていたチラシには、学校設立がムスリムの若者の宗教アイデンティティを喪失させないために必要不可欠であることが説かれていた。また、ユダヤ人学校も、もともとは子供たちが英国社会に早く馴染めるようになるための準備を提供する場とされていたが、ここ数年の間にユダヤ人アイデンティティの表出と保持という目的に主軸が移行した。学齢期のユダヤ人の60%を教育している今日のユダヤ人学校であるが、そこにおいては、ユダヤ教の実践・倫理・歴史・伝統・文化の独自性が教えられるようになった。さまざまな倫理や宗教の差異への対応を教える英国国教会の教会付属学校でさえ、よりキリスト教的特色の強い演習と学びが行われるようになってきた。信仰学校設立を支援する政府教育顧問のデイヴィッド・ハルグリーグスの次の言葉には、共同体主義的な原理が表明されている。

---

\* [訳者注] イギリス教育省のホームページでは、「信仰学校 (faith schools) とは、国費で賄われている学校、フリー・スクール、専門学校などのような様々な学校の中でも特定の宗教と関連を持っているものを言う」と説明されている。(〈<https://www.gov.uk/types-of-school/faith-schools>〉2014/10/13アクセス)。この用語は日本ではあまり知られていないが、しばしば宗教学の分野で faith community が「信仰共同体」と訳されることや、教育学の分野で「信仰学校」という訳語が比較的定着していることに従い、本稿では faith school を「信仰学校」と訳した。

[編集注] 英国の faith school について著者は以下のように補足している：「faith school (以下信仰学校) とは公立／私立を問わず「宗教的な性格を持つ学校」であり、ある信仰共同体 (ユダヤ教、イスラーム、英国国教会、ローマ・カトリック等々) と結びついている。その信仰共同体は何か信仰学校の運営に関わり、また信仰学校はその信仰共同体の持つ価値観に基づいた校風 ethos を持つ。一部の信仰学校はその信仰共同体内において子供の信仰を育みながら教育を与えることを重視しているが、他の信仰共同体の子弟や、あるいはいずれの信仰共同体にも属さない子弟をも受け入れている信仰学校もある。」



特別支援学校 (Specialized schools) は、サブ・コミュニティ (例えば、共有された宗教あるいは文化など) と共に、コミュニティの結束を強める。そして、多元主義的な社会において、国家的結束は、特定の<sup>ナショナル</sup>地域的<sup>ローカル</sup>結束の涵養なしには存立し得ないのである。

### ●社会空間をめぐる交渉

しばしば信仰共同体は、自分たちのコミュニティを配慮していく上で、より広い社会との交流・交渉を必要とした。この種の集団の必要を訴えた最初の公共的活動は、シーク教徒によって始まった。1970年代に、彼らは、オートバイ運転者のヘルメット着用を義務付ける新法から、ターバンを着用するシーク教徒を免除するよう交渉した。さらに、1980年代に論争を起こした、サルマーン・ラシュディの『悪魔の詩 (The Satanic Verses)』は、英国においてムスリム・コミュニティによる政治的参入の新たな形態を作り出した。この事件を機に、彼らは自分の子供たちの宗教的要請に学校側が対応することを訴える組織化された活動や、公的資金によって経営されるムスリム学校の設立を求める運動を起こした。これらの両方の運動において、コミュニティは顕著な発展を遂げた。シーク教徒と同様に、ムスリムもまた中間集団によって政府と交渉したのであった。1997年に結成された英国ムスリム議会 (the Muslim Council of Britain) は、何年にもわたり、このような交渉における最も大きな勢力である。

国家的レベルと地域的レベルの両方において、政府は、さまざまな信仰学校と、信仰共同体によって設立された中間組織と共同作業することが有意義であると考えている。それらの中間組織には、英国ムスリム議会や1990年に設立された都市部宗教会議 (Inner City Religious Council) などがある。地域のさまざまな信仰を持つ人々が集うフォーラムが設立されることで、異なる信仰集団の代表者が定期的に面会し、地方自治体と交流する。そして、[公共団体に、]自分たちのコミュニティにおける特定の必要や関心を伝えたり、反対に、これらの公共団体から得た情報を自分たちのコミュニティに持ち帰ったりする。このようにして、政策決定における信仰共同体の参加の一形式が作られたのであった。すなわち、少数派コミュニティの代表者が公共圏に働きかける行為者としての役割を果たし、政府から手の届きにくい社会集団との共同作業が促進された。共同作業の関係が構築されたことで、少数派コミュニティには自信がもたらされた。そして、彼らは他の社会集団の活動にも積極的に参加し、共に公益を探求するようになっていった。例えば、さまざまな異なる少数派の信仰共同体は、コミュニティ・地方自治省 (Department for Communities and Local Government) の公費によってまかなわれる近隣地域プログラム (Near Neighbours Programme) が助成する地域住民再生プロジェクト (Local Neighbourhood Regeneration Project) に参加した。またいくつかの異なる地域に住む英国インド人が集まって結成された、レスターシャー・アジア人ビジネス協会 (Leicestershire Asian Business Association) は、イギリス政府がインドとより強い貿易関係を結んでいくよう働きかけている。この種の共同作業の形式は、教育の場においても、ある程度、再現されていった。

『スワン報告』における文化的適応化と肯定的是正措置の戦略は、信仰セクターの外にある主流の学校現場において、少数派コミュニティが、より積極的に働きかけていくことを可能とした。生徒の宗教的要請に応えるにあたって、信仰共同体のメンバーとの協議は必要不

可欠であった。英国ムスリム会議は、学校教育を支援するために、『他者理解の深化に向けて：公立学校におけるムスリム生徒の必要に応えるために (*Towards Greater Understanding: Meeting the Needs of Muslim Children in State Schools*)』という指針書を出した。ここでもまた、学校と少数派集団との仲介の取り組みは、[信仰] コミュニティだけでなく、公共団体によっても行われた。大都市ブラッドフォードの地方自治体は、宗教間交流教育研究所 (Interfaith Education Centre) に、もう一つの仲介組織を設立した。そこにおいては、宗教教育の専門家によって、教師と校長のために、いかに自分たちの生徒の宗教と向き合い、彼らの<sup>インテグリティ</sup>人格統合を尊重し、彼らに向けられた侮辱を回避するのか、についての指導が行われた。カリキュラムのなかに、少数派の宗教文化を反映すべきという提言を取り入れるためのいくつかの計画があった。例えば、全国にさまざまな地方自治体があるが、これらの異なる地域教会や信仰共同体から派遣された代表者を結集し、宗教教育に関する提言を取りまとめる議会組織を作ったことなどが挙げられる。しかしながら、1990年代に実施された宗教教育カリキュラム作成をめぐる少数派の権限向上の取り組みは、教育専門家が管理すべき領域への過度な介入であるとして反発を被った。

### (iii) 脅威としての少数派

これまで、文化的に多様な英国社会における、少数派コミュニティの立場をめぐる二つの理解の仕方について見てきた。第一に、彼らは主流社会から、文化的適応化と肯定的是正措置を必要とする受動的犠牲者として見なされていた。そして、このような彼らの存在と要請に応じていく中で、多文化社会の再定義がもたらされた。第二に、彼らは自分たちの集団を強化することにおいて活動的であり、また他のコミュニティに対する協力者と見なされていた。しかしながら近年、英国において、宗教的少数派に対する態度の決定的変化が見られるようになった。特に、最大の少数派であるムスリムに対する態度の変化である。1980年代に、『スワン報告』は、少数派を社会から守られるべき犠牲者として描いていた。それに対し近年、社会の側がその少数派から擁護されるべきであるという意識が高まっている。多くの公共的メディアの言説において、少数派は一つの脅威と見なされている。英国社会を特徴付ける原理としての多文化主義という理解は、政治的右派だけでなく、リベラル左派によっても疑問に付されている。過去十年ほどの間に、社会批評家たちによって、「多文化主義は死んだのか? (*Is Multiculturalism Dead?*)」、「多文化主義を超えて (*Beyond Multiculturalism*)」、「多文化主義は過ぎ去ったのか? (*Is Multiculturalism over?*)」などのタイトルの記事が書かれ、また、これらのタイトルを掲げたセミナーが開催されている。なぜこのようなことが起こっているのか?

#### ●脅威：分離主義

新世紀の始まりに起こったいくつかの事件は、すでに一部の場所で表明されていた懸念を確実なものにしたように思われる。すなわち、多文化主義は分離主義を後押しするものであり、英国社会の結束を脅かすものではないか、という懸念である。2001年に、ウーズリー卿は、パキスタン人のムスリム・コミュニティが多く住むブラッドフォード北部の街における人種問題に関する報告書を作成した。そこにおいては、かつての『スワン報告書』において提案されていた多文化主義に対する重大な問いが発せられた。ウーズリーは、街に住むム

スリム・コミュニティについて次のように述べている。「[コミュニティの中で] 共に暮らすことで、[コミュニティのメンバーは] 快適で安全な生活を送り、強い文化的・宗教的帰属意識やアイデンティティを保持する傾向がある。それは自己完結的なコミュニティであり、パキスタンとの強い繋がりを持つ」。彼が考えるところによれば、これは、「自己分離化 (self-segregation) に対する極めて憂慮すべき動向」とされる。同じ年に、この街と他のブラッドフォード北部の街で、若者の手による何件かの暴動が起こった。これらの暴動の原因は複雑であるにしても、ウーズリーが恐れていた事態を确实なものにしたと、世間一般では考えられた。後に政府によって委託された二つの報告書では、異なるコミュニティにおける「相容れない生活 (parallel lives)」が指摘された。そして、「コミュニティの結束を推進するための緊急の要請」に、単に他文化に関するより多くの知識を得ることを通してではなく（これは重要な課題であり続けるにしても）、個々人との間の直接的な接触と、異なる文化間の友好関係を構築することによって応えていくべきことが論じられた。2001年のアメリカ合衆国におけるテロリスト攻撃と、2005年の英国人ムスリムによるロンドンでの爆破事件は、少数派の脅威が、単に市民的秩序の乱れを意味するだけでなく、共謀された過激派の暴力へと繋がっていくものであることが示された。このような事件は、国家的統一よりも、異なるコミュニティにより構成される英国社会を特徴付ける多文化的政策によって引き起こされたと論じられた。それだけでなく、事件によって、信仰学校は、社会を分断し、世俗的西洋社会に対する否定的見解を植え付ける場であるという批判を受けるようになった。

#### ●脅威：リベラルな合意を脅かすもの

それ故、21世紀初頭に起こったこれらの事件は、単に無秩序と破壊の兆しであっただけでなく、多文化主義の理想そのものにとって有害なものとなった。すなわち、次第に声高になってきた一部の世論形成者たちの間に、より輪郭の曖昧なある脅威についての認識が高まっていったのであった。その脅威とは、公共圏においてさまざまな価値体系を受容することで、いわゆる英国の価値とされてきたものが危険に晒されているのではないかというものである。

『スワン報告書』が唱える多文化主義においては、文化的多様性や、差異に対する寛容が一貫して尊重されているが、このより広い枠組みのなかには、相互の対立を引き起こすような、さまざまな価値体系も含有されていた。特に、ジェンダーの役割やセクシュアリティ、また世俗の実証的な議論を超えた宗教的教義の重視などがそうである。メディアと政界で活動するリベラルな評論家は、少数派の実践の無差別的な文化的適応化について批判的である。例えば、ユダヤ教やイスラム教の法に従った動物殺戮の儀礼、公共の場におけるニカーブの着用、あるいは、公務員（教員を含む）が宗教的なシンボルを身に付けることなどは、西洋社会を基礎付ける世俗的でリベラルな合意を危険に晒す恐れがあると論じる。彼らはまた、これらのリベラルな価値を共有しない少数派組織と公共的協力関係を結ぶことへの正当性に疑問を投げかける。例えば、世界は神によって創造されたと教えたり、性教育において同性愛関係を疎んじたり、信仰の違いによる雇用差別に好意的であるような信仰学校に対する国家助成などがそうである。

### ●教育現場からの応答：コミュニティの結束

これらの「脅威」とされる問題に対応して、英国の教育現場においては、文化的に多様な人々を一つのコミュニティへと結束させる必要性が、ますます強調されるようになった。「多文化主義」は、文化的に多様な社会にとっての弊害と見なされ、「コミュニティ同士の結束 (community cohesion)」が代わって唱えられるようになった。そして、「[生徒の] 経験を、多文化との接触によって、より豊かなものとする」ために、全ての学校に国家的義務が強いられた。そこにおける主要な目的は、英国社会におけるコミュニティ間の分断を越えた相互理解を促進することである。もし、多様な民族性、社会的・経済的集団、あるいは、宗教を持たない学校があるならば、これらの生徒が他文化の人々と出会う際には、特別な措置が施される必要がある。この活動を支持するために、すなわち、ある学校と対照的な生徒を持つ学校（多くの場合、白人学校と民族的に多様な学校；教会付属学校とムスリム学校）との間に友好関係を構築するために、2007年に、教育省は、「学校連携プログラム (School Linking Programme)」を開始した。いくつかの宗教間の交流を促進しようとする組織 (interfaith organizations) は、同様の取り組みを行っている。また、異なる文化と宗教の若者が集うことが難しいような場所においては、電子通信システムが使用されている。

### ●教育現場からの応答：批判的視座

もう一つの応答は、多文化学習の内容に対する態度の変化である。教育の目的として、生徒たちに社会における多様な宗教や文化を尊重・歓迎する意識を涵養することが奨励される一方で、生徒たちにはますますこれらの文化を適切に評価し、批判する能力を培うことが期待されている。特に、生徒は最近、現代社会における宗教問題について批判的に応答できる技術を修得することが求められている。2007年に発表された公立学校における宗教教育の条件に関する政府の調査報告は、「9.11以後の社会における宗教状況の変化に効果的に対応する」宗教教育の重要性を強調した。報告書は、「我々は、生徒に宗教をただ無批判に『良いもの』と受け入れさせるべき、といった発想を放棄しなければならない」と宣言した。現在、学校の生徒たちが宗教教育の授業のなかで問われるトピックには、次のようなものが含まれる。

- ・「宗教のアイデンティティは、信者にとって、国家のアイデンティティよりも重要であるべきだ。」これについて、あなたは思うか？
- ・21世紀において、信仰学校は不適切である。これについて議論せよ。
- ・多文化主義に対する信仰者たちの態度について説明せよ。

宗教的題材に対する批判的取り組みは、子供たちを宗教的過激主義から擁護する一つの方法として提案されたものであった。同時に、こうした取り組みは、子供たちにリベラル民主主義の価値を注入する一つの方法であるとも見なされた。2009年に、国家宗教教育会議 (National Religious Education council) によって作成された報告書では次のように述べられている。

リベラル民主主義の最大の特徴は、子供を含む全ての個人が、自分自身、また、他人の



信仰や価値について、批判的見解を抱く権利が与えられていることである。

こうした発想においては、リベラル民主主義の価値体系の下に全ての子供が統合されるべきことが目指されている。しかしながら、同じ文書のなかに、こうした統合が、一定の他者の存在を排除することによってのみ可能であることが述べられているのである。

信仰への批判的関与は、西洋的・世俗的世界観によく適合するが、他 [の文化・宗教] には期待できそうにない。

どうやら我々は、多文化主義教育が開始された出発点に戻ってきたようである。すなわち、少数派の生徒の経験と英国の学校で提供される教育対策との間の不釣り合いという問題である。

### おわりに：将来への展望

本稿において発表者は、英国社会における民族的・宗教的多元性の問題について、教育現場で見られる様々な事例を検討する中で考察してきた。それは近代の英国社会を特徴付ける文化的多様性への尊重という問題から始まり、最終的にはこの [尊重されるべきはずの] 文化的多様性によって、人々の間に疑いと恐れが生じている現状を指摘した。結論はやや気が滅入るものだろう。それにもかかわらず、近年の多文化主義に対する確信の喪失は、長年かけて発展した英国社会における独自の態度・関係・構造の全てを放棄するものとはならないであろう。長い期間に亘り、多文化主義は英国社会を基礎付ける特徴と見なされてきたのであり、この特徴はすでに国民の意識にあまりに深く根付いている。地方政府と中央政府は、少数派コミュニティと交渉し続けるだろう。何故なら、彼らはそのような交渉によってもたらされる理解や合意なしに自治体や国を運営することはできないからである。信仰学校の廃止を求める騒々しいロビー活動があるにもかかわらず、そのような要求は現実のものとはならないであろう。何故なら信仰学校は、英国の教育制度にあまりに深く埋め込まれているからである。信仰学校は、生徒の親の間で人気があり、高い学業成績の生徒を輩出している。発表者が研究調査のため英国のさまざまな学校を訪れた時、「私たちの国は多文化主義を掲げる。私たちは互いのことをよりよく知っていくべきであり、それによって、共に歩んでいけるようになる」という堅固な確信が若者たちのうちにあることを知った。発表者が本稿の冒頭で述べた、2012年のロンドン五輪において醸成された「心地良くさせる要素 (feelgood factor)」は、<sup>ネーション</sup>国家の文化的多様性に対する人々の自尊心の上に築かれたものに他ならない。

## スタッフ紹介

\* 氏名、現職、専門分野、担当研究事業、および2013年度の研究業績について紹介します（一部、過去に掲載していなかった過年度の業績も紹介します）。今年度新任のスタッフには、研究紹介および2012年度以前の研究業績についても掲載します。

---

### 井上順孝 所長・教授 宗教学、宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

#### 【単行本】

- ・『要点解説 90分でわかる！ ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』（編著）東洋経済新報社、2013年10月。

#### 【論文】

- ・「宗教の境界線—学生に対する意識調査から」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第6号、2013年9月。
- ・「映画・ビデオ／DVD」渡辺直樹編集責任『宗教と現代がわかる本2013』平凡社、2014年3月。
- ・「“新宗教”研究の射程—新興宗教から近代新宗教へ」市川裕編『世界の宗教といかに向き合うか 月本昭男先生退職記念献呈論文集第1巻』聖公会出版、2014年3月。

#### 【口頭発表】

- ・（講演）アメリカ・ハーバード大学日本文化研究所40周年記念会議における講演“Japanese new and traditional religions in the information and globalization age: A consideration of various changes experienced since the mid-1970s”、2013年9月。
- ・（発題）日仏会館、フランス事務所主催の会議“Religion, laïcité, morale. Culture religieuse, morale laïque et nouvelles politiques en France et au Japon.”（「宗教・ライシテ・道徳—日仏の道徳・宗教教育と新たな政策」）における発題、日仏会館、2014年3月。
- ・（講演）「宗教の歴史地図—宗教文化の相互理解のために」日本通運社内研修、2013年8月。
- ・（講演）「企業のリーダーに必要な世界観—宗教は人々の生活や考え方にどんな影響を与えているのか」サッポログループ講演、2013年9月。
- ・（基調講演）「現代日本の宗教状況と宗教文化教育」ベトナム政治学院交流会・基調講演、於國學院大學、2013年11月。
- ・（講演）「宗教観—日本人にとっての宗教、現代における宗教」日本能率協会、2013年11月。

### 齊藤こずゑ 教授 教育心理学、発達心理学、映像メディアによる発達表象と時代効果、公放送映像メディアの分析

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

#### 【論文】

- ・「子どもの発達と記述メディア」『國學院雑誌』115巻1号、2014年1月、pp.1-17。
- ・「子どものフィールド参与観察における倫理」『質的心理学フォーラム』第6号、特集「対話と葛藤としての研究倫理」2014年10月、pp.26-33。

#### 【口頭発表】

- ・「映像メディアにおける発達表象の構成」日本発達心理学会第25回大会、於京都大学、予稿集289／全pp.753、ポスター発表、2014年3月21日。
- ・「子どものフィールド参与観察における倫理を執筆して」話題提供2、質的心理学フォーラム編集委員

会企画シンポジウム「質的研究と倫理：対話と葛藤としての研究倫理」日本質的心理学会大11回大会、シンポジウム、於松山大学、2014年10月18日。

[その他]

- ・(シンポジウム講演録)「倫理意識向上に関する一具体策～倫理規程作成～」倫理委員会企画講習会(シンポジウム)「音楽療法における「倫理意識とリスクマネジメント力」の向上を目指して」『近畿音楽療法学会誌』Vol.12(2013年版、2014年3月30日、pp.23-40。

**遠藤潤** 准教授 宗教学、日本宗教史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

[口頭発表]

- ・“Language, Spirits and Cosmology in Study of Kodo 古道の学びにおける言語、靈魂、コスモロジー——富士谷御杖の言霊説と神道説” Symposium on Early Modern Japanese Values and Individuality, Asian Centre, University of British Columbia, 2013年8月。

**黒崎浩行** 准教授 情報化と宗教、現代社会と神社神道

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[単行本]

- ・『震災復興と宗教』(稲場圭信と共編)叢書宗教とソーシャル・キャピタル第4巻、明石書店、2013年4月。

[論文]

- ・「宗教を越えた災害支援のネットワーク」國學院大學研究開発推進センター編、古沢広祐責任編集『共存学2 災害後の人と文化 ゆらぐ世界』弘文堂、2014年2月、pp.69-84。
- ・「復興の困難さと神社神道」国際宗教研究所編『現代宗教2014』国際宗教研究所、2014年3月、pp.227-248。

[口頭発表]

- ・「福島県南相馬市の神社における災害の記憶継承と地域再生の祈り」神道宗教学会第67回学術大会パネル発表「神道と自然災害—神社に遺された自然災害伝承からみる—」(代表者 藤本頼生)、2013年12月。

[その他]

- ・(研究ノート)「宗教者災害救援マップの構築過程と今後の課題」(稲場圭信と共著)『宗教と社会貢献』3巻1号、2013年4月、pp.65-74。
- ・(研究ノート)「災害と神社関係絵葉書：仙台平野から相馬地方まで」國學院大學研究開発推進機構学術資料センター編『学術資料センター絵葉書資料目録〈青森・岩手・宮城・福島〉：宮地直一旧蔵資料・神道資料館所蔵資料』國學院大學研究開発推進機構学術資料センター、2014年2月、pp.167-169。
- ・(報告書項目)「宗教界の動き：総論」『311復興支援 無形文化遺産情報ネットワーク報告書2013:東日本大震災被災地域における無形文化遺産とその復興』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部、2014年3月、pp.108-109。

**平藤喜久子** 准教授 神話学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[単行本]

- ・『開運！神社さんぽ2』(監修)上大岡トメ(著)、泰文堂、2013年8月。

[口頭発表等]

- ・“Deities in Japanese popular culture”, at Seventh Annual International Conference on Comparative

Mythology, International Association for Comparative Mythology & Eberhard Karls University, Tübingen, 2013年5月。

- ・「ファシズム期と日本神話」(パネル「ファシズム期における古代理解」)、日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月。
- ・(講演)「世界の神話と日向神話」神話のふるさと県民大学(宮崎県主催)、於宮崎県立美術館、2013年10月。
- ・(講演)「神話学から見た遷宮」第72回 学習院大学史料館講座、於学習院大学、2013年11月。

**ノルマン・ヘイヴンズ (HAVENS, Norman)** 准教授 日本宗教史、日本の民間信仰  
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・「文化多様性と共存の行方—欧米の動向をふまえて—」國學院大學研究開発推進センター編、古沢広祐責任編集『共存学：文化・社会の多様性』弘文堂、2012年3月 [※掲載漏れの過年度業績]。
- ・「神道から見た沖ノ島」世界遺産推進会議編、『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告Ⅱ—2』2012年 [※掲載漏れの過年度業績]。

[口頭発表]

- ・「多様性の価値をグローバルで考える」共存学フォーラム2011「生命(いのち)と文化の多様性——森・里・海の絆を結ぶ」、於國學院大學、2011年1月 [※掲載漏れの過年度業績]。

**松本久史** 准教授 近世・近代の国学、神道史

担当研究事業「[國學院大學 国学研究プラットフォーム]を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

[論文]

- ・「篠崎東海と荷田春満：和学をめぐる一考察」『國學院雑誌』114巻4号、2013年4月、pp.1-13。

**星野靖二** 准教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・「北米の日本宗教研究について(特集 日本文化研究再考)」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第6号、2014年3月、pp.1-29。

[口頭発表]

- ・「キリスト教メディアの近代」(パネル「雑誌メディアからみた近代宗教史」)日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月。
- ・“(In)Expedient Others: Visions of Asia in Modern Buddhism in Japan” at the Duke / Korea University conference, “Bordering the Borderless: Faces of Modern Buddhism in East Asia,” held at Duke University, 2013年10月。

[その他]

- ・(報告)「ハーバード大学への派遣について」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第6号、2013年9月、pp.23-26。

**塚田穂高** 助教 宗教社会学、近現代日本の宗教運動

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・「戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究—新宗教運動のナショナリズムを中心に—」東京大学大学院人文社会系研究科提出博士論文、2013年4月。



- ・「宗教文化教育の到達目標に関する一考察—第1～4回宗教文化士試験問題の分析から—」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第6号、2013年9月、pp.67-83。
- ・「偽装・虚勢・無反省—「新新宗教」に蔓延する諸問題—」『中央公論』2014年1月(1562)号、2013年12月、pp.40-47。
- ・「戦後保守合同運動の展開—日本会議の事例を中心に—」小島伸之編『平成23年度～平成25年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 近現代日本の宗教とナショナリズム—国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み—』、2014年3月、pp.62-76。
- ・「公有地上宗教施設の全国調査を実施して—砂川市有地上神社問題との関連から—」『政教関係を正す会会報』43、2014年3月、pp.15-24。

#### [口頭発表]

- ・(講演)「カルト問題を大学で教える—オウム真理教はなぜ蔓延するか—」烏山地域オウム真理教対策住民協議会第26回学習会、於東京都世田谷区烏山区民センターホール、2013年5月。
- ・「グローバル化の中の在るべき日本/宗教—幸福の科学の政治進出—」(テーマ・セッション「グローバル化とアイデンティティ 第2回」)「宗教と社会」学会第21回学術大会、於皇學館大学、2013年6月。
- ・(講演)「公有地上宗教施設の全国調査を実施して—砂川市有地上神社問題との関連から—」政教関係を正す会研究会、於神社本庁、2013年8月。
- ・「新宗教の発生・展開過程における「精神療法」の位置」(パネル「近現代日本の民間精神療法の展開」)日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月。
- ・「公有地上における宗教・民間信仰関連施設の分布に関する全国調査—行政の現場における「宗教」概念と政教問題認識—」第86回日本社会学会大会、於慶應義塾大学、2013年10月。
- ・(講演)「大学におけるカルト問題教育の実践と学生の反応」全国靈感商法対策弁護士連絡会全国集会、於プラザエフ、2013年10月。
- ・「戦後保守合同運動の展開—日本会議の事例を中心に—」科研費研究「近現代日本の宗教とナショナリズム」公開研究会—「国家神道」の担い手—をめぐる多角的検討—、於東洋大学、2013年12月。
- ・『宗教と社会のフロンティア』のねらいについての回顧・比較・展望」宗教社会学の会研究会『宗教と社会のフロンティア』合評会、於西成プラザ、2014年1月。
- ・「日本の近代化と新宗教運動」(分組「現代日本における宗教と社会の最前線—東アジアとの対話を通じて①—」)香港亞洲研究學會第九屆研討會、於香港大学、2014年3月。

## 鈴木聡子 助教(特任) 神道史学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

#### [論文]

- ・「神社年中行事の成立過程について—二十二社・一宮の農耕行事に焦点をあてて—」國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第6号、2013年9月、pp.84-96、2013年9月。
- ・「第三章 御厨神明と在地信仰「1 神宮の御厨・御園の全国的展開」および「6 下総国の御厨」,「房総の伊勢信仰」企画委員会編『房総の伊勢信仰』雄山閣、2013年9月、pp.66-72、pp.97-106。

#### [口頭発表]

- ・「神社年中行事の成立過程について—農耕行事を事例にあげて—」日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月8日。
- ・(講演)「神社の年中行事」学びへの誘い、國學院大學・松本市・松本市教育委員会、於松本市時計博物館、2013年9月22日。

#### [その他]

- ・(項目執筆)「総論 祭りと年中行事—神社の年中行事」,「賀茂御祖神社、賀茂別雷神社」,「春日大社」,

「付録 年中行事と祭り一覧表」、岡田莊司・笹生衛編、『事典 神社の歴史と祭り』吉川弘文館、2013年4月、pp.30-31、pp.119-126、pp.139-146、pp.367-393。

- ・「神話にまつわる一年の神事」『歴史読本』2月号（第59巻第2号）KADOKAWA、2013年12月、pp.135-147。

### 市川 収 客員研究員 惑星物質科学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

### カール・フレイレ (FREIRE, Carl) 客員研究員 近代の日本史（特に社会史・思想史）

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

### 李和珍 PD 研究員 宗教社会学、日韓の新宗教教団の比較研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[その他]

- ・「対馬の仏像盗難のゆくえ」『ラク便り』第58号、2013年5月、pp.49-52。

### 加藤 久子 PD 研究員 政治と宗教

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[口頭発表]

- ・「<アウシュヴィッツ>とともに暮らすということ—負の文化遺産と地元住民」慶應義塾大学人類学研究会・三田哲学会、於慶應義塾大学、2013年7月9日。

[その他]

- ・「教皇ベネディクト 16 世の退位と新教皇フランシスコの即位—日本のメディアはどのように報じたか」『ラク便り』第58号、2013年5月、pp.56-59。
- ・「教皇フランシスコは改革者か」『宗教と現代がわかる本 2014』平凡社、2014年3月、pp.112-115。
- ・「気になる人物の発言集・2013年の物故者」『宗教と現代がわかる本 2014』平凡社、2014年3月、pp.222-237。

### 天田 顕徳 研究補助員 宗教社会学、民族宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[口頭発表]

- ・“Today’s situation of Japanese sacred place: in case of *shugendo*” 宗教とツーリズム研究会、於筑波大学、2013年6月24日。
- ・(コメンテーター)「都市空間と宗教コミュニティ」東アジア人類学研究会第43回研究会・中国ムスリム研究会第25回定例会(共催)、於東京大学、2013年6月29日。
- ・「信仰・文化・ノスタルジー—筑波山の窟を巡る人々—」(パネル:「宗教研究における講究の意義と可能性」)日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月8日。
- ・「講」の語られ方—計量テキスト分析によるアプローチ・新聞を事例に— 講研究会第35回例会、於駒澤大学、2013年10月19日。
- ・「修験道の現代—大峯奥駈修行を事例として—」慶應義塾大学人類学研究会・三田哲学会(共催)於慶應義塾大学、2013年11月12日。
- ・「信仰・文化・ノスタルジー—筑波山の窟を巡る人々—」(パネル:「宗教研究における講究の意義と可能性」)日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月8日。

[その他]

- ・「『富士山信仰』関連報道の推移に関する覚え書き—世界遺産登録運動に着目して—」『ラク便り』第60号、2013年11月、pp.56-63。

## 齋藤公太 研究補助員 宗教学、日本思想史

担当研究事業：「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

### 【研究紹介】

思想史の手法により神道思想を研究している。具体的には北畠親房の『神皇正統記』とその政治的な神道思想が、近世から近代にかけてどのように解釈されていったのかという問題に取り組んできた。明治以降の大々的な顕彰に至る過程とその社会的背景を解明することが課題である。別の面からいえば垂加神道や水戸学といった儒家神道の系譜に関する研究であり、若林強斎などの人物を取り上げてきた。

儒家神道に限らず、近世における神典解釈や歴史叙述の歴史、後期水戸学と国学の交渉といった問題にも関心がある。また村岡典嗣のような近代知識人の神道論についても研究を行っている。今後は翻訳活動や海外の研究者との交流も積極的に行っていきたい。

### 【論文】

- ・「不可視の「神皇」——若林強斎の祭政一致論」『宗教研究』378、2013年12月、pp.27-50。

### 【口頭発表】

- ・「近世における神皇正統記の受容史」日韓次世代学術フォーラム10周年記念国際学術大会、於東西大学校セントラムキャンパス、2013年6月29日。
- ・「後期水戸学の祭政一致論」日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月8日。

### 【2012年度までの主な研究業績】

- ・「神代の余風——北畠親房の祭政一致論をめぐって」『東京大学宗教学年報』29、2011年、pp.49-67
- ・「若林強斎の祭政一致論」日本宗教学会第71回学術大会、於皇學館大学、2012年9月9日。
- ・「書評 William E. Connolly, *Capitalism and Christianity, American style*」『東京大学宗教学年報』27、2009年、pp.187-193。

## 早乙女牧人 PD 研究員 日本中世文学

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

### 【研究紹介】

日本中世和歌文学を専攻し、京極派和歌および京極派歌人の動向を中心に研究している。和歌史上における京極派の位置づけを再検討するとともに、同時代の二条派、冷泉派といった歌壇・歌人・詠作との比較も試みる。また、中心人物として京極為兼の動向を考察する。勅撰集編纂という一大事業への関心はもちろん、佐渡で詠んだとされる「為兼卿三十三首」の諸本検討や『徒然草』註釈書との関連性、あるいは各地に散逸する伝承歌の考察など、細かな作品群にも着目する。さらに、「為兼卿集（補遺）」といった近世期の史料などを通して、為兼および京極派が中世以降、いわゆる和学者らにどのように受容されたのかといった通史的な面からも考証する。

### 【論文】

- ・「荷田春満和歌関係資料集 付『伊勢物語童子問草稿』補遺」（一戸渉・中村正明との共著、國學院大学文学部）平成22年度～平成25年度 科学研究費補助金 基盤研究（B）（一般）研究成果報告書『近世における前期国学の総合的研究』、2014年3月、pp.77-135。

### 【その他】

- ・（索引）「書名索引」「人名索引」「和歌・発句索引」東海大学付属図書館編、『桃園文庫目録』下巻、東海大学付属図書館、2013年5月23日、pp.5-90。

### 【2012年度までの主な研究業績】

- ・「『為兼卿三十三首』諸本に関する一検討——禪長寺本を中心に——」『国文学 言語と文芸の会』2012

年度大会発表、於明治大学駿河台キャンパス、2012年12月9日。

- ・「文学部日本文学科「国語表現法2」指導実践報告—大学における国語表現指導の試みと展開（二）」（安達原達晴・千金楽健との共著）『東海大学紀要（文学部）』94、2011年3月、pp.111-136。
- ・「幕末期の遊行寺における阿弥号授与—細木香以外の活動を中心に」『東海大学日本語・日本文学研究と注釈』1、2010年12月、pp.19-40。
- ・（解題）「【解題】添削・歌評資料」『新編荷田春満全集』12、2010年2月、pp.686-716。

## 武田幸也 PD 研究員 近代神道史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

### 【論文】

- ・「神宮教の教説に関する一考察—藤井稜威の著作を中心に—」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第50号、2013年11月、pp.607-634。
- ・「近代伊勢信仰研究の課題と展望」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第6号、2014年3月、pp.85-111。
- ・「明治後期における神宮奉斎会と皇典講究所—「祭祀」と「宗教」をめぐって—」『國學院大學 校史・学術資産研究』第6号、2014年3月、pp.71-109。

### 【口頭発表】

- ・「神宮奉斎会の成立過程とその変化」神道宗教学会第67回学術大会、於國學院大學、2013年12月8日。
- ・「神宮教・神宮奉斎会における神風講社」第39回講研究会例会、於駒澤大学、2014年2月22日。

## 市田雅崇 共同研究員 民俗宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

## 一戸渉 共同研究員 日本近世文学

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

## 今井信治 共同研究員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

### 【口頭発表】

- ・“Alternative Tourism in Japan: In the case of anime ‘sacred pilgrimages’” 宗教とツーリズム研究会、於筑波大学、2013年6月24日。
- ・「都市に投射される聖地空間—アニメ『聖地巡礼』を事例に一」第43回東アジア人類学研究会・第25回中国ムスリム研究会共催、於東京大学、2013年6月29日。
- ・“Implicit Religion” 概念の展開」日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月8日。

### 【その他】

- ・（書評）「宗教がわかる Book ガイド（2013年刊）」（相澤秀生・光成歩・虫賀幹華と共著）『宗教と現代がわかる本2014』平凡社、2014年3月、pp.268-277。

## 小田真裕 共同研究員 日本近世史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

## イグナシオ・キロス (QUIROS, Enrique Ignacio Luis) 共同研究員 上代の国学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」



イヴ・カドー (CADOT, Yves) 共同研究員 日本学、日本武道研究  
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

小堀馨子 共同研究員 古代ローマ宗教研究  
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

野口生也 共同研究員 宗教人類学、ペンテコスタリズム研究  
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[口頭発表]

- ・「ペンテコスタリズムの越境性—韓国から日本への展開—」日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月7日
- ・「越境するペンテコスタリズム—日本における韓国系教会の事例から—」「宗教と社会」学会「東アジアにおけるキリスト教の越境と交流」プロジェクト第1回研究会、於國學院大學、2013年11月30日

藤井麻央 共同研究員 宗教学、近代日本宗教史  
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[研究紹介]

教派神道体制に編入された初期新宗教のうち金光教を主な事例として、教団組織の形成・展開を研究している。特に、教師養成や普通教育に関する教団の機関が、近代日本の宗教を取り巻く社会環境や宗教行政との関係でどのように形成され、それらの機関が教団運営にどのような影響を与えたのかについて関心を持っている。

[論文]

- ・「大正期の金光教における「めぐり」論の浮上とその背景」『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』45、2014年3月、pp.91-109。
- ・「天理教有志の支援活動—活動様態の構成に着目して（東日本大震災と宗教—福島県いわき市の事例から）」『宗教学年報』29、2014年3月、pp.121-140。

[口頭発表]

- ・「金光教第二世代による「一般の宗教の研究」とその背景」日本宗教学会第72回学術大会、於國學院大學、2013年9月7日。
- ・「新宗教における教育機関の機能—明治後期の金光教の事例」神道宗教学会第67回学術大会、於國學院大學、2013年12月8日。

[2012年度までの主な研究業績]

- ・「新宗教教団の震災対応と組織比較—天理教と創価学会を事例として」『宗教学年報』27、2012年3月、pp.145-150。

村上晶 共同研究員 宗教社会学、シャーマニズム研究  
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・“From miko to spiritual therapist: shamanistic initiations in contemporary Japan” *Journal of Religion in Japan* 3(1), Brill, (co-written with Ioannis Gaitanidis).

[口頭発表]

- ・「巫俗の継承について—弘前市の村祈祷を事例として—」日本宗教学会第72回学術大会、國學院大學、2013年9月。

ヤニス・ガイタニデイス (GAITANIDIS, Ioannis) 共同研究員

医療人類学、宗教社会学、日本学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

山梨有希子 共同研究員 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

オリガ・ヤゾフスカヤ (YAZOVSKAYA, Olga) 共同研究員 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

土屋博 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

ナカイ・ケイト (NAKAI, Kate W) 客員教授 日本思想史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

林淳 客員教授 日本宗教史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」

星野英紀 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

山中弘 客員教授 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[単行本]

・『世界は宗教とこうしてつきあっている』（藤原聖子と共編）弘文堂、2013年12月。

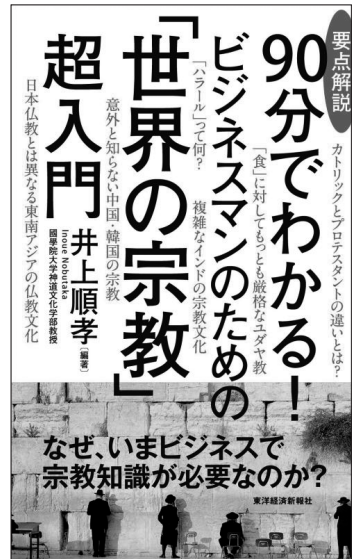
## 出版物紹介

井上順孝編著『要点解説 90分でわかる！ ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』  
(東洋経済新報社、2013年10月)

### 内容紹介

主としてビジネスマンを対象に、日本と世界の宗教についての基礎的知識を養ってもらうことを目的として編集された新書判の書。次のような構成になっている。

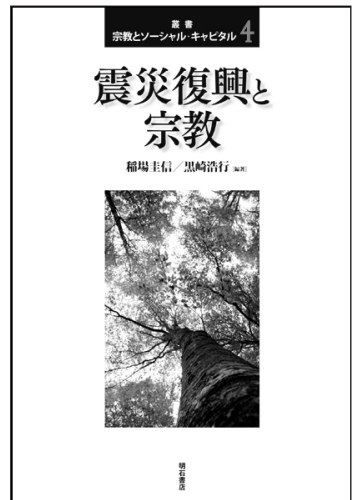
第1章 なぜ、いまビジネスで宗教知識が必要なのか？…グローバル化と宗教（井上順孝）、第2章 自分たちの宗教のこときちんと知っていますか？…日本の宗教（井上順孝）、第3章 世界に離散した民族が守っている戒律…ユダヤ教（井上まどか）、第4章 国を超えるキリスト教 国ごとにまとまるキリスト教…カトリック&オーソドックス（井上まどか）、第5章 さまざまに分かれ、独特な教えの教派も出現…プロテスタント（井上順孝）、第6章 戒律に従って暮らすとは、どういうことか？…イスラム（八木久美子）、第7章 多彩な信仰が織りなす多文化社会の混沌と秩序…インドの宗教（冨澤かな）、第8章 日本の仏教とどこが大きく異なるのか？…上座仏教（矢野秀武）、第9章 意外と知らない中国や韓国の宗教文化…東アジアの宗教（井上順孝）



稲場圭信・黒崎浩行編著『震災復興と宗教（叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 4）』  
(明石書店、2013年4月)

### 内容紹介

2012年から2013年にかけて刊行された叢書「宗教とソーシャル・キャピタル」全4巻の最終巻。同叢書は2006年に発足した「宗教と社会」学会の「宗教の社会貢献活動研究」プロジェクトと、それを発展的に受け継いだ「宗教と社会貢献」研究会の活動を背景とし、既刊として第1巻『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』、第2巻『地域社会を作る宗教』、第3巻『ケアとしての宗教』がある。本書は、特に2011年に起きた東日本大震災からの復興と、そこに宗教がどのように関わっているのかという問題に焦点を合わせ、現在進行形の問題としてこれを論じている。構成は「総説」に続けて「第I部 震災救援・復興における宗教者の支援活動」（第一章～第四章）、「第II部 連携・ボランティアの動き」（第五章～第八章）、「第III部 宗教的ケア・復興への関わり」（第九章～第十一章）となっており、本研究スタッフである黒崎浩行が稲場圭信と共同で編集を務め、また第II部第二章「神社神道の活動」を執筆している。



## テレビ放映・番組紹介

2013年9月6日に國學院大學学術メディアセンター一階常磐松ホールで開催された公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」（日本宗教学会主催・國學院大學日本文化研究所共催）の様子が、衛星放送「スカイパーフェクTV！」の「ベターライフチャンネル」（216ch）の番組「精神文化の時間」（撮影・制作：株式会社 精神文化映像社）において下記のように1時間番組として放送された。なお、同番組はiPhoneアプリの「stylecast viewer」、Androidアプリの「ivy」においてもオンタイムで視聴が可能であった。

### ○「ネットワークする宗教研究」

2013年10月30日（水）21：30～22：30

